

市原市山田橋^い亥^{かい どう}の海道貝塚

1 9 9 2

日 本 石 油 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、市内を南北に貫流する養老川を擁するたいへん自然環境に恵まれた地であり、原始より多くの人々が生活を営んできました。このことは本市に残された各時代の多くの遺跡が教えてくれるところでもあります。

一方、首都圏の都市化の波はわたくしたちのすむ市原市にも徐々に押し寄せてきており、交通網の整備・住宅建設・レジャー施設の建設などが日々進められております。このような開発行為は、現代を生きる者にとって不可欠なものでありますが反面、古来より残されてきた重要な文化遺産の破壊にもつながります。したがって、開発との調和を図りながら文化財を保護し、後世の人々に伝えてゆく努力が必要であります。

市原市とくに国分寺台周辺には、全国的にも有名な西広・山倉・祇園原などの大型貝塚をはじめとする縄文時代の貝塚が数多く存在し、貝塚研究には欠くことのできない地域となっております。今回ガソリンスタンド建設に伴い発掘調査され、ここに報告する「山田橋亥の海道具塚」もこの一角に存在し、小規模な貝塚ながらも当時の食生活を中心とした貴重な情報を提供してくれました。

本報告書は、この調査成果をまとめたものであり、学術資料としてばかりでなく、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆様にも活用されることを願ってやみません。

最後に、千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会文化課・日本石油株式会社をはじめとする関係諸機関・諸氏の御指導・御協力に深く感謝いたします。

平成4年3月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉県市原市山田橋字表通173-1番地所在の、山田橋亥の海道具塚遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、ガソリンスタンド建設に先行して実施されたものであり、日本石油株式会社の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターがおこなった。
3. 調査対象面積は1,862㎡であり、うち10%にあたる186㎡について確認調査を実施し、この結果をうけ、調査対象地区全域に対して本調査をおこなった。
4. 発掘調査、整理作業は、下記のとおりおこなった。

確認調査	平成2年11月8日～平成2年11月27日（国庫・県費補助の平成2年度市内遺跡発掘調査で対応 市原市教育委員会「市原市内遺跡発掘調査報告書」1991.3）	調査担当	忍澤成視
本調査	平成3年3月1日～平成3年6月7日	調査担当	忍澤成視
整理作業	平成3年6月8日～平成4年2月28日	整理担当	忍澤成視
5. 本書の執筆、作成は忍澤が担当した。動物遺存体の同程、分析は早稲田大学講師金子浩昌氏に委託した。線刻土器の文字の解読については国立歴史民俗博物館平川南教授の御教示をえた。
6. 財団法人市原市文化財センター調査コードはセ127である。
7. 遺跡の名称は確認調査時点では、市の遺跡台帳に基づき山田橋表通遺跡として扱っていたが、この調査結果から貝塚をともなう縄文時代の集落遺跡としての性格が強いと判断されたため、山田の橋亥の海道貝塚に変更した。
8. 本書を作成するにあたり、当センター大村直氏・木對和紀氏・高橋康男氏・近藤敏氏、長生郡市文化財センター菅谷通保氏、千葉県文化財センター加納実氏、早稲田大学文学部考古学資料室樋泉岳二氏より御教示をえた。記して謝意を表したい。

凡 例

- 1 石器・石製品実測図中の記号の意味は、次のとおりである。

刃部	←▽→	摩耗強	←●●→
摩耗痕	←●→	敲打強	←○○→
敲打痕	←○→		
凹み状の摩耗	←▼→		
敲打面			

- 2 遺構実測図中のトーンは次のことを示す。

焼土（炉）	
硬化面	

財団法人 市原市文化財センター組織表

平成2年度

役員				
理事長	星野 一郎 (教育委員会教育長)	調査課		
副理事長	栗林 繁 (教育委員会社会教育部長)	課	長	矢戸 三男
乗務理事	淵本 献司 (専任)	主任調査研究員		田中 清美
理事	滝口 宏 (早稲田大学名誉教授)	主任調査研究員		浅利 幸一
理事	寺村 光晴 (和洋女子大学教授)	調査研究員		大村 直
理事	海上 信久 (姉崎神社宮司)	調査研究員		近藤 敏
理事	根本 正夫 (市企画部長)	調査研究員		高橋 康男
理事	露崎 繁 (市総務部長)	調査研究員		木對 和紀
理事	石井 作二 (市財務部長)	調査研究員		忍澤 成視
理事	坂本 忠夫 (市都市計画部長)	調査研究員		田中 茂良
監事	佐久間 章 (市会計課長)	調査研究員 (囑託)		田中 新史
監事	小宮 仁 (教育委員会総務課長)	調査研究員 (囑託)		半田 堅三
職員		主	事	高浦 貞子
庶務課				
課長	田丸 萬富			
主事	大鐘 光江			
主事	永野 健一			

平成3年度

役員				
理事長	星野 一郎 (教育委員会教育長)	調査課		
副理事長	斎藤 崇雄 (教育委員会社会教育部長)	課	長	矢戸 三男
乗務理事	淵本 献司 (専任)	主任調査研究員		田中 清美
理事	滝口 宏 (早稲田大学名誉教授)	主任調査研究員		浅利 幸一
理事	寺村 光晴 (和洋女子大学教授)	調査研究員		大村 直
理事	海上 信久 (姉崎神社宮司)	調査研究員		近藤 敏
理事	根本 正夫 (市企画部長)	調査研究員		高橋 康男
理事	露崎 繁 (市総務部長)	調査研究員		木對 和紀
理事	石井 作二 (市財務部長)	調査研究員		忍澤 成視
理事	佐野 年男 (市都市計画部長)	調査研究員		田中 茂良
監事	佐久間 章 (市会計課長)	調査研究員 (囑託)		半田 堅三
監事	小宮 仁 (教育委員会総務課長)	主	事	高浦 貞子
職員				
庶務課				
課長	田丸 萬富			
主事	大鐘 光江			
主事	永野 健一			

本文目次

序文

例言

財団法人市原市文化財センター組織表

I 序説

1 調査に至る経緯	1
2 遺跡の立地と環境	1
3 調査概要	6

II 遺構と遺物

1 住居址	6
2 溝	22
3 土坑	25
4 遺構出土の自然遺物	31

III 貝塚

1 貝塚の調査方法と概要	33
2 貝層出土の人工遺物	48
a 3c層(混土貝層)ブロック別貝層の概要と出土土器	48
b 3b層(混貝土層)出土土器	66
c 石器・石製品	74
d 土製品	77
e 骨角貝製品	79
f その他の遺物	82
3 貝層出土の自然遺物	83
a 軟体動物門(腹足綱・斧足綱・微小貝種)	83
b 節足動物門(甲殻綱)	95
c 脊椎動物門(軟骨魚綱・硬骨魚綱・両棲綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱)	96
d 人骨	124
e 植物(炭化物)	124

IV 遺物包含層

1 遺物包含層の調査方法と概要	125
2 包含層出土の人工遺物	133
a 土器	133
b 石器・石製品	172
c 土製品	179
3 包含層出土の自然遺物	185

V まとめ	187
-------	-----

挿図目次

第1図	山田橋亥の海道貝塚 調査範囲と周辺地形図	… 1	第62図	貝層出土石器・石製品(1)	… 76
第2図	市原市内貝塚遺跡分布図	… 3・4	第63図	貝層出土石器・石製品(2)	… 77
第3図	遺構配置図	… 5	第64図	貝層出土土製品	… 78
第4図	貝層および遺物包含層分布範囲	… 5	第65図	貝層出土骨角貝製品	… 81
第5図	1号住居址実測図および出土遺物	… 7	第66図	3b層出土鉄製品・古銭	… 82
第6図	2号住居址実測図	… 8	第67図	貝種組成(1) (ブロック別)	… 87
第7図	2号住居址出土遺物	… 9	第68図	貝種組成(2) (層位別)	… 88
第8図	3号住居址実測図および出土遺物(1)	… 11	第69図	貝種組成(3) (サンプル地点別)	… 89・90
第9図	3号住居址出土遺物(2)	… 12	第70図	ブロック別ハマグリ of 殻高分布	… 91・92
第10図	4・5・6号住居址実測図	… 13・14	第71図	1号人骨	… 124
第11図	4号住居址遺物出土状況	… 16	第72図	グリッドおよびトレンチ配置図	… 125
第12図	4号住居址出土遺物(1)	… 16	第73図	2層遺物分布範囲	… 126
第13図	4号住居址出土遺物(2)	… 17	第74図	3層遺物分布範囲	… 126
第14図	4号住居址出土遺物(3)	… 18	第75図	4層遺物分布範囲	… 127
第15図	5号住居址出土遺物	… 19	第76図	5層遺物分布範囲	… 127
第16図	6号住居址遺物出土状況および石器実測図	… 20	第77図	4～5層遺物分布範囲	… 128
第17図	6号住居址出土遺物(1)	… 20	第78図	6・7層遺物分布範囲	… 128
第18図	6号住居址出土遺物(2)	… 21	第79図	遺物包含層断面図(1)	… 129・130
第19図	1号溝実測図および出土遺物	… 22	第80図	遺物包含層断面図(2)	… 131・132
第20図	2号溝実測図および出土遺物	… 23	第81図	遺物包含層層位別土器組成	… 133
第21図	3号溝実測図および出土遺物	… 25	第82図	2層出土土器(1)	… 135
第22図	4号溝実測図および出土遺物	… 26	第83図	2層出土土器(2)	… 136
第23図	1～10号土坑実測図	… 27	第84図	2層出土土器(3)	… 137
第24図	11号土坑実測図	… 29	第85図	3層出土土器(1)	… 140
第25図	土坑出土遺物	… 30	第86図	3層出土土器(2)	… 141
第26図	貝層分布範囲	… 34	第87図	3層出土土器(3)	… 142
第27図	貝層部分断面図	… 35・36	第88図	3層出土土器(4)	… 143
第28図	貝層出土土器組成	… 41	第89図	3層出土土器(5)	… 144
第29図	3c層中内容物のブロック別検出量比較	… 42	第90図	3層出土土器(6)	… 145
第30図	3c層中内容物のサンプル地点・層位別検出量比較	… 43～46	第91図	3層出土土器(7)	… 146
第31図	Iブロック貝層平面・断面図	… 48	第92図	3層出土土器(8)	… 147
第32図	Iブロック貝層出土土器	… 48	第93図	4層出土土器(1)	… 149
第33図	IIブロック貝層平面・断面図	… 50	第94図	4層出土土器(2)	… 150
第34図	IIブロック貝層出土土器(1)	… 50	第95図	4層出土土器(3)	… 151
第35図	IIブロック貝層出土土器(2)	… 51	第96図	4層出土土器(4)	… 152
第36図	IIIブロック貝層平面・断面図	… 52	第97図	4層出土土器(5)	… 153
第37図	IIIブロック貝層出土土器	… 53	第98図	4層出土土器(6)	… 154
第38図	IVブロック貝層平面・断面図	… 54	第99図	4層(貝層下)出土土器(1)	… 156
第39図	IVブロック貝層出土土器	… 55	第100図	4層(貝層下)出土土器(2)	… 157
第40図	Vブロック貝層平面・断面図	… 56	第101図	4層(貝層下)出土土器(3)	… 158
第41図	Vブロック貝層出土土器(1)	… 57	第102図	5層出土土器	… 160
第42図	Vブロック貝層出土土器(2)	… 58	第103図	5層(貝層下)出土土器	… 161
第43図	VIブロック貝層平面・断面図	… 58	第104図	4～5層出土土器	… 163
第44図	VIブロック貝層出土土器	… 59	第105図	4～5層(貝層下)出土土器(1)	… 164
第45図	VIIブロック貝層平面・断面図	… 60	第106図	4～5層(貝層下)出土土器(2)	… 165
第46図	VIIブロック貝層出土土器	… 60	第107図	4～5層(貝層下)出土土器(3)	… 166
第47図	VIIIブロック貝層平面図、断面図および出土土器	… 61	第108図	4～5層(貝層下)出土土器(4)	… 167
第48図	IXブロック貝層平面・断面図	… 62	第109図	4～5層(貝層下)出土土器(5)	… 168
第49図	IXブロック貝層出土土器(1)	… 63	第110図	7層出土土器	… 169
第50図	IXブロック貝層出土土器(2)	… 64	第111図	谷部遺物包含層出土土器(1)	… 170
第51図	Xブロック貝層平面図	… 64	第112図	谷部遺物包含層出土土器(2)	… 171
第52図	Xブロック貝層出土土器	… 65	第113図	遺物包含層出土石器・石製品(1)	… 173
第53図	XIブロック貝層平面・断面図	… 65	第114図	遺物包含層出土石器・石製品(2)	… 174
第54図	XIブロック貝層出土土器	… 65	第115図	遺物包含層出土石器・石製品(3)	… 175
第55図	3b層出土土器(1)	… 67	第116図	遺物包含層出土石器・石製品(4)	… 176
第56図	3b層出土土器(2)	… 68	第117図	遺物包含層出土土製品(1)	… 180
第57図	3b層出土土器(3)	… 69	第118図	遺物包含層出土土製品(2)	… 181
第58図	3b層出土土器(4)	… 70	第119図	遺物包含層出土土製品(3)	… 182
第59図	3b層出土土器(5)	… 71	第120図	遺物包含層出土土製品(4)	… 183
第60図	3b層出土土器(6)	… 72	第121図	遺物包含層出土の骨角器	… 185
第61図	3b層出土土器(7)	… 73			

表目次

第1表	市原市内貝塚遺跡一覧	3
第2表	1号溝出土馬歯一覧	31
第3表	遺構出土魚類遺体出現数一覧	32
第4表	両棲綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱遺体出現数一覧(遺構)	32
第5表	貝層サンプル内容物組成(3c層)	37・38
第6表	貝層サンプル内容物組成(3b層)	39・40
第7表	3c層グリッド別・層位別土器組成	47
第8表	3b層グリッド別土器組成	66
第9表	貝層出土石器・石製品計測表	75
第10表	貝層出土土製品計測表	79
第11表	貝層出土骨角貝製品計測表	80
第12表	出土軟体動物種名一覧	83
第13表	3c層出土軟体動物出現数一覧	84
第14表	出土微小貝種名一覧	93
第15表	3c層出土微小貝種出現数一覧	94
第16表	検出された脊椎動物遺体の種名表	96
第17表	3c層出土魚類遺体出現数一覧	98~102・104~108
第18表	3b層出土魚類遺体出現数一覧	110・111
第19表	3c層出土魚類遺体の最少個体数	114
第20表	3c層出土ブロック別魚類遺体の推定最少個体数	115
第21表	両棲綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱遺体出現数一覧(3c層)	118~120
第22表	両棲綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱遺体出現数一覧(3b層)	121・122
第23表	貝層・遺物包含層出土人骨出現数一覧	124
第24表	2層グリッド別土器組成	134
第25表	3層グリッド別土器組成	139
第26表	4層グリッド別土器組成	148
第27表	5層グリッド別土器組成	159
第28表	4~5層グリッド別土器組成	162
第29表	7層グリッド別土器組成	168
第30表	谷部遺物包含層 層位・トレンチ別土器組成	171
第31表	遺物包含層出土石器・石製品計測表	177
第32表	礫の出土量(遺物包含層)	178
第33表	遺物包含層出土土製品計測表	184
第34表	遺物包含層出土魚類遺体出現数一覧	185
第35表	両棲綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱遺体出現数一覧(遺物包含層)	186
第36表	山田橋玄の海道貝塚の貝層部分の調査に要した作業量	187

写真図版目次

図版1	調査前風景、1号住居址、2号住居址、2号住居址遺物出土状況、3号住居址、3号住居址遺物検出状況、4・6号住居址、4号住居址 炉・遺物検出状況
図版2	4・5・6号住居址、6号住居址 炉、1号人骨、1号溝、1号溝 馬歯検出状況、2号溝、3号溝、4号溝
図版3	1号土坑、3・4・5・6号土坑、3号土坑、3号土坑断面、4号土坑、4号土坑断面、5・6号土坑、7号土坑
図版4	11号土坑、遺物包含層 基本層序、谷部遺物包含層、貝塚 遠景(北から)、貝塚 近景、Iブロック貝層 断面(A-A')、IIブロック貝層 断面(C-C')、IIIブロック貝層 断面(A-A')
図版5	IVブロック貝層 断面(A-A')、Vブロック貝層 断面(A-A' B-B')、V・VI・IXブロック貝層 断面(北から)、VIブロック貝層 断面(A-A')、VIIブロック貝層 断面(A-A')、貝塚調査作業工程 ①、②、③
図版6	貝塚調査作業工程 ④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪
図版7	貝塚調査作業工程 ⑫、⑬
図版7	8・9 遺構出土遺物 1号住居址、2号住居址、3号住居址、4号住居址、6号住居址、1号溝、2号溝、3号溝、4号溝、4号土坑、11号土坑
図版10	11 貝層出土土器(3c層) IIブロック、IIIブロック、IVブロック、Vブロック、VIブロック、VIIブロック、IXブロック、Xブロック
図版12	貝層出土土器(3b層)
図版13	貝層出土石器・石製品、貝層出土土製品、貝層出土金属製品
図版14	貝層出土骨・角・貝製品、貝層出土の自然遺物 <節足動物門：甲殻綱> <植物・堅果類>
図版15	<軟体動物門> 腹足綱・斧足綱・微小貝種
図版16	<脊椎動物門> 軟骨魚綱・硬骨魚綱
図版17	両棲綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱
図版18	19・20・21・22 遺物包含層出土土器 2層、3層、4層、4層(貝層下)、5層、5層(貝層下)、4~5層(貝層下)
図版22	谷部遺物包含層出土土器 3層、4層、5層、6層
図版23	遺物包含層出土石器・石製品・骨角器
図版24	遺物包含層出土土製品

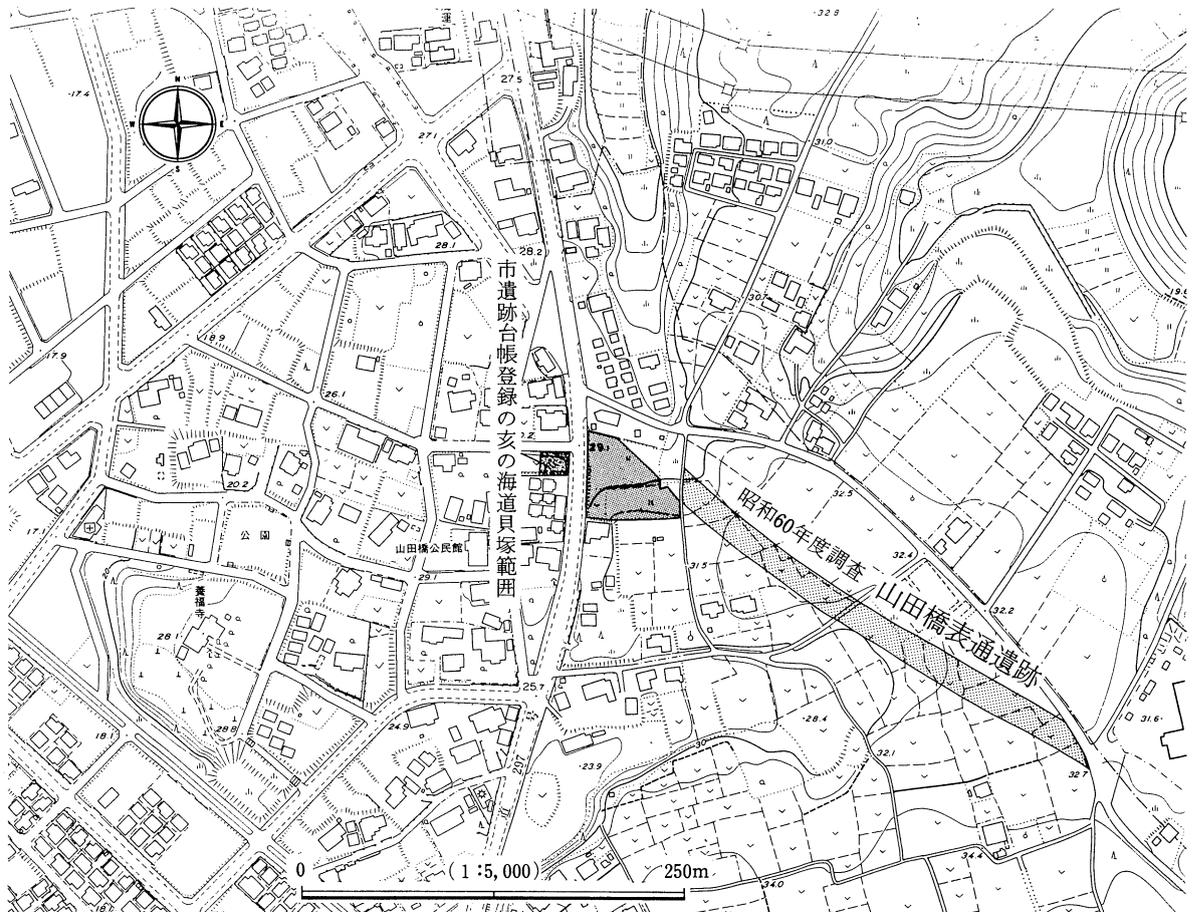
I 序 説

1 調査に至る経緯

平成2年、民間の日本石油株式会社より市原市山田橋字表通173-1番地における埋蔵文化財の有無に関する照会があり、文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが平成2年度市内遺跡発掘調査の一つとして同年11月8日より27日までの期間、対象面積の10%である186㎡について確認調査を実施し、引き続き整理作業を行ない、市原市教育委員会により報告書を刊行した（市原市教育委員会『平成2年度市内遺跡発掘調査報告書』1991.3）。この結果、対象地域が小規模な貝塚を伴う縄文時代後期を中心とする時期の集落の一部であることが明らかになった。そこで日本石油株式会社の委託により、ガソリンスタンドの建設が予定される地域のほぼ全域である1,862㎡に対して、平成3年3月1日から6月7日まで財団法人市原市文化財センターが本調査をおこなった。

2 遺跡の立地と環境（第1・2図）

今回の調査対象地域の周辺は市原市の遺跡台帳によると縄文時代から古墳時代の遺物包蔵地として



第1図 山田橋亥の海道貝塚 調査範囲と周辺地形図

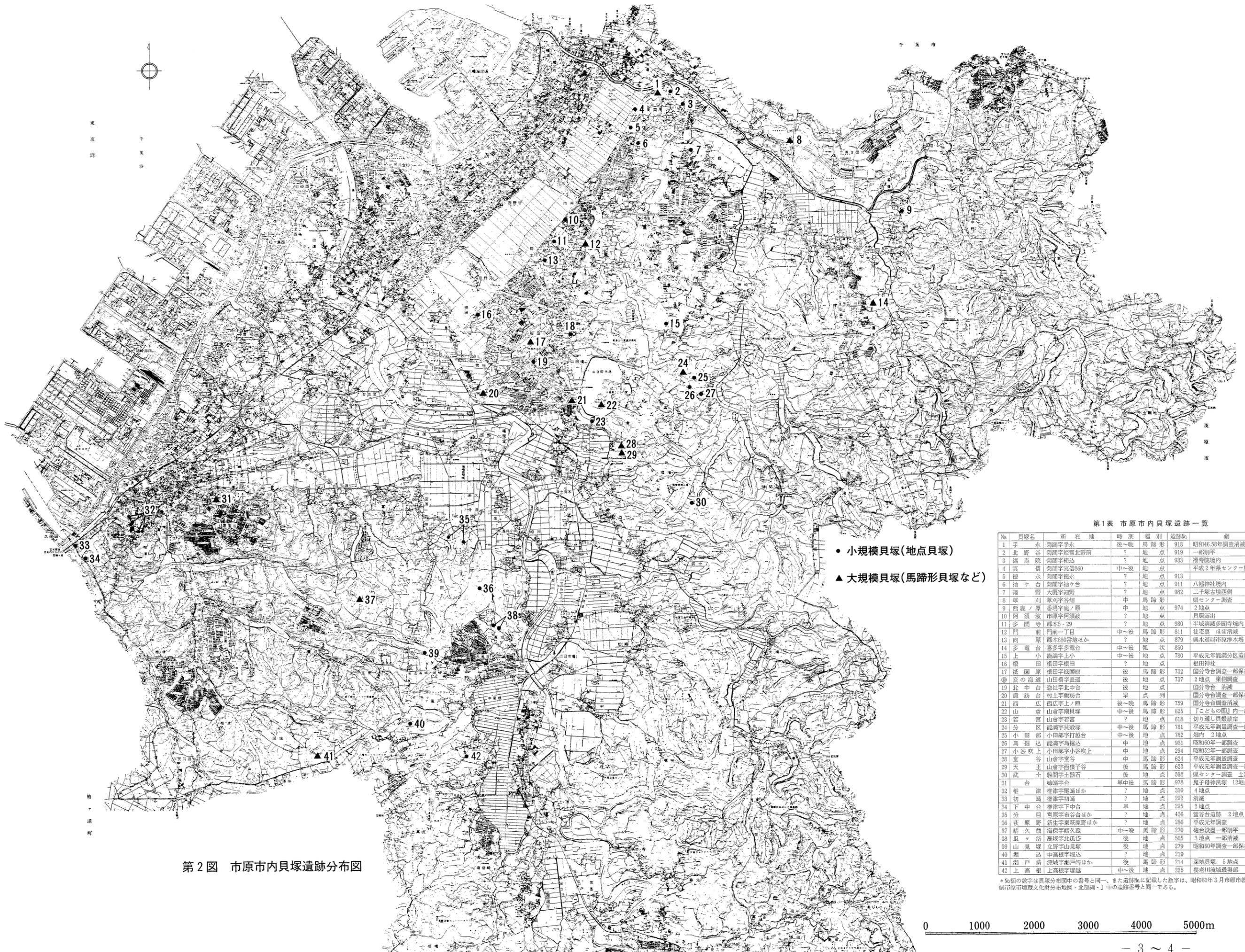
山田橋遺跡群の名称でとらえられている（市原市教育委員会「千葉県市原市埋蔵文化財分布地図―北部編―1988」）。そしてその一部であり今回の調査対象地域の東側に直接隣接する地域について、昭和60年度に都市計画道路君塚小田部線建設に伴う埋蔵文化財調査として山田橋表通遺跡の名称で実施され、弥生時代後期から古墳時代前期の集落の一部と古代官道の一部が検出された（近藤 敏「山田橋表通遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』1985）。また千葉県文化財保護協会による県内の貝塚分布調査では、国道297号線を挟んで両側の畑地（東側の畑地は今回の調査対象地域）に貝殻の散布する状況がとらえられたことが指摘され、2地点をあわせて亥の海道貝塚の名称で呼んでいる（千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』1983）。しかし市の遺跡台帳では、東側の地点の貝殻の散布については確認されておらず、西側の地点のみをとらえて亥の海道貝塚としている。このように、貝塚の有無については確認調査の時点では明らかでなかったことから、最も情報の確かな東側に隣接する地域の遺跡の名称である山田橋表通遺跡を使用した。そして確認調査の結果、調査対象地での縄文時代後期の貝塚と同時期の集落の一部の存在が明らかになったことから、遺跡名を山田橋亥の海道貝塚に変更した。

市原市内には、縄文時代に形成されたと考えられる貝塚が現在までに42カ所知られている（第2図・第1表）。その他に、弥生・古墳・奈良・平安時代に形成された小規模な貝塚も最近の調査例を含めてかなりの数が確認されており、今後も注意して見てゆけば類例はさらに増えてゆくことだろう。これら縄文時代以外の貝塚については、もう少し時期を待って別の機会に述べることにし、今回は縄文時代の貝塚についてのみ触れたい。

分 布 市原市内の貝塚の分布は、市の北部を東西に流れる村田川の流域とその支流沿い地区・村田川と養老川に挟まれたいわゆる市原台地上地区・市の西部の椎津川流域地区・養老川中流域の左岸台地上地区の4つに大きく分けられる。このうちこれまでに発掘調査され、その内容について明らかとなっているものは、市原台地上地区のものと村田川の流域地区の一部のものであり、椎津川流域地区と養老川中流域の左岸台地上地区のものについてはほとんど知られていない。

時 期 縄文前期を除く各時期のものがあるが、中期末から後期のものが主体であり、早期の貝塚を有する諏訪台遺跡は非常に貴重である。また千葉市域の貝塚と異なり縄文中期のみ形成された貝塚の少ないことも市原市の貝塚の特徴のひとつである。

種 別 貝塚はその規模によって大規模貝塚と小規模貝塚に分類できる。大規模貝塚とは小規模な地点貝塚の集合体であると考えられ、その分布の形態から点列・弧状（半月形）・馬蹄形（環状）などにわけられ、数10mから150mを越える規模のものまである。小規模貝塚は1から数地点の貝塚が不規則に分布する状態のもので、地点貝塚として分類されている。ただしその規模は、小さなピット内1～2地点（荻原野・上小貝塚）からなるものから数地点の遺構内（土坑・住居）や遺構外におよぶもの（小谷吹上・烏掘込・山見塚貝塚）もあり、その示す範囲は非常に広い。貝塚の規模や形態ばかりでなく、貝塚の内容をも含めた分類が今後貝塚を研究するうえで必要になってくるものと思われる。また現在確認されている貝塚は、発掘調査によって確認されたものと現地での貝殻の露呈の様子によって確認されたものとの両者からなっており、今後発掘調査によって周知の貝塚が別の分類でとらえられるものと判明したり、大規模貝塚は困難としても住居跡・土坑・ピットなどの遺構内に存在する小規模な貝塚を新たに発見できる可能性は十分にある。



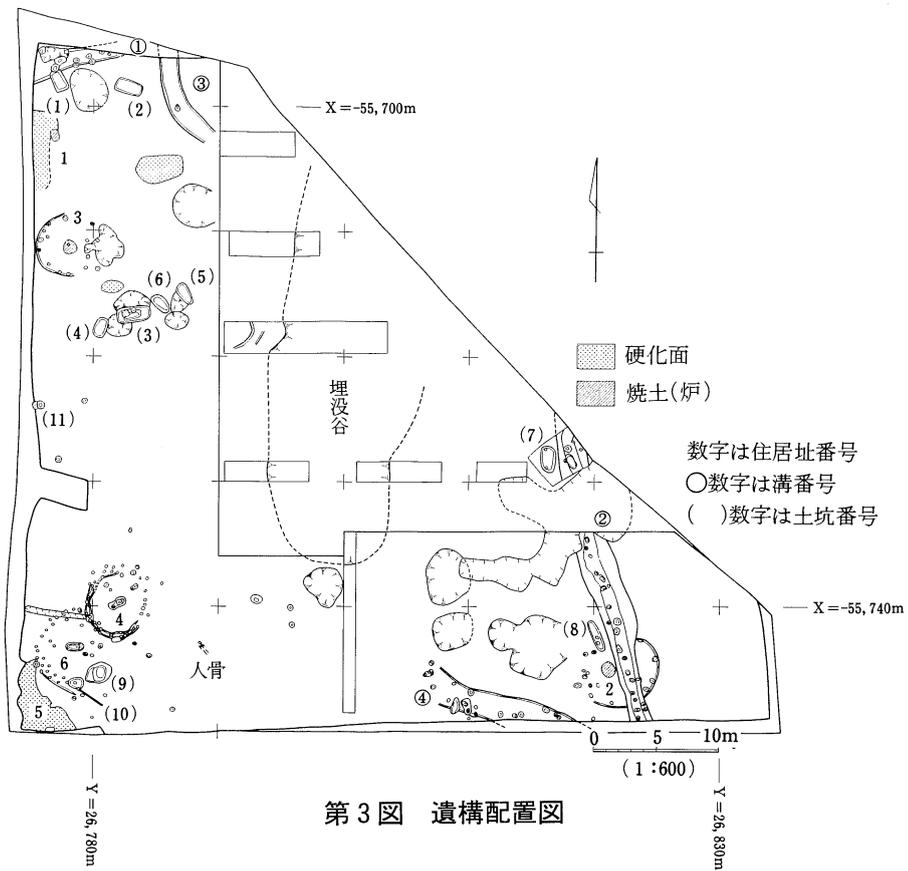
第2図 市原市内貝塚遺跡分布図

第1表 市原市内貝塚遺跡一覧

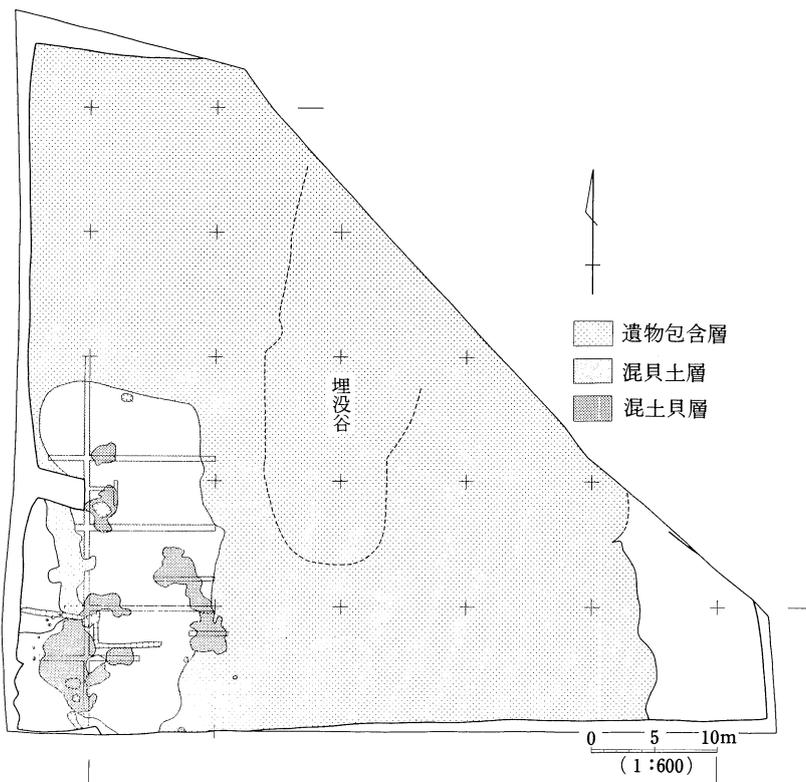
No.	貝塚名	所在地	時期	種別	遺跡No.	備考
1	手水	菊間字手水	後～晩	馬蹄形	918	昭和46.58年調査消滅
2	北野谷	菊間字北野前	?	地点	919	一部削平
3	福寿院	菊間字福込	?	地点	933	福寿院境内
4	突橋	菊間字突信860	中～後	地点	?	平成2年県センター調査
5	徳永	菊間字徳永	?	地点	913	
6	袖ヶ台	菊間字袖ヶ台	?	地点	911	八幡神社境内
7	畑野	大塚字畑野	?	地点	982	二子塚古墳西側
8	草刈	草刈字谷畑	中	馬蹄形	?	県センター調査
9	西蔵ノ原	委鳩字西蔵ノ原	中	地点	974	2地点
10	阿須波	市原市阿須波	?	地点	?	貝類出土
11	多聞寺	郡4.5-29	?	地点	980	半城消滅多聞寺境内
12	門前	門前一丁目	中～後	馬蹄形	811	社宅裏 ほぼ消滅
13	向原	郡本880番地ほか	?	地点	879	県水道局市原浄水場
14	多龜台	喜多字多龜台	中～後	孤状	850	
15	上小	能満字上小	中～後	地点	780	平成元年能満分区遺跡群として調査
16	根田	根田字根田	?	地点	?	根田神社
17	祇園原	根田字祇園原	後	馬蹄形	732	園分寺台調査一部保存
18	交の海邊	山田橋字交の海邊	後	地点	737	2地点 東側調査
19	北中台	惣社字北中台	後	地点	?	園分寺台 消滅
20	諏訪台	村上字諏訪台	早	点列	?	園分寺台調査一部保存
21	西広	西広字上ノ原	後～晩	馬蹄形	759	園分寺台調査消滅
22	山倉	山倉字南貝塚	中～後	馬蹄形	625	「こどもの園」内一部保存
23	若宮	山倉字若宮	?	地点	618	切り通し貝殻散布
24	分	能満字貝塚	中～後	馬蹄形	781	平成元年調査一部削平
25	小田部	小田部字打越台	中～後	地点	782	畑内 2地点
26	馬場	能満字馬場	中	地点	981	昭和60年一部調査 5地点
27	小谷吹上	小田部字小谷吹上	中	地点	294	昭和52年一部調査
28	堂	山倉字堂	中	馬蹄形	624	平成元年調査
29	天王	山倉字西橋子谷	後	馬蹄形	623	平成元年調査一部削平
30	武士	胸間字土笛石	後	地点	592	県センター調査 土器石貝塚
31	台	袖崎字台	早中後	馬蹄形	978	鬼子母神貝塚 12地点
32	津	椎津字尾崎ほか	?	地点	310	4地点
33	初	能満字初	?	地点	292	消滅
34	下中台	能満字下中台	早	地点	285	2地点
35	分	喜原字分谷台ほか	?	地点	436	堂谷台跡 2地点
36	萩原	新生字萩原野ほか	?	地点	286	平成元年調査
37	節久	海保字節久	中～晩	馬蹄形	270	総合設置一部削平
38	瓜ヶ谷	高坂字瓜ヶ谷	後	地点	505	3地点 一部消滅
39	山見塚	立野字山見塚	後	地点	279	昭和60年調査一部保存
40	堀	中高根字堀	?	地点	219	
41	瀬戸	深城字瀬戸ほか	後	馬蹄形	214	深城貝塚 5地点
42	上高根	上高根字塚越	中～後	地点	225	養老川流域段段部

● 小規模貝塚(地点貝塚)
▲ 大規模貝塚(馬蹄形貝塚など)

0 1000 2000 3000 4000 5000m



第3図 遺構配置図



第4図 貝層および遺物包含層分布範囲

山田橋亥の海道具塚は、山倉・西広・祇園原・分区・天王・堂谷貝塚など、市原市内でも特に大規模貝塚の集中する国分寺台を中心とする地域の一角にある小規模貝塚として存在する。

3 調査概要（第3・4図）

確認調査の結果、調査対象地域にはその中央部に、北側から南側にかけて埋没谷が存在し、この谷部にむかって調査区のほぼ全域にわたって縄文時代中期から後期の遺物包含層が分布し、その下に少なからず遺構の存在していること、さらに調査区の南西部には約300㎡にわたって貝塚が存在することが判明した。したがって調査手順としては、多量に排出される廃土の処理方法も考慮して調査区を2分し、まず調査区の西側と南側の平坦部・緩斜面部について遺物包含層と貝塚の調査をおこない、これが終了した時点でその下部に存在する遺構の調査をおこなった（それぞれの調査方法については各章で詳述する）。そして谷部については、遺物包含層の内容と遺構の有無を調べるためにトレンチ調査をおこなった。

調査の結果、遺物包含層中からは縄文時代中期後半から後期中葉までの時期を主体とする多量の土器・石器・土製品を、11地点の遺構内・遺構外に形成された小規模貝層とその周囲に広がる混貝土層からなる貝塚からは、貝類・魚骨・獣骨などの自然遺物、埋葬人骨1体、石器・土製品・骨角貝製品を検出し、遺物包含層・貝塚下部とその周辺からは縄文時代の住居址5軒、土坑10基、平安時代の住居址1軒、溝4条などの遺構とこれに伴う遺物を検出した。

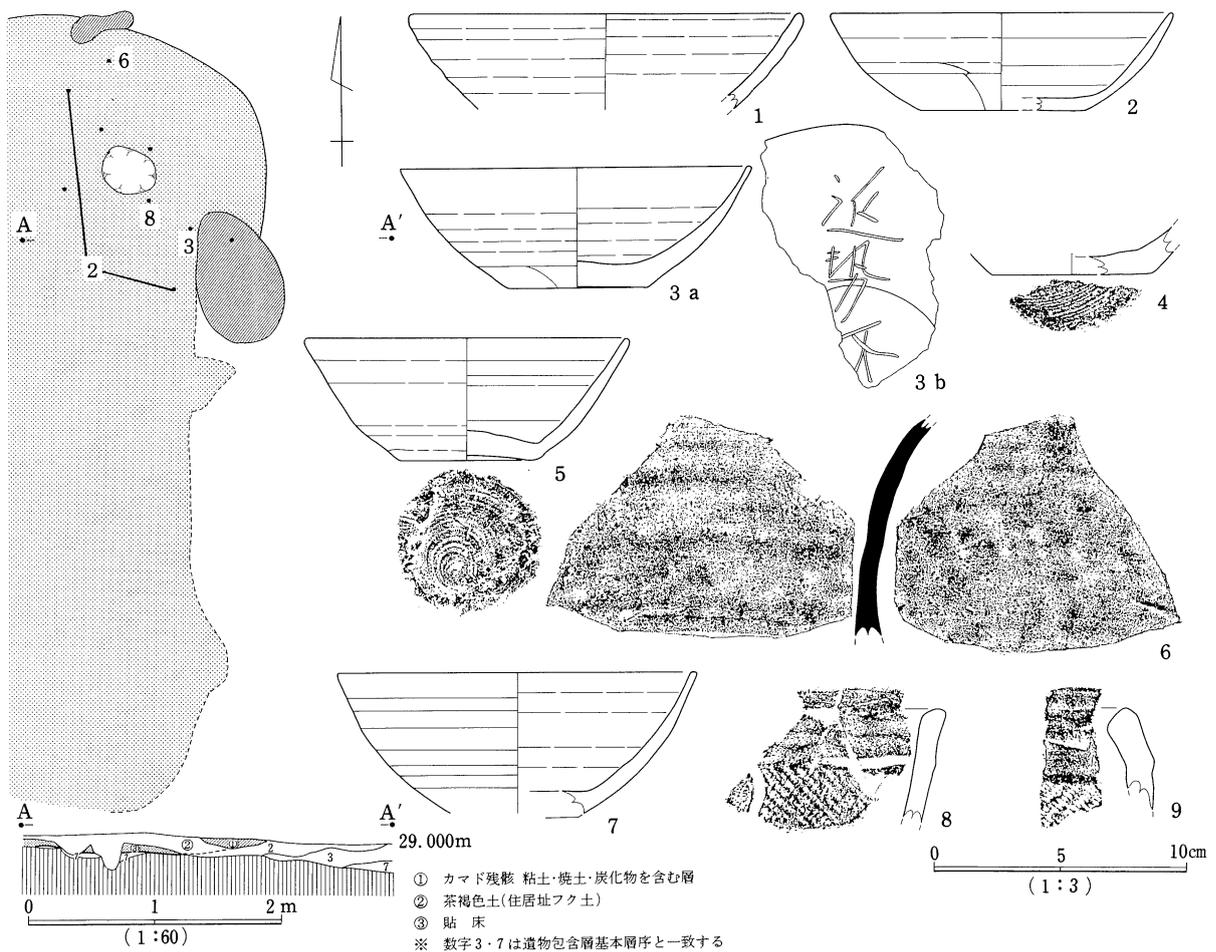
II 遺構と遺物

1 住居址

1号住居址（第5図）

調査区の北西部隅より検出された。検出面は表土下10cmほどのところであり、遺構の残存状況は非常に悪い。住居の壁の部分は検出できず、床状の硬化面とカマドの痕跡が確認できたのみである。また住居の西側半分は国道によって切られ、柱穴も検出できなかったため住居規模の推定も困難である。

遺物は数点の土師器の坏と須恵器の甕、縄文土器の破片数点である。1は土師器の坏の口縁部破片で、現存量は1/3、口径推定15.4cm。2は土師器の坏の口縁部から底部にかけての破片で現存量は1/2、口径推定13.6cm、底径推定6.6cm、器高3.9cm、体部下半から底部にかけて外面へラケズリ。3は土師器の坏の口縁部から底部にかけての破片で現存量は1/4、口径推定14.0cm、底径推定5.5cm、器高4.8cm、体部下半から底部にかけて外面へラケズリ、体部から底部にかけて3文字の線刻が認められる。国立歴史民俗博物館平川南教授に文字の解読をお願いしたところ、「延勢不□」と読み、否定を意味する不の後にもう1文字あって文章となっていたもので、延勢については僧侶の名前の可能性もあるとの指摘を受けた。4は土師器の坏の底部破片で現存量は1/3、底径推定6.3cm、糸切り底である。5は土師器の坏の口縁部から底部にかけての破片で現存量は1/2、口径推定13.0cm、底径5.2cm、器高4.9cm、糸切り底である。6は須恵器の甕の破片である。7は土師器の坏の口縁部の破片で現存量は1/7～1/8、口径推定14.4cmである。このほかにも図示できなかったが、外面にへラケズ



第5図 1号住居址実測図および出土遺物

りの認められる土師器の坏の底部破片が3点出土している。8・9は縄文土器の破片である。住居址が縄文時代の遺物包含層を掘り込んで作られたために混入したものとみられる。8は堀之内I式、9は加曾利E式の深鉢形土器の破片である。この他にも数点の破片が出土している。

出土遺物より当住居址を9世紀の所産とみたい。

2号住居址 (第6・7図)

調査区の南東隅より検出された。住居のほぼ中央部を2号溝によって切られている。住居の東側と南側部分では壁が検出できたが、北側は2号溝によって壊され、西側は緩斜面部にかかっているため検出できなかった。ただし、柱穴は検出されているのでおよその規模は推定できる。住居の直径は6～6.5m、斜面側の北西方向に出入り口部をもっていたものと想定され、したがって炉址は出入り口部よりとなる。壁の高さは最高で30cmである。柱穴の深さは住居の西側がやや浅く50～90cm、住居の東側が120cmである。炉は直径約1～1.2mで、中央部が1段低くなり深さは約35cm、一部によく焼けた面がある。また住居の北西部に住居以前に作られたとみられる土坑(8号)が検出された。

遺物は住居址の中央部を2号溝によって切られているためもありあまり多くないが、住居の北西部



第7图 2号住居址出土遺物

と南東部の壁近くと炉址内から比較的良好な資料を得ることができた。また2号溝内からも縄文土器の破片が出土しており、このうち平面的にみて当住居址の覆土から流れ込んでいる可能性のあるものについては、そのうちの数点をここで扱うこととし図示した。

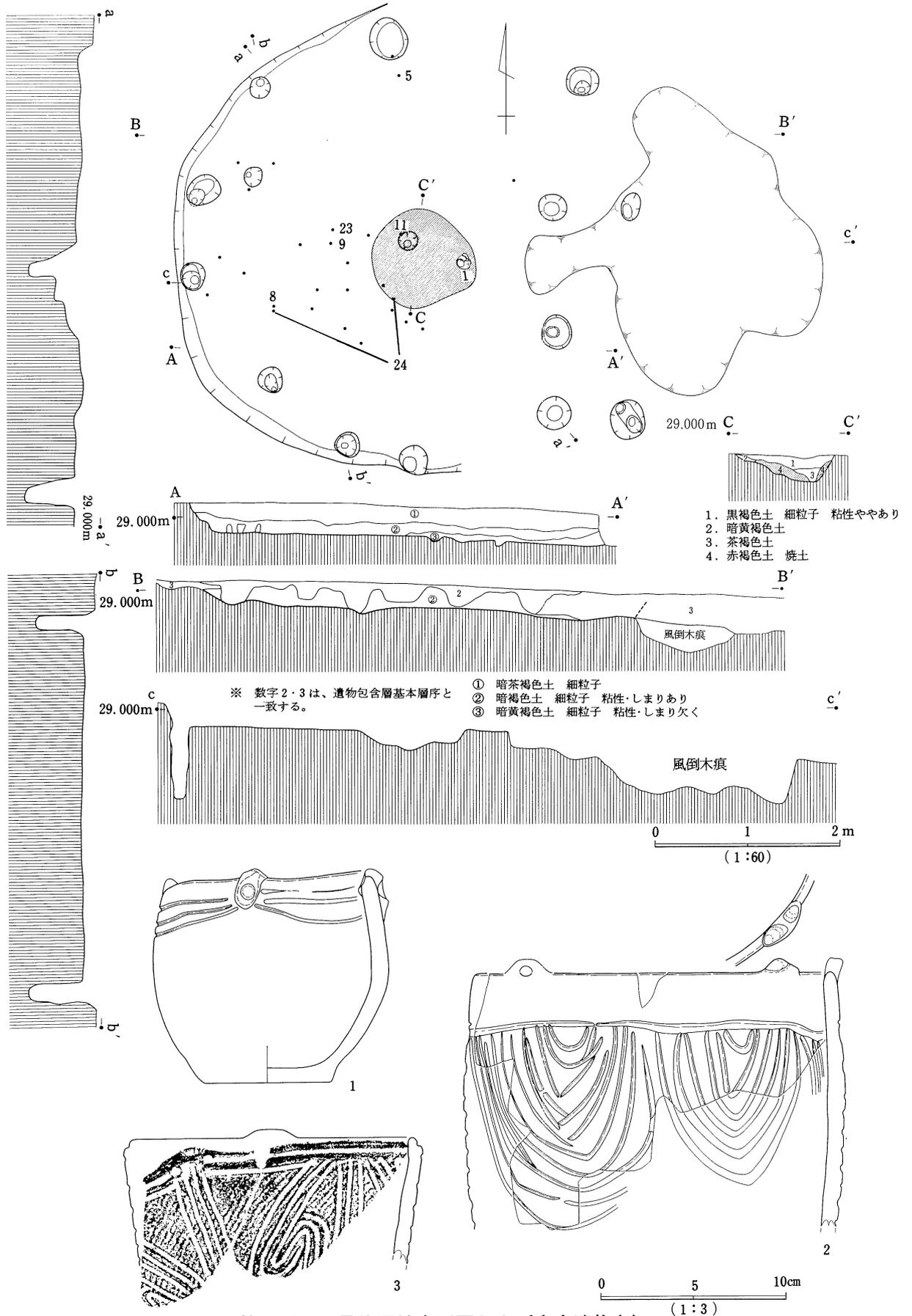
1から6は加曾利E式の胴部破片であり、縦位に縄文が磨り消されている。7は称名寺式の胴部破片である。8から16は堀之内I式である。このうち13は住居の北西部隅より床面から少し浮いた状態で検出されたもので、器形は浅鉢形に近い。口径推定28.7cm、底径8.6cm、器高17.2cm、口縁部直下より胴部下半までLR単節縄文をほどこす。14は住居の南東部壁際柱穴直上から、床面のレベルより少し上で検出された深鉢形土器である。器高31.4cm、底径9.0cm、3単位の波状口縁をもつ。口縁の下に、そのカーブに沿って2条の沈線をめぐらす、波状口縁下ではハの字状の沈線がもう1条付加される。沈線以下は胴部上半まで、RL単節縄文をほどこす。15は炉址内覆土より検出された深鉢形土器の口縁部破片である。口径推定18.5cm、現器高18.4cm。直接接合はしないが、土器の色調・胎土・地文などから考えて12も同一個体とみられ、したがって2～3単位の波状口縁をもつものと推定される。口唇部に浅い沈線をめぐらし、口縁部直下よりLR単節縄文をほどこす。16は住居の南東部壁際柱穴直上から、床面のレベルより少し上で検出された深鉢形土器の破片である。波状口縁をなし、口唇部に沈線をめぐらしその始点と終点に円形の刺突文をほどこす。口縁部直下よりLR単節縄文をほどこす。8は沈線による格子状の文様がみられる。9には縦方向の沈線文がみられる。10は櫛状の工具による曲線文様をもつものである。17・18は堀之内II式である。17には口縁部の内面にも文様がみられる。19・20は加曾利B式である。20は粗製土器である。25は叩き石兼磨石で3側面に浅い窪み状の敲打痕、4側面に磨耗痕が認められる。最大長8.5cm、最大幅(6.3cm)、最大厚5.7cm、重さ410g、石質は砂岩である。24は石皿の破片である。裏面は凹石としても使用されている。最大長(5.9cm)、最大幅(5.1cm)、最大厚3.4cm、重さ93g、石質は安山岩である。

数点の異時期の土器片もあるが主体は堀之内I式であり、出土状況からも考えて当住居址を堀之内I式期の所産と考えたい。

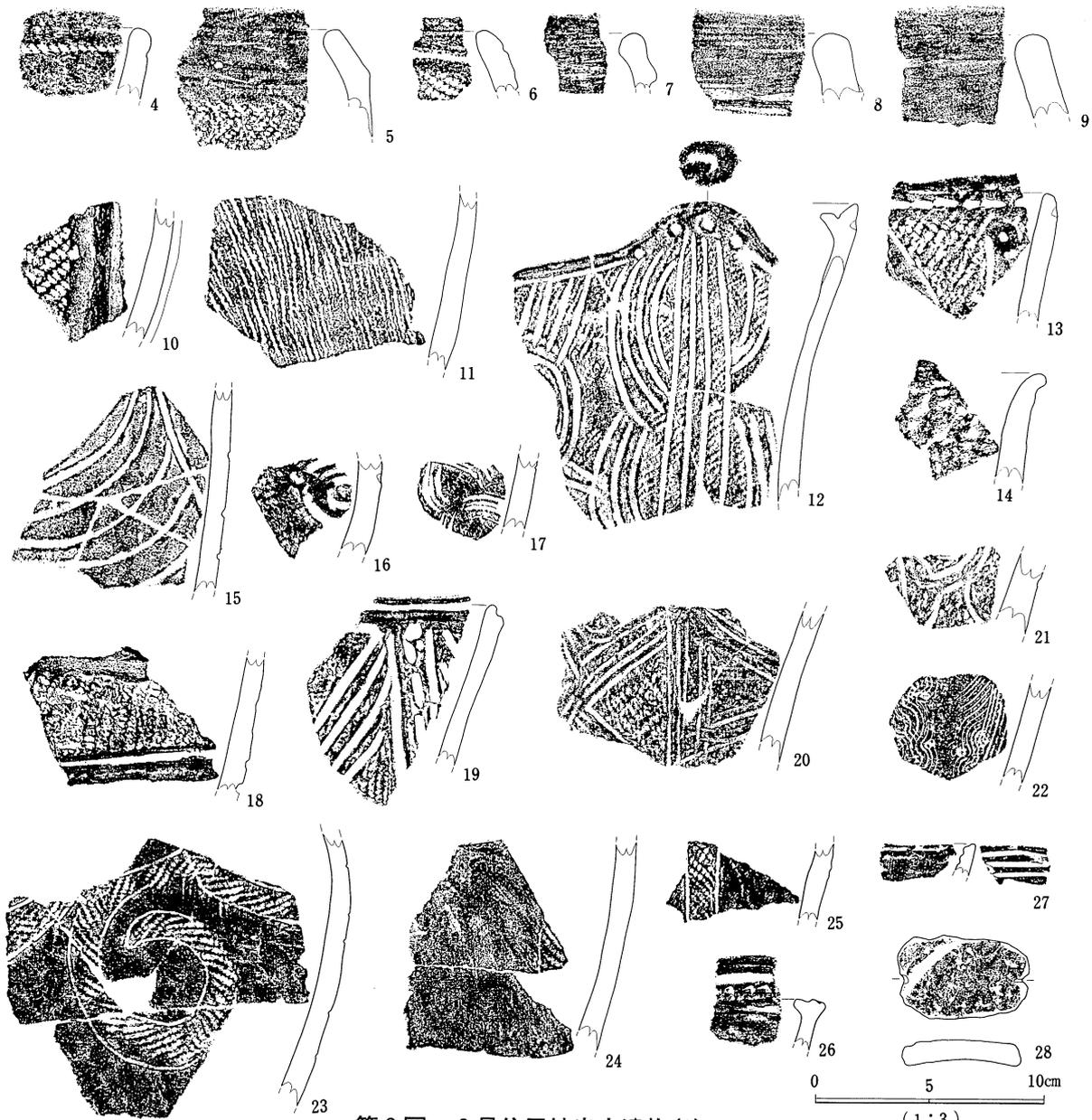
3号住居址(第8・9図)

調査区の北西部、1号住居址の南約2mの地点より検出された。住居の西側では約30cmほどの壁が検出されたが、東側では地形が緩斜面部にかかっていくためと、風倒木痕のあるために壁の検出はできなかった。ただし柱穴は検出されているのでその配列から考えて、東側に出入り口部をもつ円形の住居形態をとっていたものと思われる。柱穴の配列から想定した住居規模は直径約5mである。柱穴は壁際に配列され、深いもので約80cmである。炉は直径1mほどの不正円形で、25cmほどの浅い掘り込みをもつもので、やや出入り口部よりにつくられ、底面はよく焼けている。

遺物は炉址の西側と炉址の覆土中から比較的多く出土した。1は炉址の覆土中から出土した堀之内I式の小型の鉢形土器である。口径11.1cm、底径6.8cm、器高11.7cmである。口縁部の4ヶ所に小突起をもち、その内外面に指頭大の窪みをもつ。小突起の間を2本の浅い沈線で結ぶが、一部3本になっているところもある。2は堀之内I式の深鉢形土器の上半部の大型破片である。口径推定19.2cm、残存器高13.9cmである。口縁部に4ヶ所の突起をもち、このうちの2つは有孔2つは無孔である。突起の下は無文となり、1本の横位の沈線によって区画され、その下に4単位の沈線による連弧文がめぐ



第8図 3号住居址実測図および出土遺物(1)



第9図 3号住居址出土遺物(2)

る。沈線の引き方は比較的粗雑である。3は堀之内I式の深鉢形土器の口縁部破片である。口径推定15.0cm。LR単節縄文を地文にもち、その上に沈線による文様がめぐらされる。4は花輪台式の口縁部破片である。5～10は加曽利E式の破片である。このうち5～9は口縁部の破片であり、口縁部に無文帯をもちその下に縄文を施すもので、器形は口縁部が若干内湾する深鉢形となると思われる。6は無文帯と縄文の部分を一列の沈線で区画している。10は胴部破片であり、縦位に縄文が磨消されている。11～22・26は堀之内I式の破片である。このうち12、13、16、18、19、20、21は、地文に縄文をもちその上に沈線による文様がめぐらされるものである。14は縄文のみのものである。RL単節縄文を施す。15は沈線のみで文様を描くもの、17、22は櫛状の工具による曲線文様をもつものである。26は口縁部が内側に屈曲し口唇部に沈線と刺突による文様を付したものである。23～25・27は堀之内II式の破片である。23～25は同一個体と思われる。このうち23は、沈線による区画のなかにLR単節

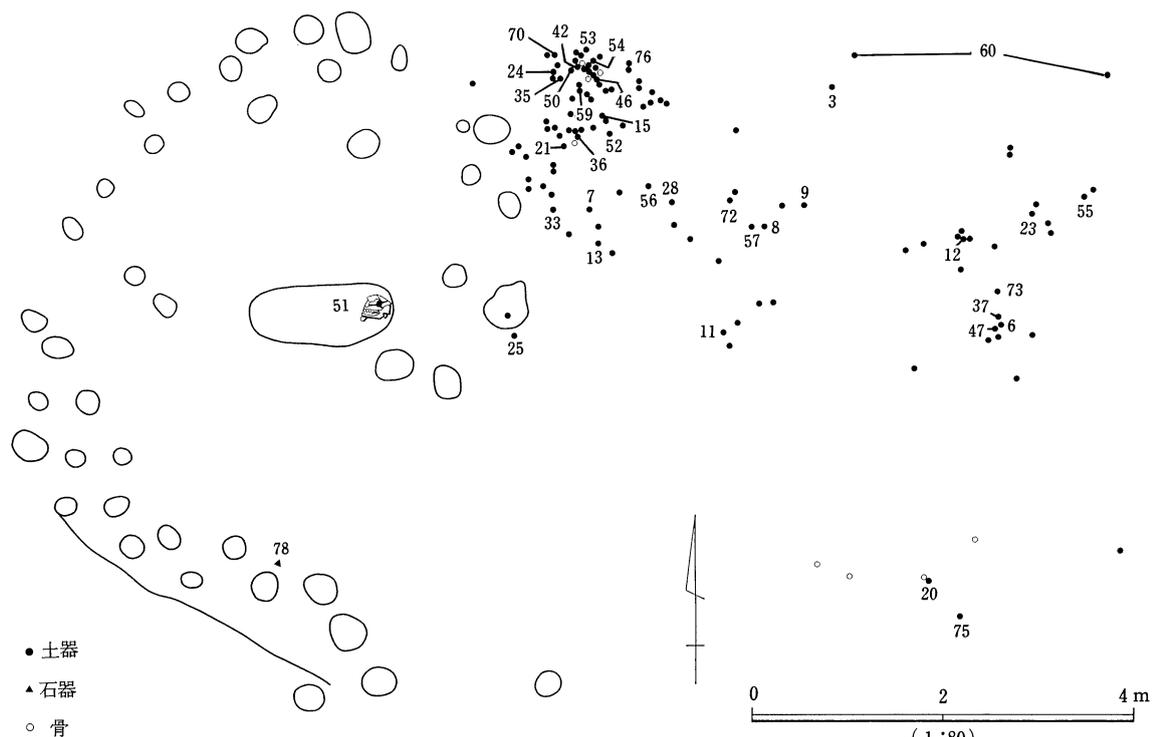
縄文を充填したものである。27は口縁部の内面に横位の沈線をめぐらす。28は土器片錘である。最大長5.8cm、最大幅3.6cm、最大厚0.9cm、重量25g。

数点の異時期の土器片もあるが主体は堀之内I式であり、出土状況からも考えて当住居址を堀之内I式期の所産と考えたい。

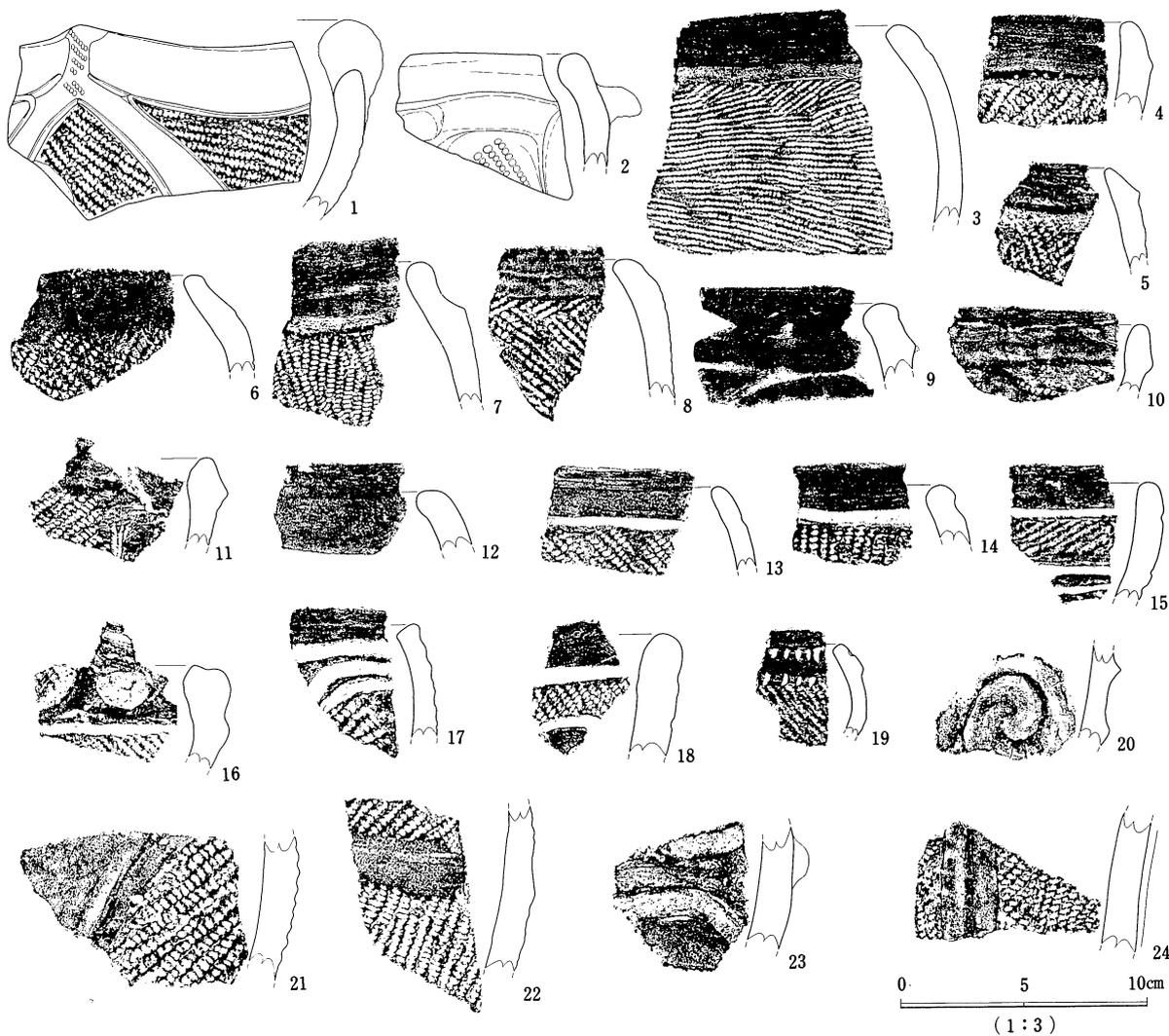
4号住居址（第10～14図）

調査区の南西隅より検出された。住居はその東側が緩斜面部にかかるために、西側の一部しかローム層を掘り込んでおらず、東側半分の覆土は基本層序の4層中にあり、床面は5層上面で検出された。したがって明確な壁は住居の南西部で確認できたにとどまる。ここでの壁の高さは約20cmである。ただし柱穴は検出されているのでおよその住居形態と規模はとらえることができる。住居は直径約6m 50cmの円形で、出入口部は東側に設けられていたと思われる。したがって炉址は住居のほぼ中央に位置することになる。柱穴は壁際に2本づつ並び、あるいは立て替えが行われていた可能性もある。柱穴の深さは約70cmである。このうち住居の西側の7本の覆土は貝層となっていた。詳細はⅢの貝塚の章で述べる。炉址は東西方向の楕円形で深さは35cmほどある。東側に燃焼面があり、炉址の覆土はほとんど全て灰であった。そして炉址の東側直上から、堀之内I式のほぼ完形の深鉢形土器が出土している。また4号住居址は、その北東部で6号住居址と一部重複関係にある。6号住居址は基本層序の5層中に覆土があるがこの上面に4号住居址の床面があり、新旧関係は4号住居址のほうが新しいことになる。さらに4号住居址内には2つの土坑（9・10号）がある。調査所見からは4号住居址の付属施設としての可能性もあるが、詳細は土坑の項で述べることにする。

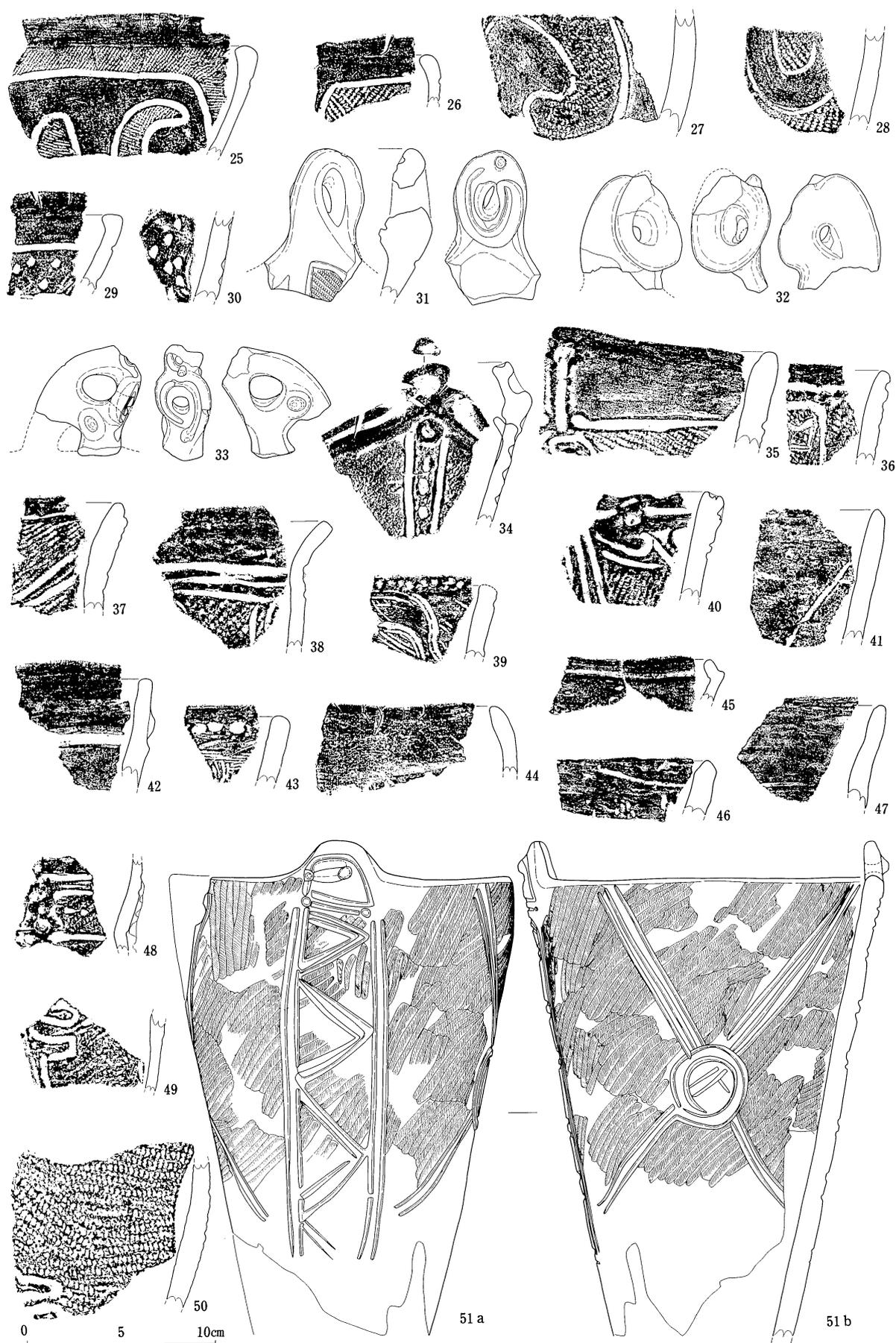
遺物は住居址の西側では覆土がほとんど貝層（VI～Xブロック）であるので、これについては貝層出土遺物として扱い、東側の基本層序の4層中にある覆土中のもののみを扱った。したがって分布状況は必然的に住居址の東側に偏っている。4号住居址からは比較的多くの遺物が検出された。1～14、16・17・19～24は加曾利E式である。1は対向U字交錯文をもつ土器で、逆U字文が口唇下までのびあがるものである。2は口縁部以下に突起状の貼り付けがあり、それ以下に単節RLの縄文がめぐることが、縦方向の微隆起によって区画される。21・22・24はこのタイプの土器の胴部破片である。20・23は微隆起によって渦巻き状の文様をつくっている。その他は、口縁部に無文帯をもちその下に縄文を施すもので、器形は口縁部が若干内湾する深鉢形となると思われる。このうち13・14・16は無文帯と縄文部分とを一条の沈線によって区画している。さらに16には無文帯部分に指頭大の窪みがめぐらされる。また19には無文帯部分に横位に2列の刺突文様が施される。15・18・25～33は称名寺式である。15・18・25～28・31は沈線による区画内に縄文を充填するものである。29・30は沈線による区画内を列点で埋めるものである。31～33は把手部分の破片である。34～43、45～67は堀之内I式である。36・37・40・49～51は地文に縄文をもちその上に沈線による文様がめぐらされるものである。このうち51は炉址の直上から検出されたもので、底部を欠く深鉢形土器である。口径19.5cm、残存器高26.6cm。2単位の把手をもち、無節Lの縄文を地文としこの上に2種類の沈線による文様をもつ。35・38・45・47は口縁部に無文帯を有する。34・41・42・48・52～54・60は沈線のみで文様を描くもの、39・43・55～59は櫛状の工具による曲線または直線文様をもつものである。39には口唇部に、43には口縁部に横位に刺突文様がめぐらされる。46・61～67は口縁部以下が縄文のみとなる深鉢形土器の破片である。このう



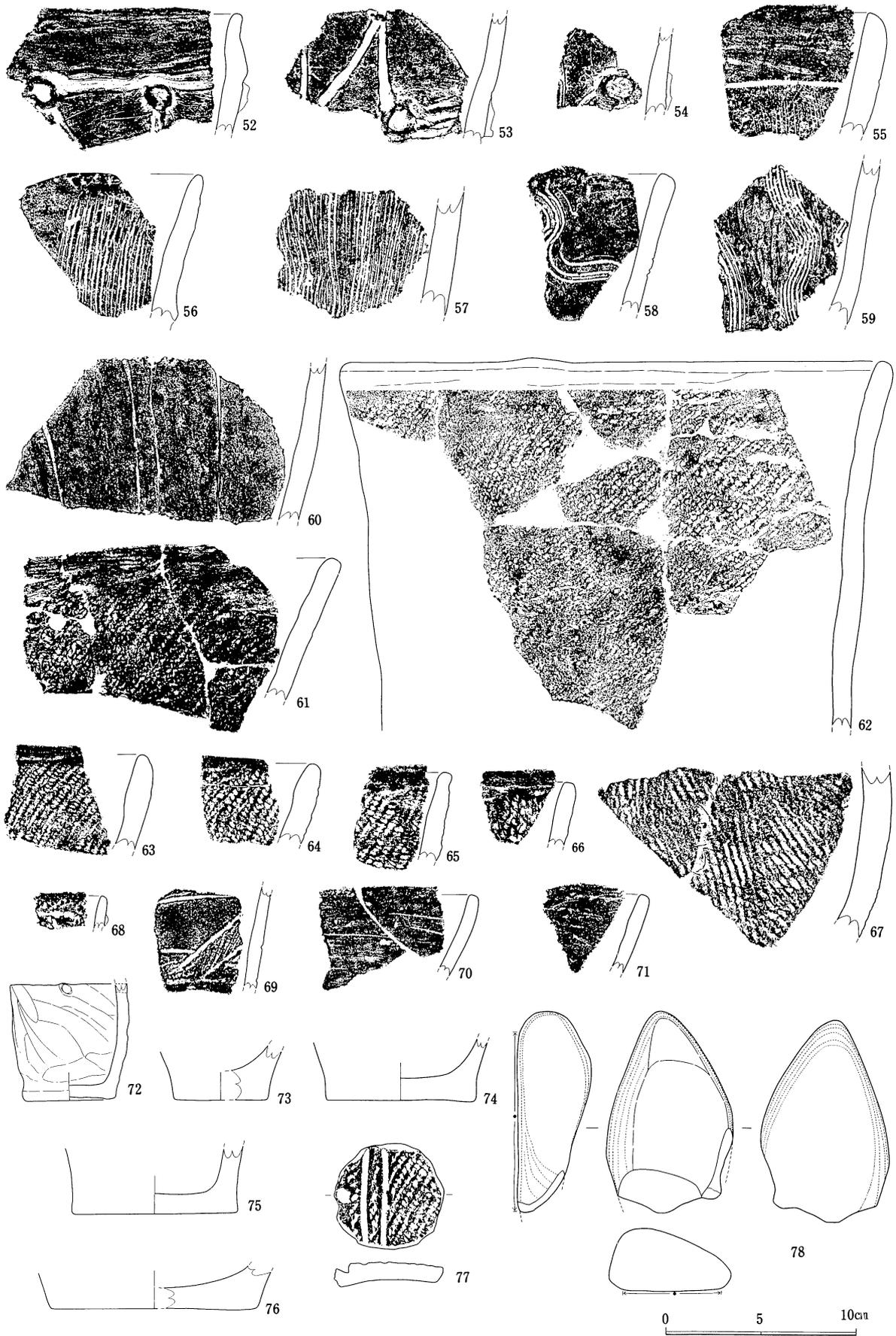
第11图 4号住居址遺物出土状况



第12图 4号住居址出土遺物(1)



第13图 4号住居址出土遺物(2)



第14图 4号住居址出土遺物(3)

ち62は比較的大きな破片で、口径は推定で29.2cmを計る。68・69は堀之内Ⅱ式の口縁部および胴部の破片である。72はミニチュワ土器で口縁部は欠損する。口縁部付近に小孔があるが、補修孔であるかどうかは明らかでない。胴部には、横および斜め方向に指で撫でた痕跡がみられる。73～76は底部の破片であるが時期は明らかでない。44・70・71は無文の口縁部破片で、時期は明らかでない。77は土製円盤である。直径5.7cm、重さ40gで周囲は粗く欠いただけで研磨された痕跡はない。78は磨石で、最大長10.7cm、最大幅6.8cm、最大厚3.3cm、重さ280g、裏面に摩耗痕が認められる。石質は軟質の砂岩を利用している。

数点の異時期の土器片もあるが主体は堀之内Ⅰ式である。また、炉址の直上から出土した51の土器もこの住居址の時期を考える有力な根拠となると思われる。

5号住居址（第10・15図）

調査区の南西隅、4号住居址の南より検出された。上面および周辺が攪乱を受け、床状の硬化面が確認されただけで、壁や炉址や柱穴は検出できなかった。したがって住居の規模・形態については明らかでない。硬化面は4号住居址の床面より約20cmほど高い位置にあるが、4号住居址の上面では確認されていないので新旧関係は4号住居址のほうが新しいものと考えられる。

床面直上まで攪乱を受け、覆土がほとんど無い状態であったので出土遺物は非常に少ない。1は称名寺式の口縁部破片、2～4は堀之内Ⅰ式の胴部破片である。

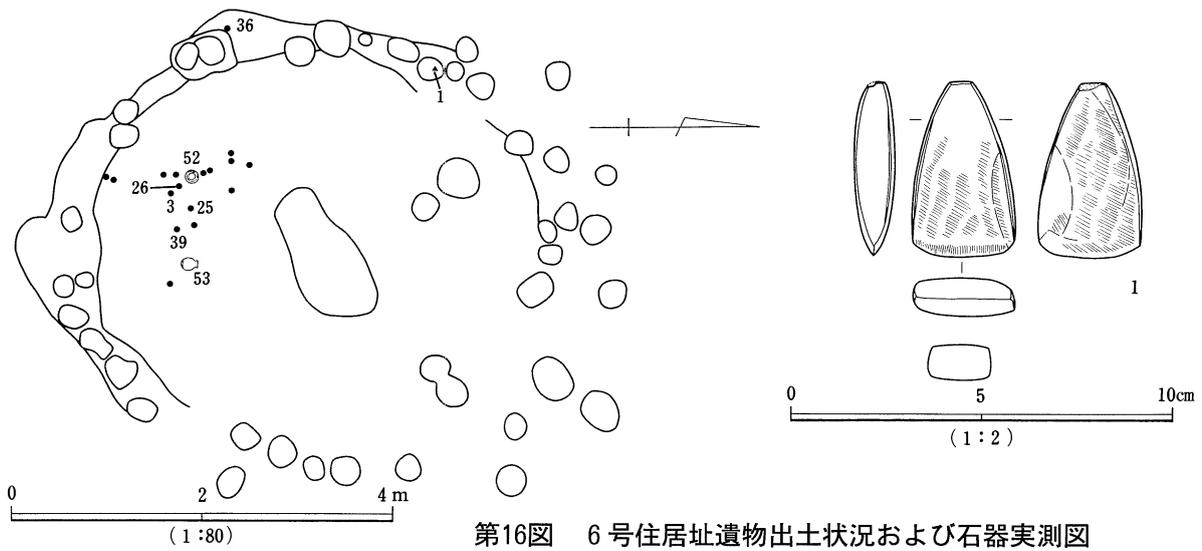


第15図 5号住居址出土遺物

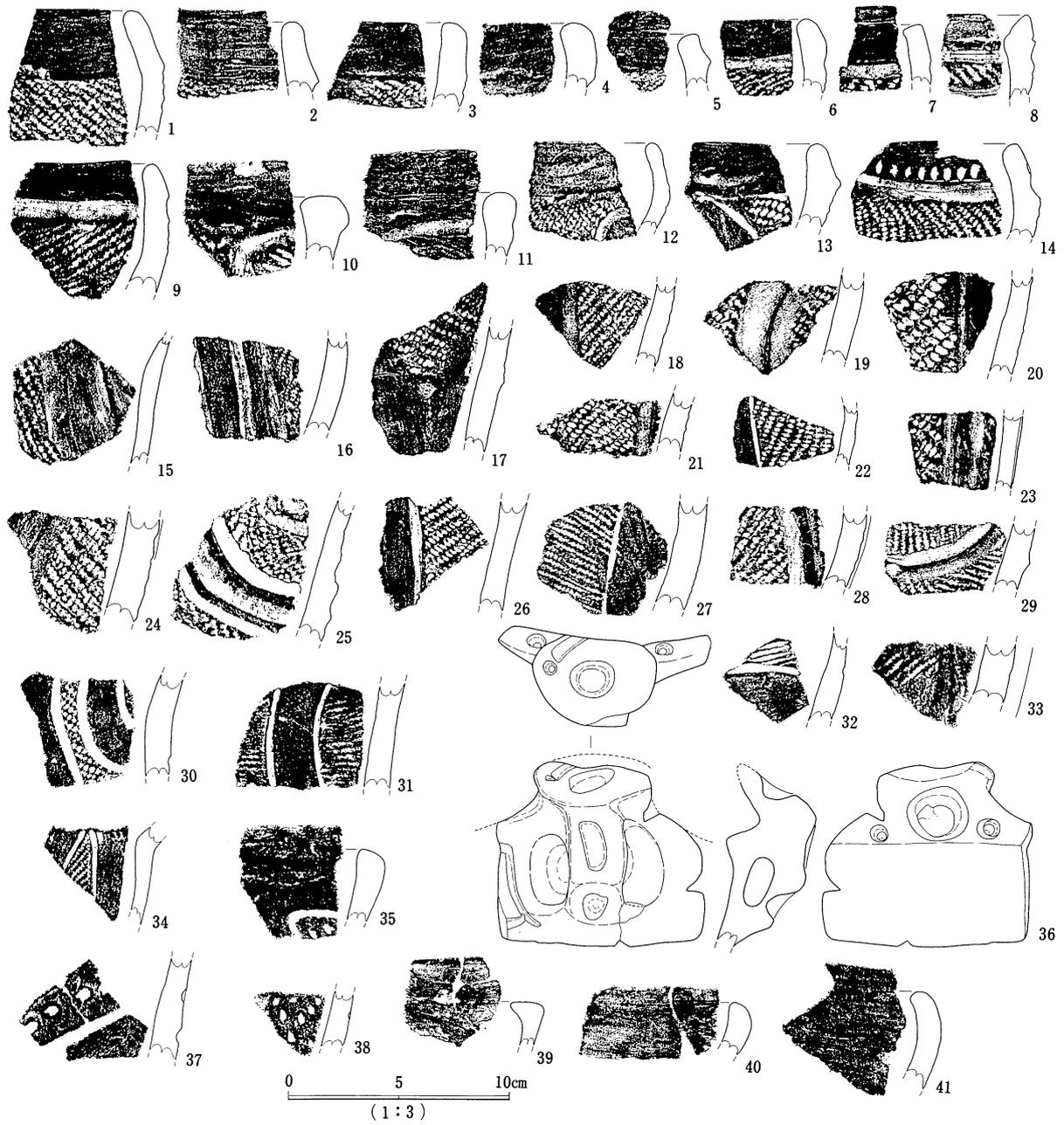
6号住居址（第10・16～18図）

調査区の南西部より検出された。4号住居址の北東部に位置し、一部重複関係にある。4号住居址の床面は6号住居址の覆土上面（6号住居址の床土10～15cm）にあるので、6号住居址のほうが古いことになる。6号住居址の覆土は基本層序の5層中にあり、床面がソフトロームの直上くらいにあるため、住居の壁は明確ではなかったが、柱穴の配列の状況などからみて直径約6mの円形の住居で、出入り口部は北東方向を向いていたものと思われる。壁際には20cmほどの浅い溝がめぐっており、約半周が確認できた。柱穴はこの壁溝内に並び、深さは65～70cmほどである。炉址は住居のほぼ中央部に位置し、南西から北東方向の楕円形で深さは約30cmである。北東側に燃焼面があり、覆土は概ね灰であった。

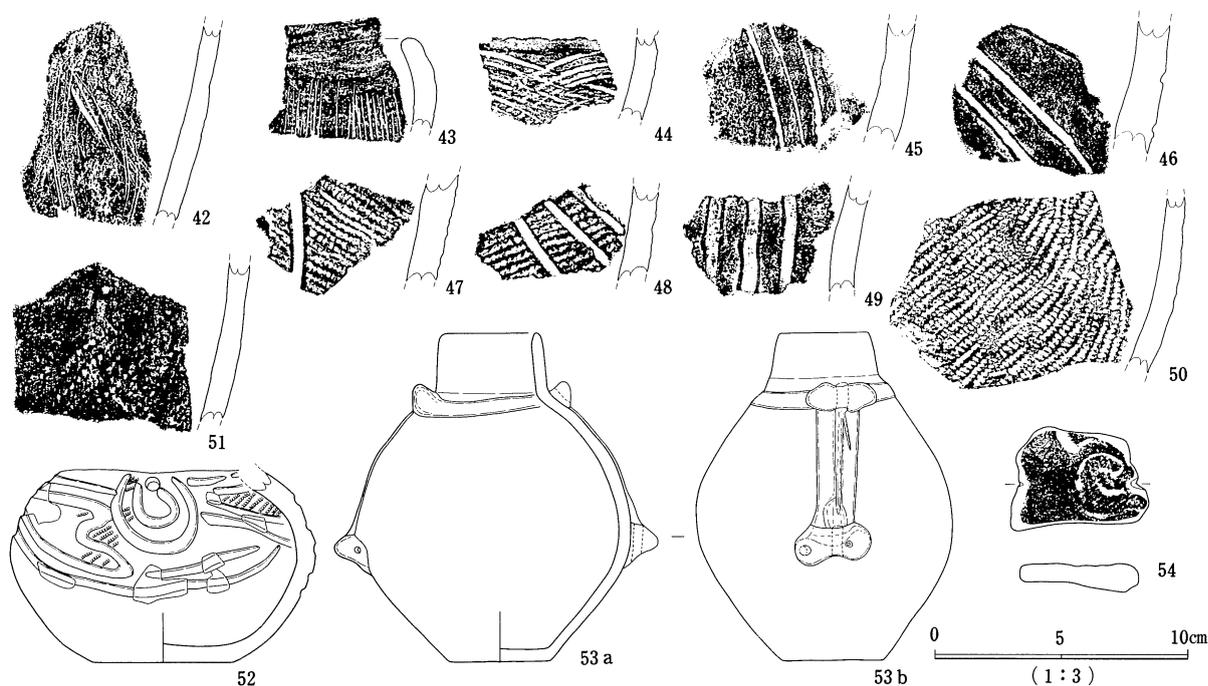
遺物は主として炉址の南側から集中して出土した。第16図の1は住居址の西側壁溝内から出土した小型の磨製石斧である。最大長4.6cm、最大幅2.7cm、最大厚1.0cm、重さ20g、石質は硬質砂岩を利用している。表裏とも刃部を中心に基部まで、研磨した際についたものとみられる縦および斜め方向の擦痕が認められる。



第16図 6号住居址遺物出土状況および石器実測図



第17図 6号住居址出土遺物(1)



第18図 6号住居址出土遺物(2)

1～29は加曾利E式である。1～9・11・14は口縁部に無文帯をもちその下に縄文を施すもので、器形は口縁部が若干内湾する深鉢形となると思われる。14には無文帯部分に横位に1列の刺突文様が施される。12・13・15～29・33は縦方向に沈線や微隆起によって区画され、その中に磨消縄文の認められるものである。30～32・34～38は称名寺式である。30～32・34は沈線による区画内に縄文を充填するものである。35・37・38は沈線による区画内を列点で埋めるものである。36は把手部分の破片である。42～51は堀之内I式である。42～45は櫛状の工具による曲線または直線文様をもつものである。46・49は沈線のみで文様を描くものである。47・48は地文に縄文をもちその上に沈線による文様がめぐらされるものである。50・51は口縁部以下が縄文のみとなる深鉢形土器の胴部破片である。52は口縁部を欠く小型の鉢形土器である。口縁部は「く」の字状に外側に屈曲するものと推定される。残存器高7.6cm、底径5.5cm。胴部上半に、地文LR単節縄文上に沈線による曲線文様がみられる。また欠損部直下に小孔があるが、補修孔であるか文様の一部であるかは明らかでない。53は小型の壺形土器である。器高13.1cm、口径3.6cm、底径4.0cm。頸部に横位に一条の隆起帯がめぐり、そこから幅広の隆起帯が左右1対垂下するが、この隆起帯の中央には縦方向に浅い溝がある。さらにこの縦に垂下する隆起帯の末端部には2個一対の有孔突起（アーチ状の小突起）が付き、下方のものには左右に刺突文がある。器形的にみれば、左右の溝とアーチ状の小突起の部分に紐状のものを通し、水筒のようにぶらさげるような用途も想定できる。また、亥の海道貝塚の資料には切断した痕跡はなくほぼ完形品であるが、この器形の土器は東北地方北部・南部、関東地方に分布するいわゆる「切断壺形土器」に共通する点が多く注意が必要であると思われる(注1)。52・53ともに住居の床面近くより出土している。

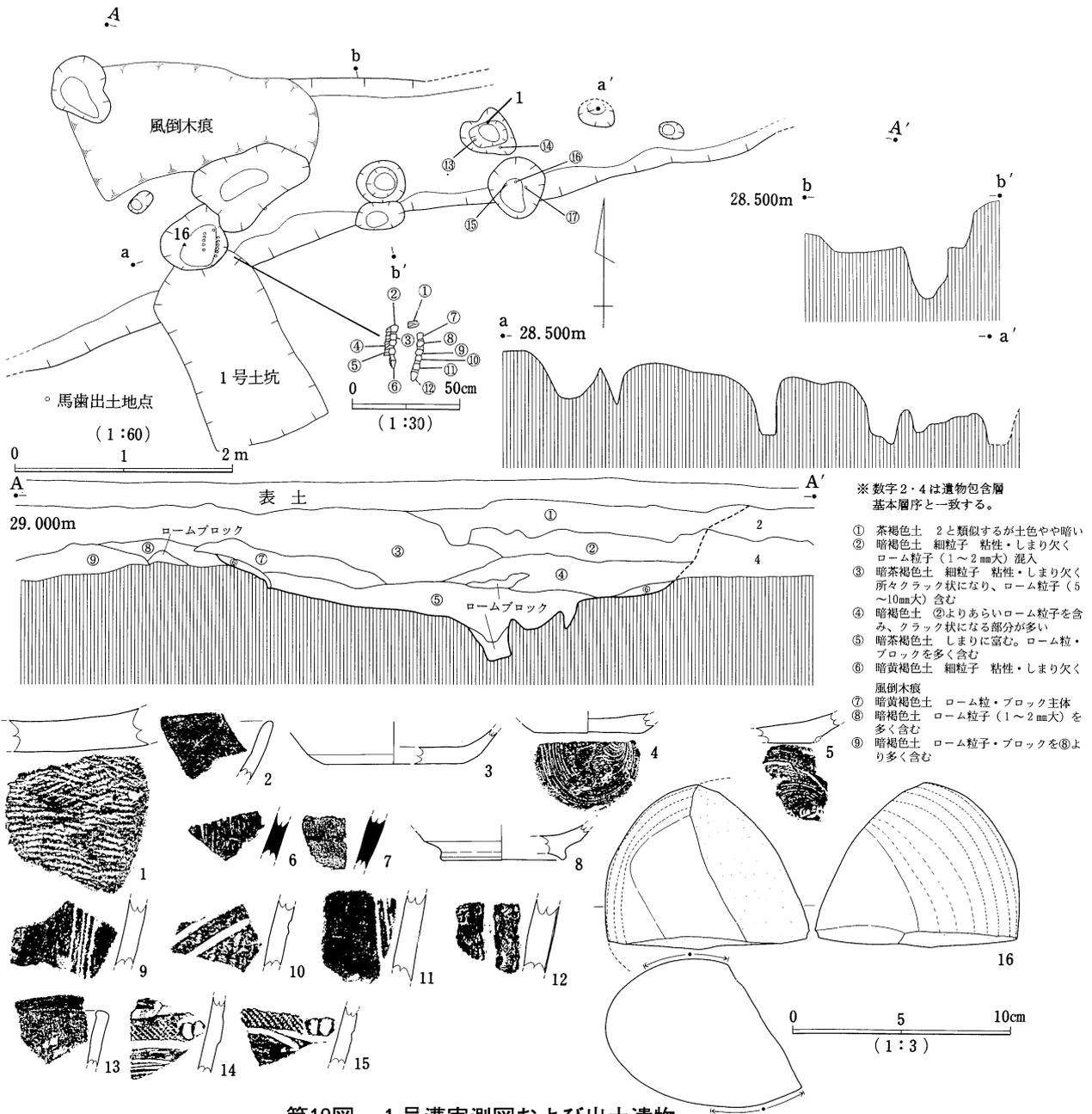
54は土器片錘である。最大長5.5cm、最大幅4.1cm、最大厚1.1cm、重さ25g。

(注1)阿部芳郎「持ち運ばれる土器—「切断壺形土器」の移動と地域間交流—」『季刊考古学 第12号 縄文時代のものと文化の交流』(1985)

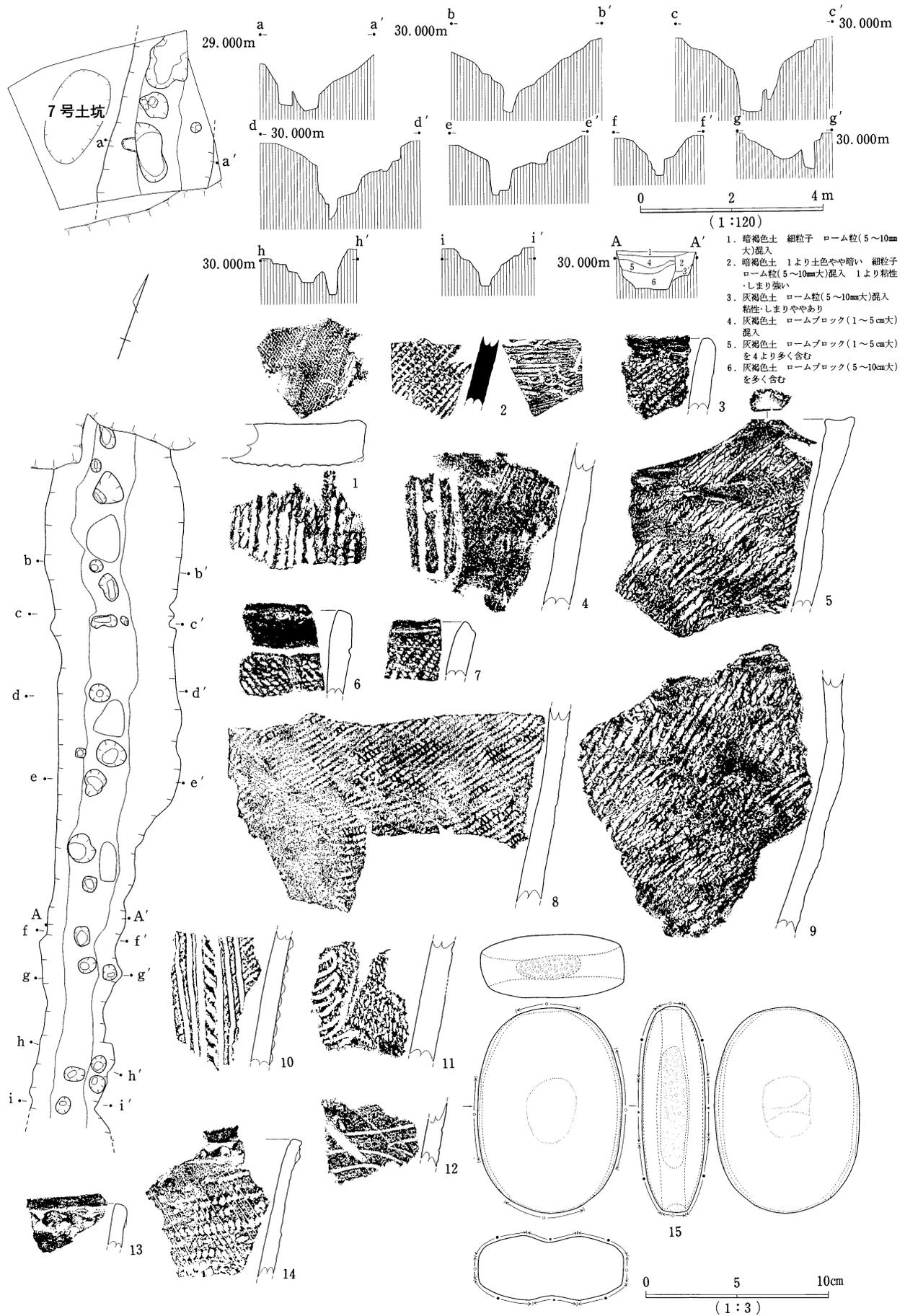
2 溝

1号溝 (第19図)

調査区の北西隅より検出された東西方向にはしる溝である。溝の確認面はソフトロームの直上であるが、土層断面図でみると基本層序の2層中に掘り込み面があり、したがって溝の深さは1m以上はあったものと思われる。溝の長さは調査範囲内で約7.5m、幅は約1.2mである。覆土は概ね、ローム粒やブロックを含む暗茶褐色土層である。溝の底面中央および壁際に直径30~50cm、深さ55cmほどのピットが確認された。確認調査時点では掘立柱建物の一部と考えたが、溝の内部以外からは同類のピットを検出することはできず、また後述する2号溝との形態の類似性からも考えて、溝に付属するものとするほうが妥当と思われる。また、溝の覆土中3ヶ所よりウマの歯がやままとまった形で検出された。他の部位の骨は検出できなかったが、埋葬されたものとみられる。歯についての詳細は4節遺



第19図 1号溝実測図および出土遺物



第20図 2号溝実測図および出土遺物

構出土の自然遺物の項で述べる。また溝は南側の壁の一部で土坑（1号）と重複関係にあるが、新旧関係は溝のほうが新しいと思われる。

遺物はわずかであるが検出された。1は瓦の破片である。2～5は土師器の坏の破片である。3の底径は推定6.3cm。4・5は糸切り底である。6・7は須恵器の破片である。8は土師器の高台付坏の破片である。底径は推定5.8cm。9～15は縄文土器である。9～13は堀之内I式、14・15は安行2式の破片である。16は磨石の破片である。最大長(9.5)cm、最大幅m(7.7)cm、最大厚7.0cm、重さ545g。石質は石英斑岩を使用している。

2号溝（第20図）

調査区の東端から検出された南北方向にはしる溝である。北側で一部を攪乱によって壊されているが、調査区内での長さ24.8m、幅最大3m、深さ最大1.2m。断面形は逆台形で、底面中央および壁際に直径30～60cm、深さ50cmほどのピットを有する。覆土は概ねローム粒やブロックを含む灰褐色土層である。また溝は南側で2号住居址と重複するが、新旧関係は溝のほうが新しい。

遺物は比較的多く検出されたが、ほとんどは遺物包含層から流れ込んだと考えられる縄文時代のものである。1は布目瓦の破片である。2は須恵器の甕の破片である。3～14は縄文土器の破片である。3～12は堀之内I式である。3・5・7・8・9は口縁部以下が縄文のみとなる深鉢形土器の口縁部および胴部の破片である。このうち5と9は同一個体と思われる。無節Lの縄文をめぐらせ、5には頂部がやや窪む山形の突起が付く。6は無文帯と縄文の部分が一条の沈線によって区画されている。4・10・11は地文に縄文をもちその上に沈線による文様がめぐらされるものである。13・14は、口縁部直下に紐線文を付す加曾利B式の粗製深鉢形土器の口縁部破片である。15は完形の凹石である。最大長11.5cm、最大幅m8.0cm、最大厚3.7cm、重さ445g。石質は安山岩を使用している。表裏両面中央部が凹み状に摩耗し、側縁部の4ヶ所に敲打痕、表裏両面の凹みの周辺部に摩耗痕が認められる。

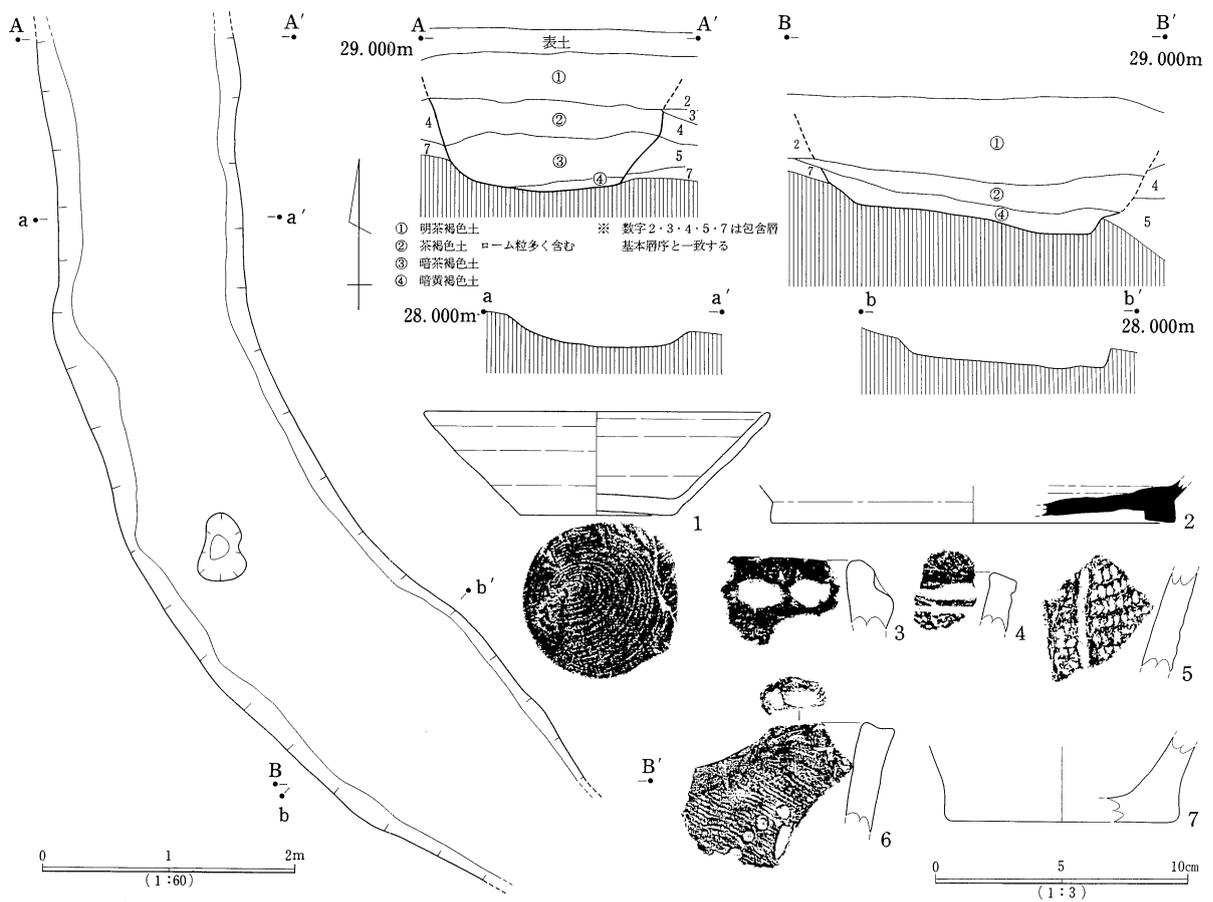
3号溝（第21図）

調査区の北端から検出された北から南東方向に埋没谷に向けてはしる溝である。北辺部では東西方向にはしる1号溝と調査区外で交錯するものと思われる。縄文時代の遺物包含層を取り除いた段階で検出されたものなので、壁の部分はわずかな高さを残すのみの状態であったが、ベルト部分の観察によると遺物包含層を掘り込んでつくられたものであることはあきらかで、本来は1m以上の深さはあったものと思われる。幅は最大で1.75mを測る。

遺物はわずかであるが検出されている。1は土師器の坏である。残存率1/2、口径推定13.8cm、底径6.1cm、器高4.2cm、糸切り底である。2は須恵器壺の底部破片である。底径推定16.0cm。3～7は包含層中から流入したと思われる縄文土器片である。

4号溝（第22図）

調査区の南東部2号溝の西側より検出されたもので、東西方向にはしり西側部分が途中で検出できなくなっているが埋没谷の方向に向いていたものとみられる。3号溝と同様に縄文時代の遺物包含層を取り除いた段階で検出されたものなので壁の部分はわずかな高さを残すのみの状態であったが、ベ



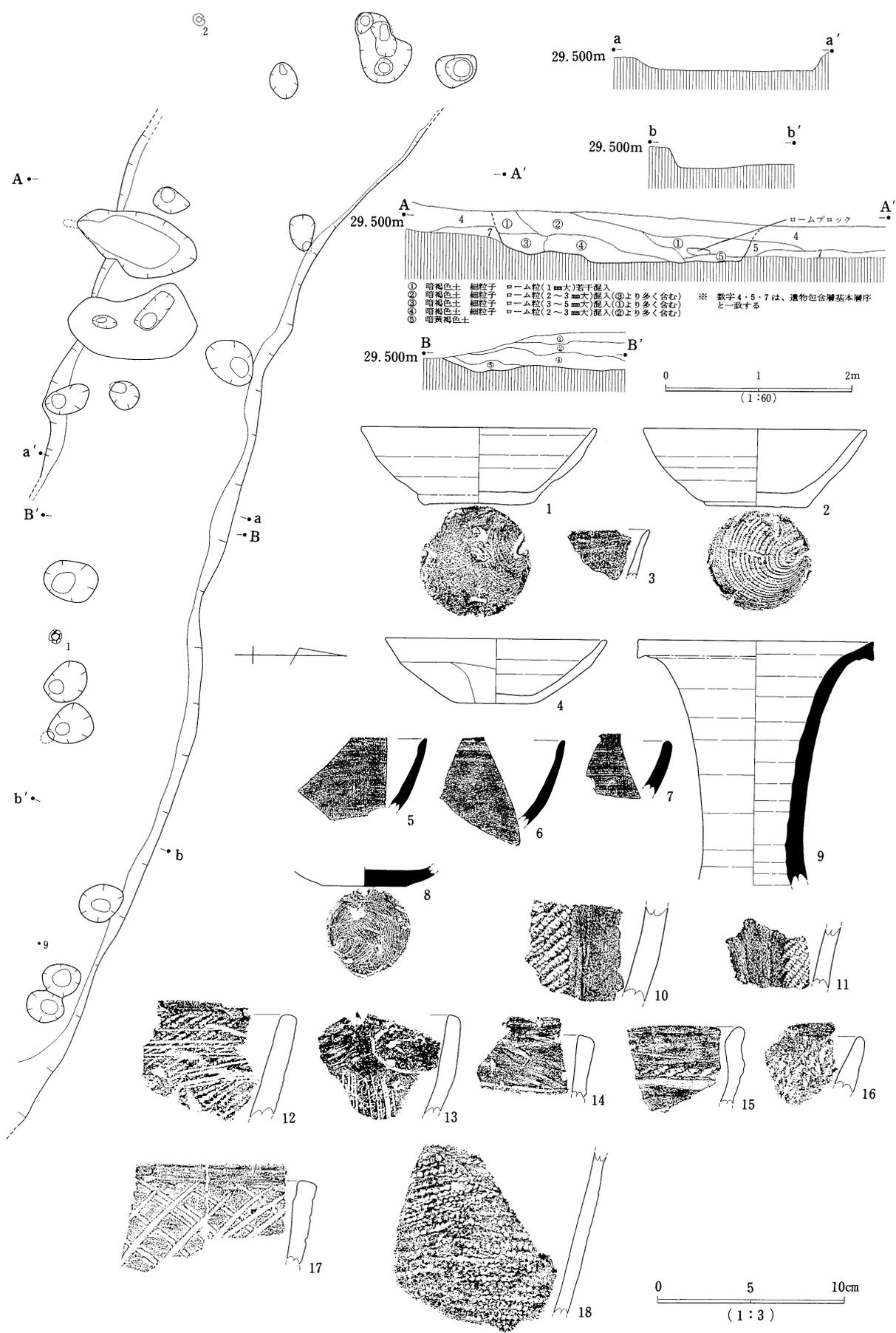
第21図 3号溝実測図および出土遺物

ルト部分の観察によると遺物包含層を掘り込んでつくられたものであることはあきらかで、本来は50cm以上の深さはあったものと思われる。幅は最大で2.3mを測る。また1・2号溝と同様に溝の底面中央および壁際に直径30~50cm、深さ40~70cmほどのピットが確認された。

遺物は数点の土師器、須恵器と縄文土器片が検出されている。1はほぼ完形に近い土師器の坏で、口径12.0cm、底径5.4cm、器高4.2cm、糸切り底である。2は土師器の坏である。口縁を一部欠く。口径12.7cm、底径6.2cm、器高4.2cm、糸切り底である。4は土師器の坏である。残存率1/4、口径推定12.0cm、底径4.0cm、器高3.5cm、体部下半から底部にかけて外面ヘラケズリがみられる。5~7は須恵器坏の口縁部破片である。8は須恵器坏の底部破片で、糸切り底である。9は須恵器長頸壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口径推定12.7cmを測る。10~18は、包含層中から流入したと思われる縄文土器片である。17は口縁部以下に沈線による格子目文様が施される。

3 土坑

土坑は11基検出されている。3号住居址の南に4基まとまって検出されている以外は散在的な在り方をし、特に土坑群のようなものは形成していない。



第22図 4号溝実測図および出土遺物

1号土坑（第23図、第25図1～6）

調査区の北端、1号溝に接して検出された。長軸1.9m、短軸1mの長方形のプランで深さ1.5mの規模をもつ。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが開口部でやや外側に開いている。遺物としては縄文土器の破片数点が出土したにとどまる。

2号土坑（第23図、第25図7～9）

調査区の北端、1号溝のやや南から検出された。長軸2.1m、短軸1.1mの長方形のプランであるが、確認面が低かったため壁の部分は10～15cmのたちあがりを確認したにとどまる。遺物は土師器と縄文土器の破片をわずかに検出しただけである。7・8は土師器杯の口縁部破片である。9は縄文土器の胴部破片である。

3号土坑（第23図）

調査区の西辺部、3号住居址のやや南から検出された。長軸2.7m、短軸1.3mの隅丸長方形のプランで深さ0.5mの規模をもつ。底面は平ではなく、北側の壁際に30～40cmの楕円形で深さ30cmほどのピットを有する。また北西の壁際50～60cmほどの円形の範囲に、土坑の底面から10cmほど浮いた位置に厚さ10cmにわたって焼土が堆積していた。焼土の下部に被熱した暗黄褐色土があることから、土坑内のこの部分で何かを焼いたものと判断した。この土坑の覆土からは焼土やわずかな炭化物のほかは、図示できるような遺物は出土していない。

4号土坑（第23図、第25図10～17）

調査区の西辺部、3号土坑の西約70cmのところより検出された。長軸1.65m、短軸1.0mの楕円形のプランで深さ40cmの規模をもつ。底面は丸みをもちあまり平ではない。土坑の南よりの底面から25cmほど浮いた位置から石器が、南東隅より底面から20cmほど浮いた位置から小型の縄文土器が出土している。土坑覆土中の遺物としては破片を主とした縄文土器と石器がある。このうち11は底径4.0cm、残存器高4.2cmの小型の土器の胴部下半から底部にかけての資料である。沈線による逆Jの字状のモチーフの文様をもつ。17は石皿状の大型の石器である。長軸22.3cm、短軸13.7cm、厚さ7.3cm、重さ2,750g、石材はチャートである。片側の面の中央部が10.9cm×7.2cmの楕円形の範囲で摩耗し、その中心よりややずれた位置に1.5cmほどの大きさで、深さ5mmの円形の窪み状の摩耗痕跡がある。またこの面全体が被熱し赤色化している。

5号土坑（第23図、第25図18～19）

調査区の西辺部、3号土坑の東約2.6mのところより検出された。長軸1.7m、短軸0.9mの楕円形のプランで深さ20cmの規模をもつ。底面は丸みをもちあまり平ではない。遺物としては図示したような縄文土器の小破片が出土したにとどまる。

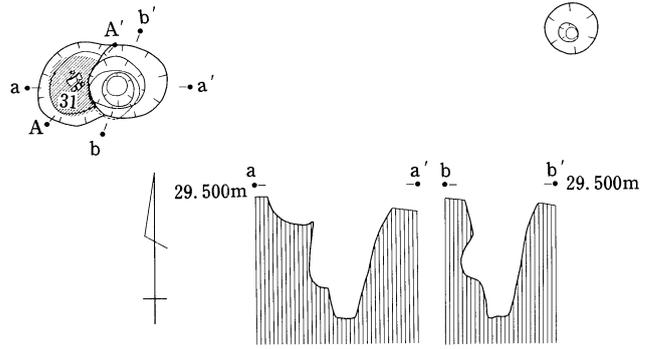
6号土坑（第23図、第25図20～26）

調査区の西辺部、5号土坑の西約1.1mのところより検出された。長軸1.8m、短軸1.0mの楕円形のプランで深さ40cmの規模をもつ。底面は丸みをもちあまり平ではない。遺物としては図示したような縄文土器の小破片が数点出土したにとどまる。

3～6号土坑は大きさや形態が比較的類似し隣接して構築されており、また4号土坑の遺物なども副葬品とも考えられなくもなく、墓壙としての可能性も指摘できうる。

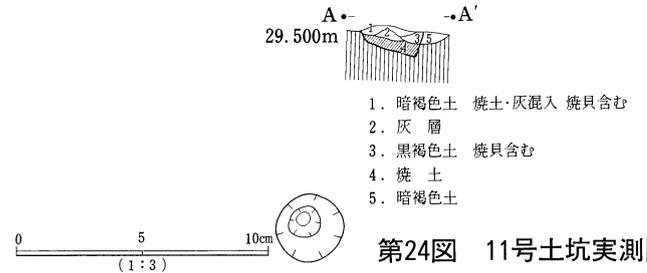
7号土坑（第23図）

調査区の東辺部、2号溝の北端部西脇から検出された。長軸2.2m、短軸1.2mの楕円形のプランで深さ20cmの規模をもつ。底面はほぼ平で、南北壁際にそれぞれ直径30cm、深さ45cm、直径15cm、深さ15cmの小ピットを有する。覆土中からは図示できるような遺物は検出できなかった。



8号土坑（第23図）

調査区の東辺部、2号住居址北辺部のプラン内に位置し、当住居址の柱穴が土坑の底面に2つ検出されている。住居構築以前の土坑であると思われる。長軸2.5m、短軸85cmの楕円形のプランで深さ35cmの規模をもつ。覆土下部より焼土がややまとまってされたが土坑内で焼かれた形跡はなかった。覆土中からは図示できるような遺物は検出できなかった。



第24図 11号土坑実測図

9号土坑（第23図、第25図27～30）

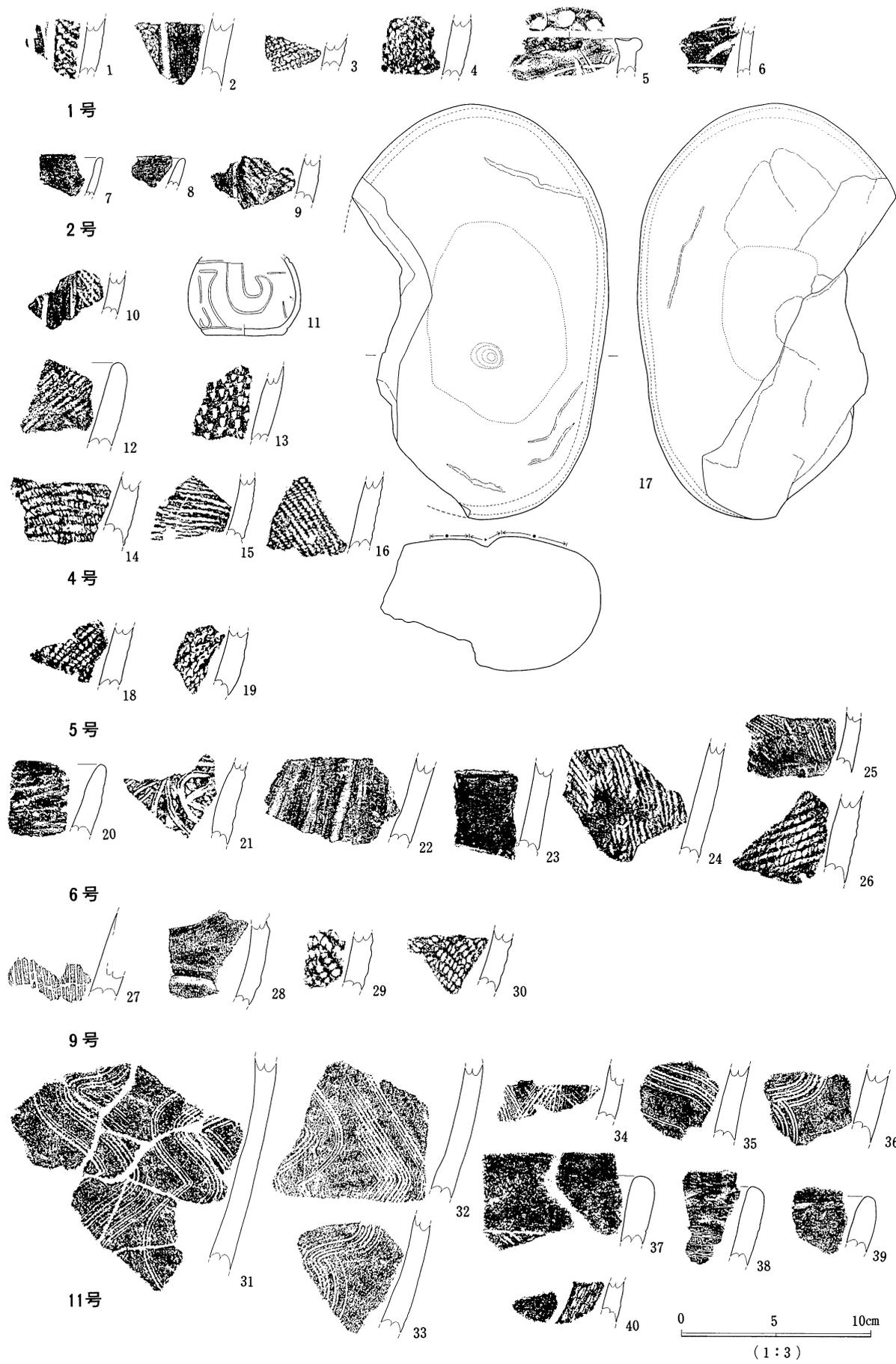
調査区の南西部、4号住居址のプラン内から検出された。長軸2.3m、短軸1.5mの楕円形のプランで深さ40cmの規模をもつ。底面は丸みをもちあまり平ではない。土坑覆土の上部には4号住居址の覆土とイボキサゴを主体とする混土貝層が形成されており、4号住居址より以前もしくはほぼ同時期に構築されたものとみられる。この貝層についてはⅢ章貝塚のⅦブロック貝層で詳述する。遺物としては図示したような縄文土器の小破片が出土したにとどまる。

10号土坑（第23図）

9号土坑と同様に調査区の南西部、4号住居址のプラン内から検出された。9号土坑の西脇である。長軸1.3m、短軸0.9mの楕円形のプランで深さ20cmほどの規模をもつ。底面は平である。4号住居址より以前もしくはほぼ同じ時期に構築されたものとみられ、西側と南側の壁の一部を4号住居址の柱穴によって壊されているが、土坑内は4号住居址の覆土内貝層であるハマグリ・イボキサゴを主体とする混土貝層で覆われている。貝層および出土遺物についてはⅢ章貝塚のⅧブロック貝層で詳述する。

11号土坑（第24図、第25図31～40）

調査区の西辺部から検出された。直径60cm、深さ95cmほどのピット状を呈し、西側と南側の壁面中段が袋状に外側に広がっている。また西脇に炉址状の施設があるが周辺からは東に約3m、南に約4mの地点からそれぞれ直径30cm、深さ70cm、直径40cm、深さ50cmのピットを検出した以外には柱穴状のものは認められず、また床状の硬化面も検出できなかった。遺物としては比較的大型のものを含む縄文土器の破片10数点が出土した。このうち31～36は櫛状の工具による曲線文様をもつ土器で直接接合はしないが同一固体と思われる遺物である。31は炉址状の施設の焼土直上から、その他はピット状の部分の覆土下部から検出されている。



第25图 土坑出土遺物

4 遺構出土の自然遺物

わずかではあるが貝層以外の遺構の覆土中からも動物遺存体が検出されている。

4号住居址（第3・4表）

覆土上部に貝層が形成されていたためその影響をうけて、下部の土層中に動物遺存体が保存されていた。

6号住居址（第4表）

6号住居址は4号住居址の床下から検出された遺構であるが、4号住居の覆土上層に貝層が形成されていたためその影響をうけ土層中に動物遺存体が保存されていた。

11号土坑（第3・4表）

土坑上部の炉址状施設の焼土中やピット状の部分の覆土中より動物遺存体が検出されており、被熱した資料もみられる。

1号溝（第19図、第2表）

溝に伴う施設と考えられる壁際および底面中央のピット3カ所の覆土上部から、ウマの歯がまとまって検出された。出土状況は第19図に示すとおりであり、17点の歯がほぼ原位置を保つかたちで検出され、とくに西側から検出された12点の歯は保存状況も良好である。他に3点の遊離した歯の破片資料がある。第2表にそれぞれの歯の部位を示した。頭蓋骨・顎骨、その他の部位（四肢骨）の骨については検出できなかったが、歯の出土状況から推定すると、西側のピット上に上顎骨を歯先が下を向くように置き、東側のピット上に同一個体と思われる下顎骨を置いたものとみられ、通常の埋葬状態とは趣を異にする。

第2表 1号溝出土馬歯一覧

No.	部 位	備 考	No.	部 位	備 考
①	R, M ³		⑪	L, P ³	
②	R, M ²		⑫	L, P ²	
③	R, M ¹		⑬	R, \overline{M}	腐食
④	R, P ⁴		⑭	R, \overline{M}	〃
⑤	R, P ³		⑮	\overline{M}	〃
⑥	R, P ²		⑯	\overline{M}	〃
⑦	L, M ³		⑰	R, \overline{M}	〃
⑧	L, M ²		—	R, \overline{M}	一括分
⑨	L, M ¹		—	切歯 I	〃
⑩	L, P ⁴		—	M 破片	〃

Ⅲ 貝 塚

1 貝塚の調査方法と概要

調査の方法

貝塚は調査区の南西部にあり、およそ300m²の範囲にわたって貝層が存在していた。貝層の上面を精査したところ、全体の約2/3は保存状態のあまり良くない混貝土層であったが、残りの1/3は11カ所のブロック状に堆積した比較的良好な保存状況を示す混土貝層であることが明らかになった(第26図)。まず、貝層の状況を把握するためにブロック状の混土貝層の部分を主体に貝層分布範囲全体に南北方向2本、東西方向6本のベルトを設定しこの部分で貝層断面の観察をし、貝層の厚さと内容がある程度把握した(第27図)。貝層の上面には新时期テフラとみなされる明茶褐色の遺物包含層(2層)が堆積し、その下に混貝土層(3b層)と混土貝層(3c層)が位置する。貝層の下にはさらに2枚の遺物包含層(4・5層)が存在し、さらに東側の斜面部ではもう1枚の遺物包含層(6層)がある。2層の厚さはおよそ20~40cm、混貝土層(3b層)は20~40cm、混土貝層(3c層)は10~50cm、貝層下の4・5層は40~80cmである。

調査方法としては、基本的に貝層のすべてを持ち帰る皆採サンプルの方法を採ることにしたが、全ての貝層を同じレベルでサンプリングするのではなく、後に導き出したいデータの性格に合わせたものとなるように努めた。過去の貝塚調査の経験から、貝層のサンプリング作業における省力化をはかるためと、整理作業における時間的制約(限界)を考慮したためである。今回調査対象となる貝層は、保存状態のあまり良くない混貝土層(3b層)と保存状態の比較的良好な混土貝層(3c層)に大きく分けられる。したがって貝層中の貝類や魚類の種類や量の、地点(ブロック)別・層位別の比較については、混土貝層(3c層)のなかで過去の情報が最も良好に遺存しているだろうと思われる各ブロックのおよそ中心部をとるベルト部分のサンプルで対応することとし、ベルト部分での貝層の断面観察に基づいて分層された層位ごとにサンプリングし、4・2・1mmの3種類のフルイを使用して水洗した(便宜的に詳細処理サンプルと呼ぶ。混土貝層(3c層)全体におけるベルト部分の詳細処理サンプルの割合はおよそ15%ほどである)。また、大型の魚類や獣類、微小な人工遺物の検出のために、ベルト部分以外の混土貝層(3c層)と混貝土層(3b層)を2×2mのグリッドごとにサンプリングし4mmのフルイを使用して水洗した(便宜的に簡易処理サンプルと呼ぶ)。なお、今回の貝塚調査では貝層のサンプリング・フルイを使用した水洗作業の全てと、水洗後の内容物の選別作業の一部を現場作業のなかで対応することとした。過去の経験からみて、貝層サンプルの水洗・選別処理には非常に多くの時間と労力を要し、現場作業に比べ体制的に小規模とならざるを得ない整理作業のなかでは対応しきれず、また貝層サンプルの全てをサンプリングしたままのかたちで収蔵施設にもち帰ることは収容能力的にも限界があるためである。したがって、貝層サンプル分析における選別・分類・同定・集計以下を整理段階での作業とした。今回の貝塚調査に関わった作業量についてはV章のまとめの中で詳述する。

貝塚の概要

貝層の内容の基礎データを第5・6表に一覧とした。その中で注意すべき点について述べるが、3c層中の各内容物のブロック・サンプル地点・層位別の検出量が比較し易いよう第29・30図に示した。

<層>

3c層の内容物組成表中の、ベルト3c・ブロック3cは詳細処理サンプルを示し、さらに丸数字を付したものは分層されたものである。それ以外の3cのみの表示のものは簡易処理サンプルを示す。

<総重量>

サンプルを水洗する前の土壌を含んだ貝層全体の重量である。本来は全てを乾燥させ、水分を取り除いたうえで計測すべきであるが、時間的な制約上サンプル内には多少の水分が含まれていた。

<比率>

3c層の各ブロックの4mmフルイ水洗後の残留物総重量に対する各サンプルの4mmフルイ水洗後の残留物重量の比率を示したものである。これによってブロック別の詳細処理サンプル分の比率を示し、全体を復元する際の参考にした。ブロックごとに詳細処理サンプル量の比率はまちまちであるが、おおむね10～15%程度の範囲におさまっている。

<フルイ水洗後残留物重量>

貝層サンプルを水洗し土壌を取り除いた段階での重量である。詳細処理サンプルでは4・2・1mmの3種類のフルイ別の重量を、簡易処理サンプルでは4mmフルイ上に残留したものの重量を示した。

<土壌重量>

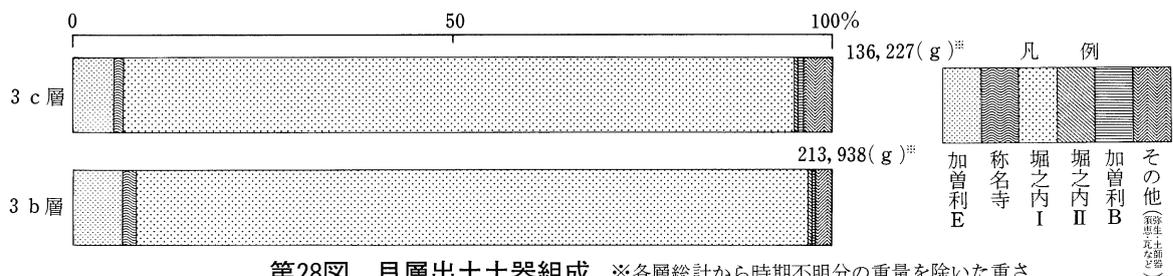
サンプルを水洗する前に計測した土壌を含んだ貝層全体の総重量から水洗後の残留物総重量を除いた重量である。

<混土率>

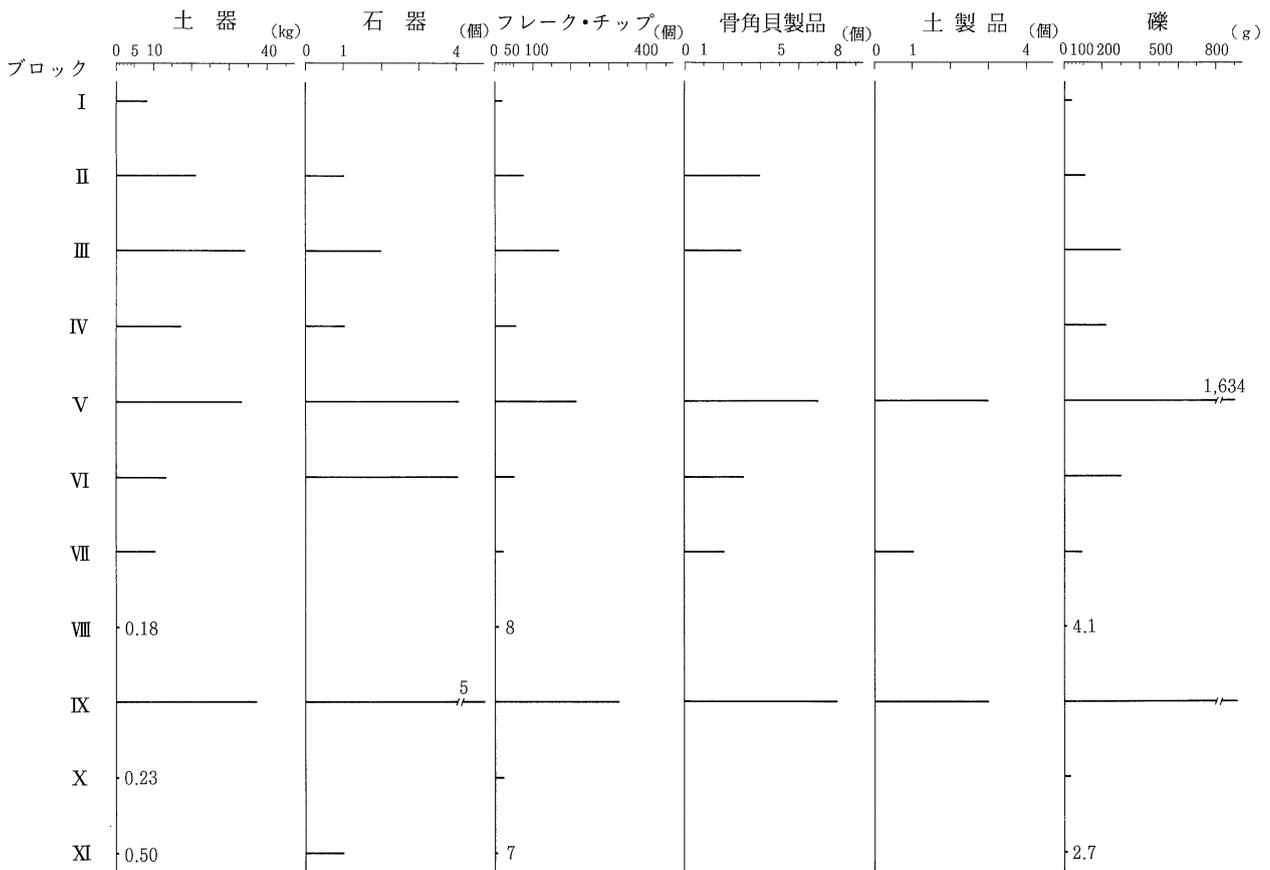
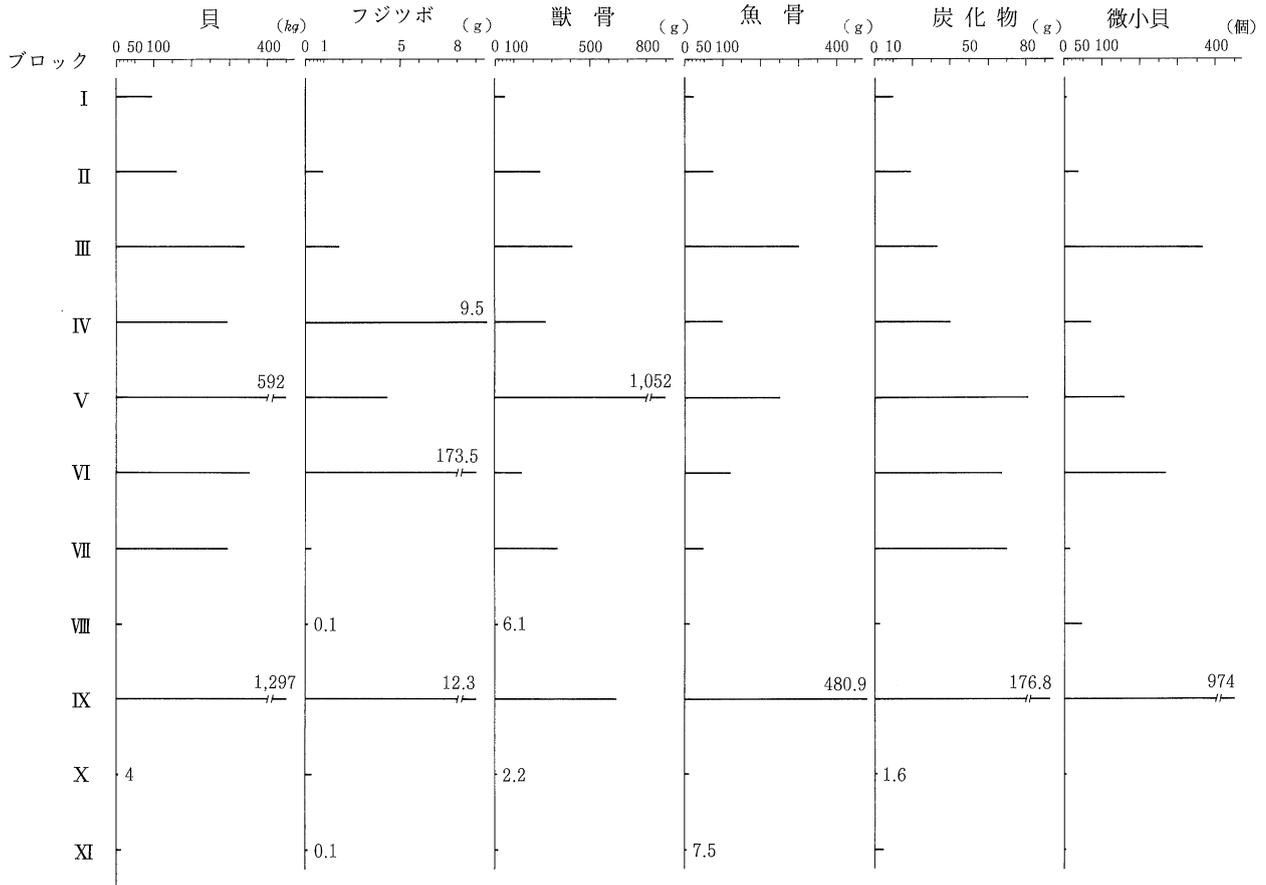
貝層全体の総重量に対する土壌重量の比率である。これによって、発掘調査時の純貝層・混土貝層・混貝土層など貝層に対する主観的な表現を数字として客観的に示した。これによると、調査時に純貝層に近いとみなした混土貝層で混土率50～60%、明らかに土の混入率が多いとみなされる混貝土層で混土率90%以上と割合明確な差として表れてくるが、土よりも貝のほうが多いだろうという程度にみなされる混土貝層では混土率60～90%と比率のばらつきが非常に多くなり、調査時の土の混入率を主体とした分層に改善の余地を残す結果となった。

<貝殻破碎率>

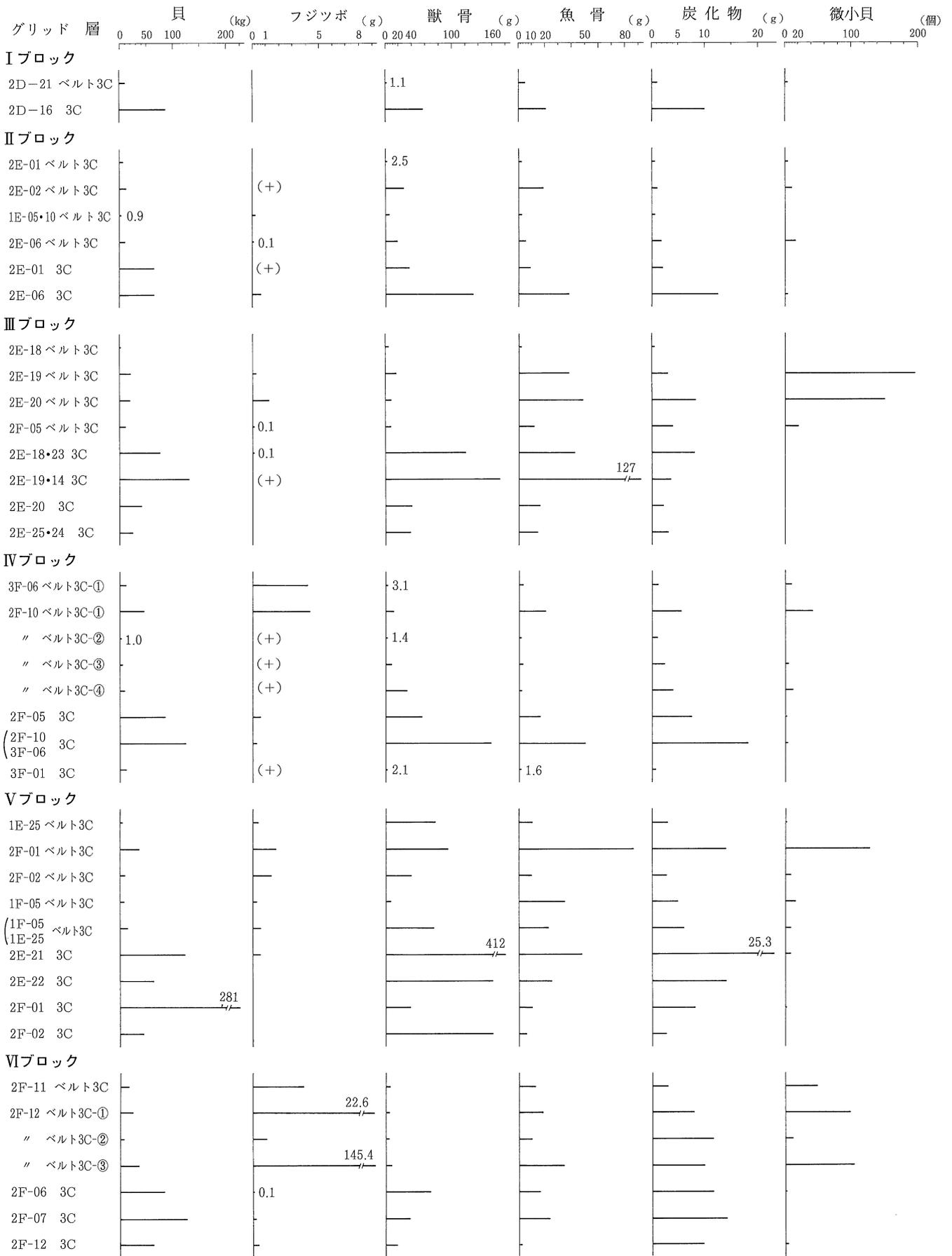
フルイ水洗後の残留物から土器・石器などの人工遺物と獣骨・魚骨などの動物遺存体を除いた貝殻の総重量に対する、カウント対象貝（二枚貝の場合は殻頂部の残存するもの、巻貝の場合な殻軸の残存するもの）以外の貝の重量の比率を示したものである。貝層中の貝殻はサンプル処理の間にも壊れ



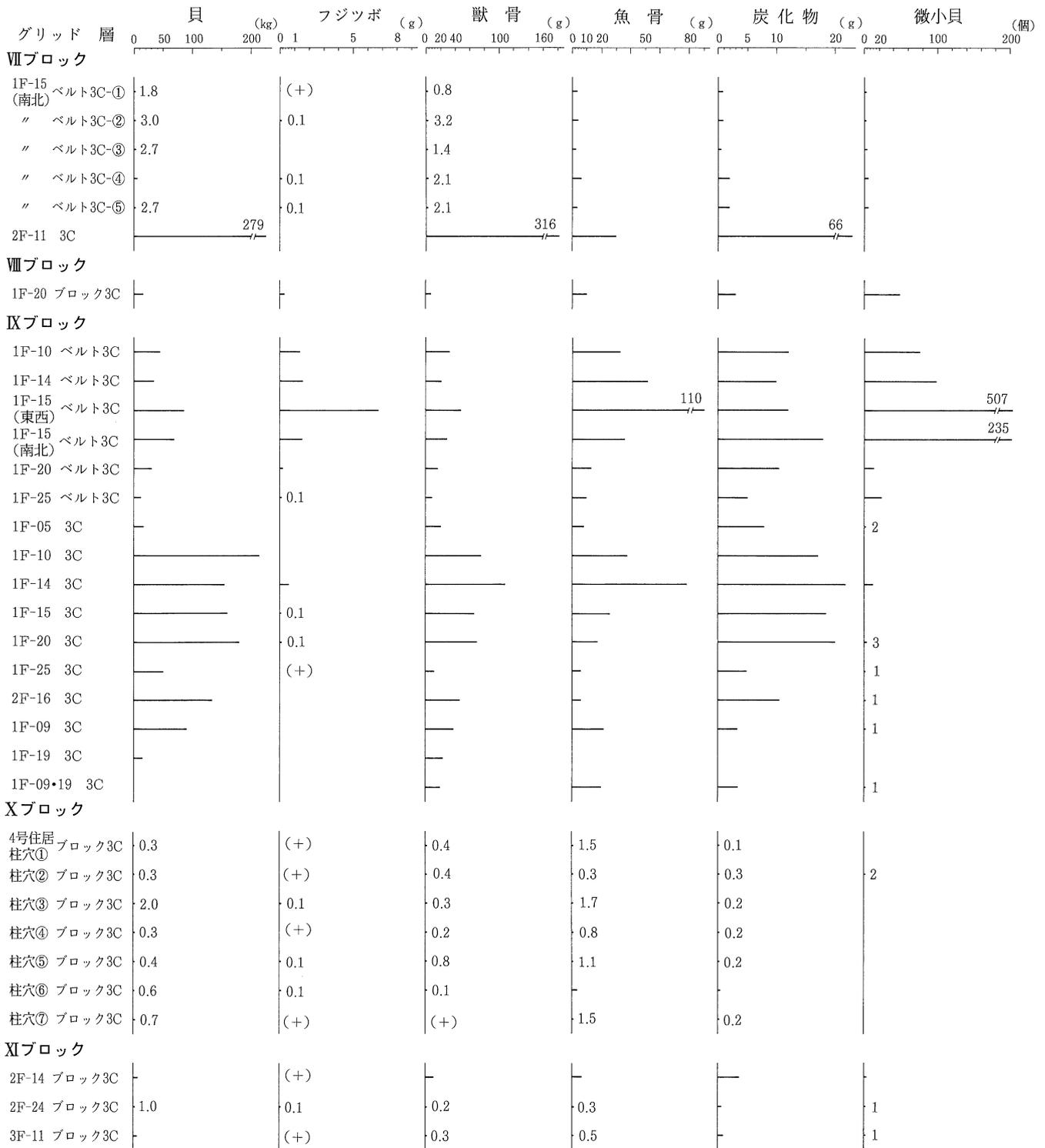
第28図 貝層出土土器組成 ※各層総計から時期不明分の重量を除いた重さ



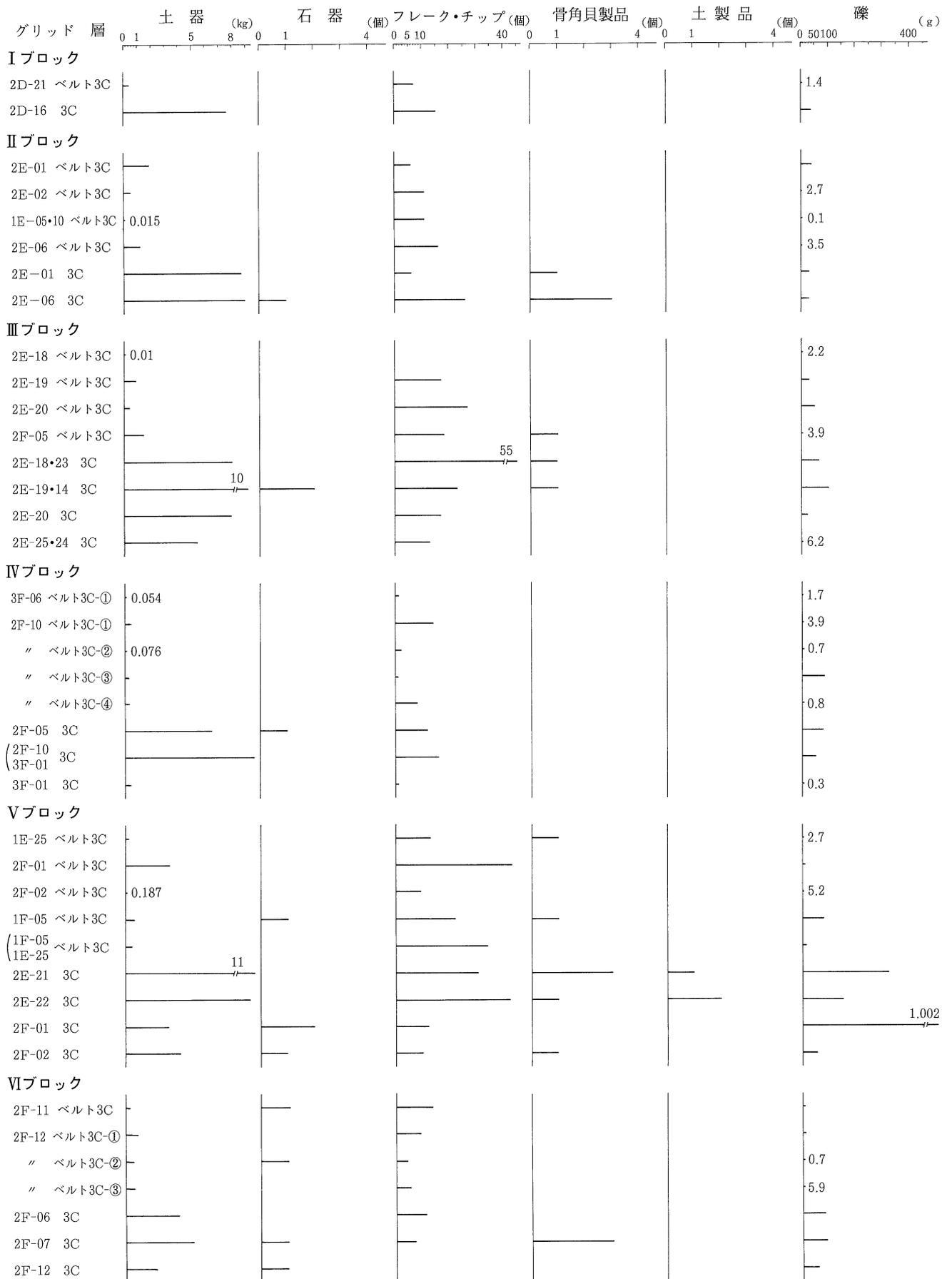
第29図 3c層中内容物のブロック別検出量比較



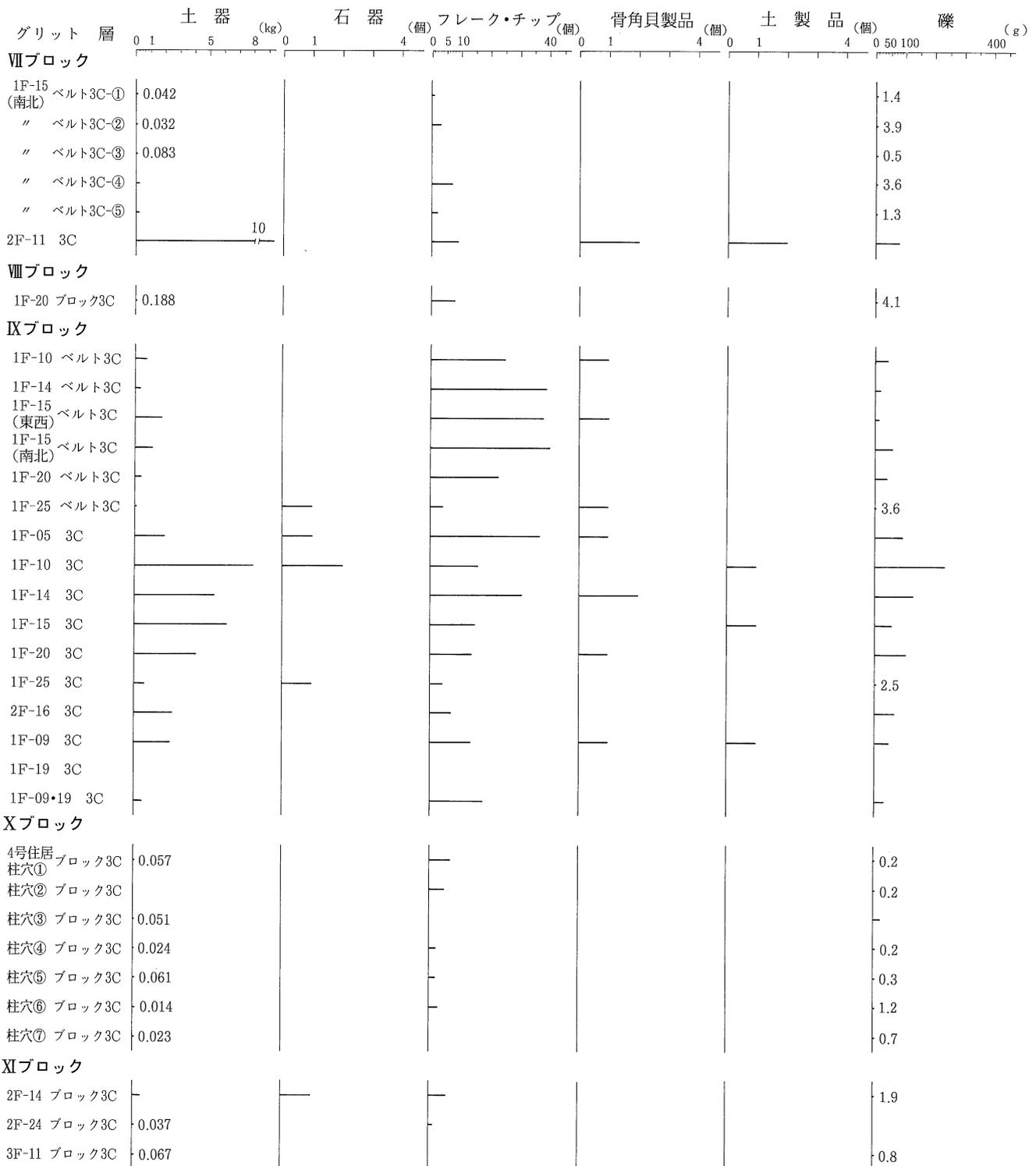
第30図 3c層中内容物のサンプル地点・層位別検出量比較



第30図 つづき



第30図 つづき



第30図 つづき

てしまうことが多いが、それをある程度考慮しても貝層の形成過程やその後の保存状況などを考えるうえで、貝殻破碎率を調べることはなんらかの指針を与えてくれるものと考え。示された数字によると、発掘調査時に明らかに破碎貝が多いとみなされた貝層や二枚貝主体の混貝土層で貝殻破碎率が高く、純貝層に近いとみなした混貝土層や巻貝主体の貝層では貝殻破碎率が低くなっている。

－包含物重量－

これ以下は貝層中に含まれていた土壌以外のすべての物質それぞれの重量と量を示した。

<貝殻>

フルイ水洗後の残留物から土器・石器などの人工遺物と獣骨・魚骨などの動物遺存体を除いた貝殻のみの重量である。貝類の詳細については第3節aで述べる。

<獣骨・魚骨>

フルイ水洗後の残留物から選別・分類された重量を、詳細処理サンプルでは4・2・1mmの3種類のフルイ別に示した。動物遺存体の詳細については第3節cで述べる。

<フジツボ>

全く検出されない所もあるが貝ブロックによってはかなりまとまって検出された箇所もある。個体数算定の基準がないので、全体の重量と破片数を示した。詳細については第3節bのなかで述べる。

<微小貝>

ほとんど検出されない所もあるが貝ブロックによってはかなりまとまって検出された箇所もある。個体数を示した。詳細については第3節aのなかで述べる。

<炭化物>

全ての貝ブロックのサンプル中から検出されているが、かなりまとまって検出された箇所もある。重量を示した。詳細については第3節eのなかで述べる。

<礫>

全ての貝ブロックのサンプル中から検出されているが、かなりまとまって検出された箇所もある。資料のほとんどは1～10mm大の小礫である。重量と個体数を示した。

<フレーク・チップ>

ほとんどの貝ブロックのサンプル中から10mm大以下のものが検

第7表 3c層グリッド別・層位別土器組成 (重量g:単位g)

グリッド	型式	加曽利	称名	寺	堀之内I	堀之内II	加曽利	不明	その他	計
2D-16		17	100	5099	35			2340	9	7600
2D-21ベルト				444				31		475
I		17	100	5543	35			2371	9	8075
1E-10ベルト				12				3		15
2E-01ベルト		26		1408				511		1945
2E-01		280	58	6983				1375	4	8700
2E-02ベルト				418				127		545
2E-06ベルト		49		961				224		1234
2E-06		360	41	7063	18			1410	8	8900
II		715	99	16845	18			3650	12	21339
2E-18ベルト								10		10
2E-18		110		5282	11	35		2310	52	7800
2E-19ベルト				721				169		890
2E-19		125	30	6302	59	41		3400	43	10000
2E-20ベルト				408		2		30		440
2E-20		44	100	4689	54	78		2815	120	7900
2E-25		16	20	2603	6			2600	155	5400
2F-05ベルト		18		1178				230	92	1518
III		313	150	21183	130	156		11564	462	33958
2F-10ベルト①		14		288				133		435
2F-10ベルト②		20		40				15		75
2F-10ベルト③		15		273				12		300
2F-10ベルト④			25	244		7		44		320
3F-06ベルト①				38				13	3	54
2F-05		173	38	3617	8	24		2300	240	6400
2F-10		490		7784		19		1120	87	9500
3F-01				408				52		460
IV		712	63	12692	8	50		3689	330	17544
1E-25ベルト		98		141				36		275
1F-05ベルト		91	21	430				103		645
1F-05+1E-25ベルト		17		449				69		535
2E-21		340	59	9290		26		1876	5	11596
2E-22		1055	112	5562	8	25		2500	14	9276
2F-01ベルト		19	30	3105				146		3300
2F-01		214	20	2245		89		670	22	3260
2F-02ベルト		20	34	91	32			10		187
2F-02		212	24	2757	68	14		1000	25	4100
V		2066	300	24070	108	154		6410	66	33174
2F-06		280	91	2925		67		531	6	3900
2F-07		93	87	3528				1200	142	5050
2F-11ベルト		4	36	171				68	1	280
2F-12ベルト①				595				225		820
2F-12ベルト②				517				58		575
2F-12ベルト③				497				88		585
2F-12		230		1483	28	9		435	65	2250
VI		607	214	9716	28	76		2605	214	13460
1F-15(南)ベルト①		19		13				10		42
1F-15(南)ベルト②				20				12		32
1F-15(南)ベルト③				66				17		83
1F-15(南)ベルト④				201				34		235
1F-15(南)ベルト⑤		18		213				24		255
2F-11		440	121	5637	30	100		29	3850	10207
VII(9号土坑)		477	121	6150	30	100		126	3850	10854
1F-20				107	3			78		188
VIII(10号土坑)				107	3			78		188
1F-05		240		1203				570		2013
1F-09		106	44	1778				500	11	2439
1F-09+1F-19		14		163				478		655
1F-10ベルト		17	8	660				165		850
1F-10		350	62	4730	20			2900	11	8073
1F-14ベルト		16	15	216				162	6	415
1F-14		324	23	3660	7	19		1500	14	5547
1F-15(東)ベルト				1386	18			420	1	1825
1F-15(南)ベルト		48		977				230		1255
1F-15		225	310	3556	21	320		1700	168	6300
1F-19		58	31	326				45		460
1F-20ベルト		50		293				172		515
1F-20		700	94	2318	105	113		870		4200
1F-25ベルト				130	3			78		211
1F-25		46		544				170		760
2F-16		216	42	1659		32		700	1	2650
IX		2410	629	23599	174	484		10660	212	38168
1F4号住柱穴①				57						57
1F4号住柱穴②				45				6		51
1F4号住柱穴③				20				4		24
1F4号住柱穴④				61						61
1F4号住柱穴⑤				5				9		14
1F4号住柱穴⑥				23						23
X				211				19		230
2F-14貝ブロック		58		265				72		395
2F-24貝ブロック		13		11				13		37
3F-11貝ブロック		25		37				5		67
XI		96		313				90		499
3c層総計		7413	1676	120429	534	1020		41262	5155	177489

* 弥生・土師・須恵・瓦など

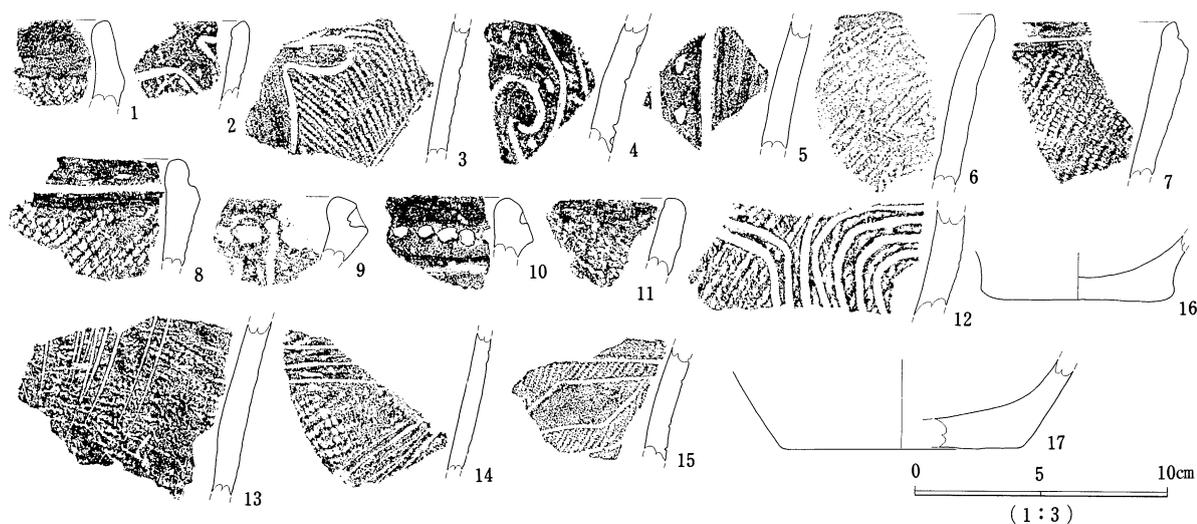
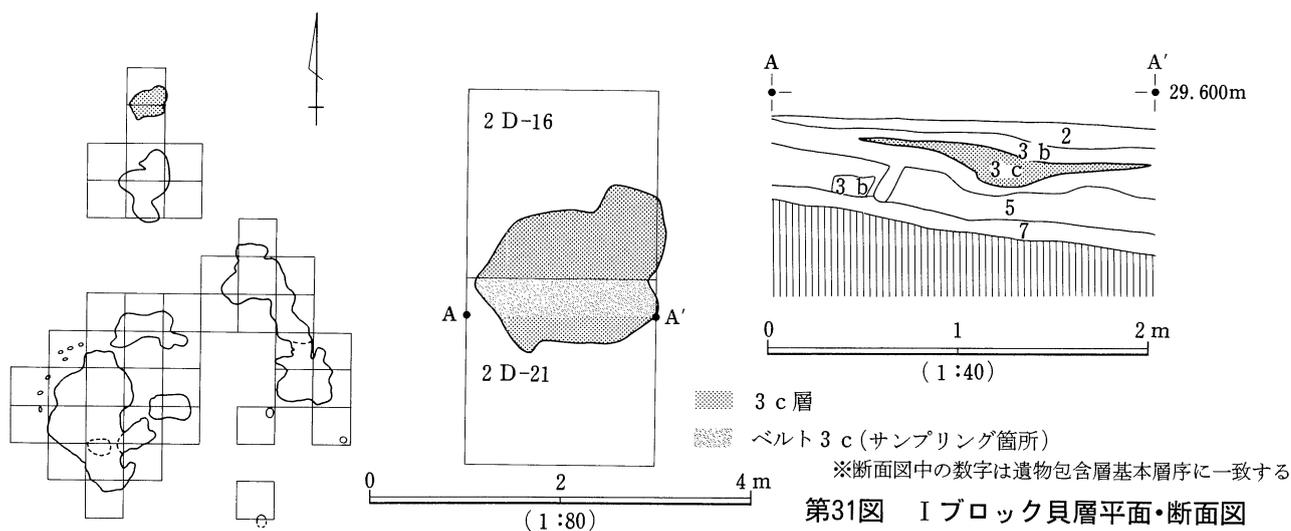
出されており、かなり集中する箇所もある。また、どのブロック中からもかなり小さな破片（2～3mm大）を検出できたことは、詳細処理サンプルを実施した成果の一つである。剥片石器の製作を考える上で貴重なデータと言える。重量と破片数を示した。石材は黒曜石・チャート・頁岩などである。

<土器>

土器については貝層サンプルの水洗選別により、かなり細片にいたるまで採集できた。貝層中に遺棄されたような完形資料はなく、ほとんどが廃棄されたとみられる破片資料である。表中には、重量と破片数を示した。また貝層中出土の資料を重量比として時期別にグラフにしたのが第28図で、貝ブロック・サンプル別、グリッド別にその重量を集計したのが第7・8表である。3c層・3b層とも、貝ブロック間・グリッド間に時期差はほとんど認められず、加曾利E式・称名寺式・堀之内II式・加曾利B式もわずかに見られるが、90%近くを堀之内I式が占めている。

2 貝層出土の人工遺物

a 3c層（混土貝層）ブロック別貝層の概要と出土土器



Iブロック (第31・32図)

貝層：最も北側に位置するブロックで、南北1.7m・東西1.8mの不整楕円形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で20cmほどである。ハマグリ・イボキサゴを主体とする混土貝層。

土器：あまり大型の破片資料はない。1は加曾利E式の口縁部がやや内湾し、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される深鉢形土器の口縁部資料である。2・3は称名寺式の深鉢形土器の口縁部および胴部資料で、沈線による区画内が縄文で充填されるものである。4・5も称名寺式の深鉢形土器の胴部破片であるが沈線による区画内に列点が施されるものである。6～14は堀之内I式の深鉢形土器の口縁部および胴部の破片資料である。6・11は口縁部以下が縄文となるもの、7と8は口縁部直下に横位の沈線をめぐらし、それ以下が縄文となるもの、9・10は口縁部直下に連続する円形の刺突文様をもつもの、12～14は地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。15は堀之内II式の鉢形土器の胴部破片であるが、沈線による菱形区画内に帯状に充填縄文がみられる資料である。

IIブロック (第33～35図)

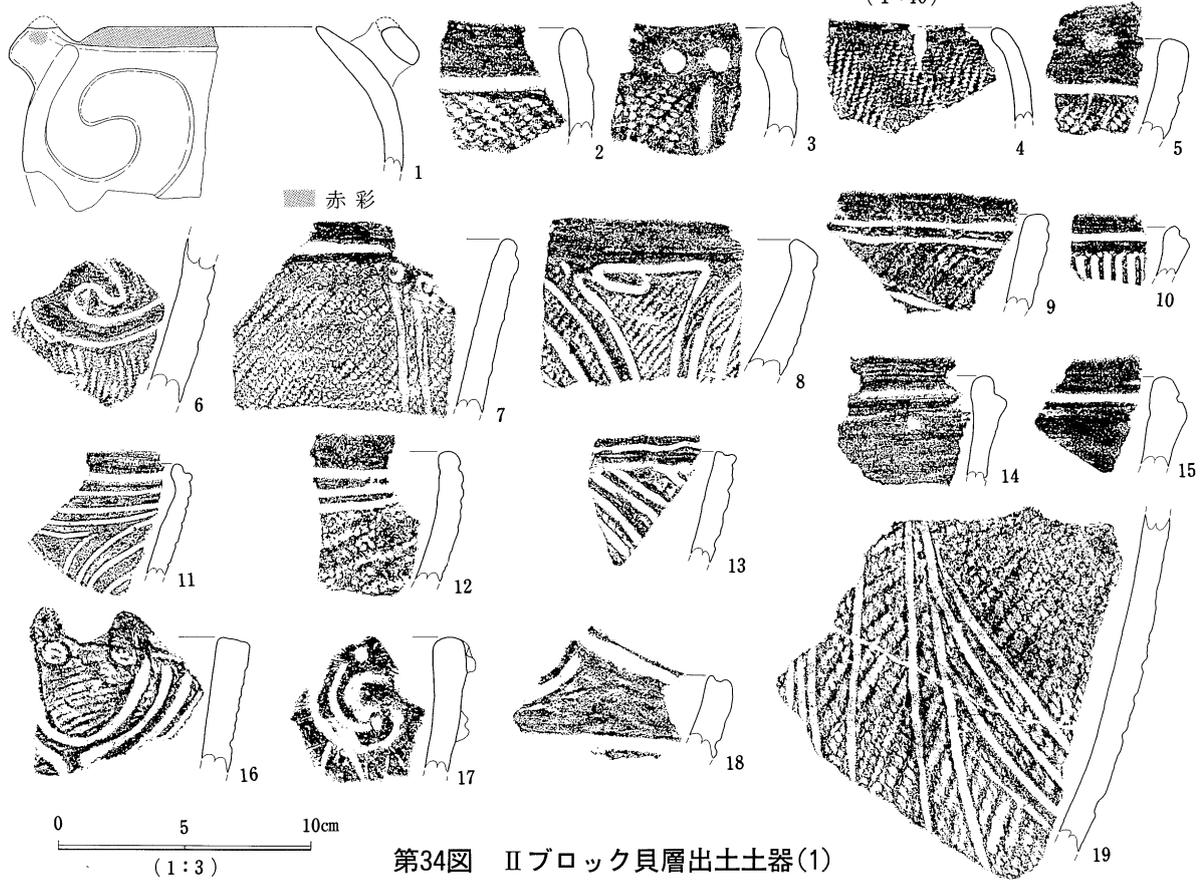
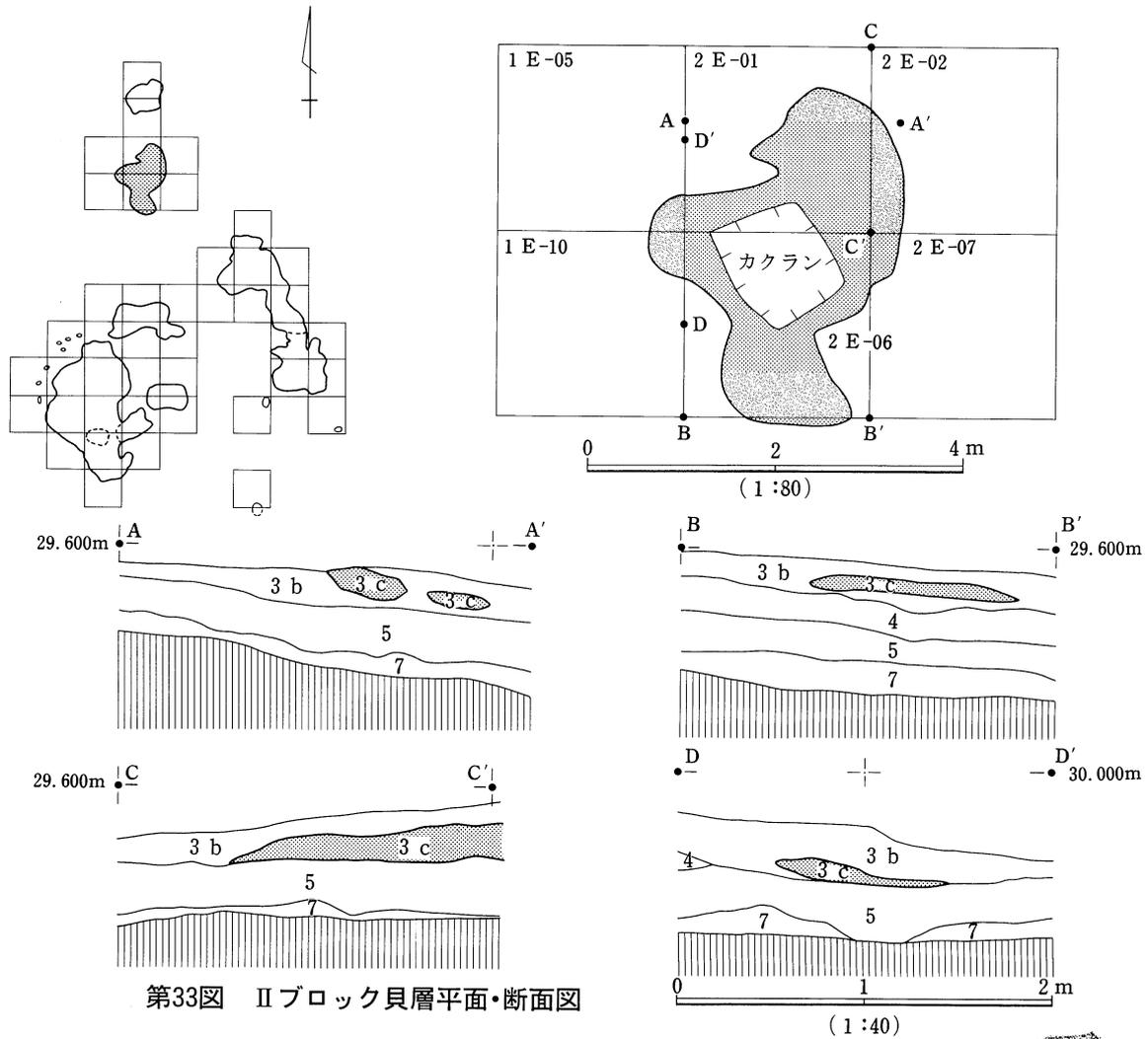
貝層：Iブロックの南に位置し、南北3.7m・東西2.7mの不整形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で20cmほどである。中央部がカクランされている。イボキサゴ・ハマグリを主体とする混土貝層。

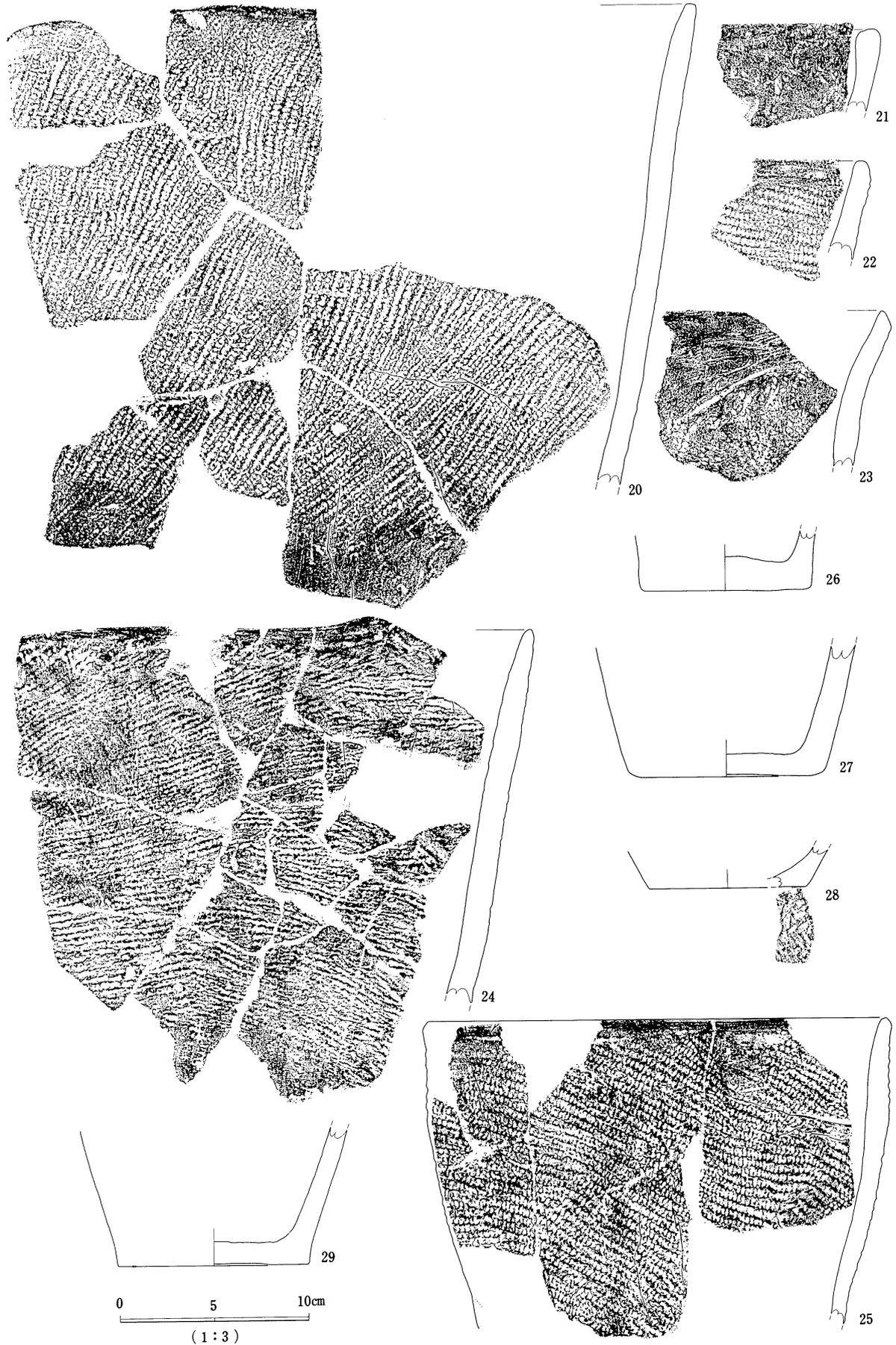
土器：復元実測可能な大型の土器片を含む資料が出土している。1～6は加曾利E式である。1は口径推定8.2cmを計る、口縁部がやや内湾する深鉢形土器の口縁部から胴部上半の資料である。口縁部直下に橋状の把手が付く。この一部と口縁部直下8mmが帯状に赤彩されている。口縁部以下には微隆起によって「の」の字状に区画される。2～4は口縁部がやや内湾する深鉢形土器の口縁部資料であり、2・5は口縁部直下の無文帯とそれ以下の縄文部分を横位の沈線で区画する。3は口縁部直下に連続する円形の刺突文様をもちそれ以下に縄文を施すが、縦方向の沈線文様もみられる。4は口縁部以下が縄文となるものであるが比較的器厚は薄い。6には磨消縄文がみられる。7～25は堀之内I式である。7～9・11～13・16・19は地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。20～25は口縁部以下が縄文となる深鉢形土器である。24は口縁部にはゆるい波状がみられる。25は口径推定24.4cmである。26～29は底部資料であるが、28には網代痕跡が認められる。

IIIブロック (第36・37図)

貝層：IIブロックの南西に位置し、南北5.1m・東西4.9mの不整形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で15cmほどである。イボキサゴ・ハマグリを主体とする混土貝層。

土器：割合大型の破片資料もあるが、復元実測可能なものはない。1・2は加曾利E式の口縁部がやや内湾し、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される深鉢形土器の口縁部資料である。3～6は称名寺式の深鉢形土器の口縁部および胴部資料で、沈線による区画内が縄文で充填されるものである。7はも称名寺式の深鉢形土器の口縁部資料であるが、沈線による区画内に列点が施されるものである。8～25は堀之内I式の深鉢形土器の口縁部資料である。8～19までは地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。8と9には蕨状の文様がみられる。20・21は口縁部直下に連続する円形の刺突文様をもつ。22～24は口縁部以下が縄文となる深鉢形土器であ

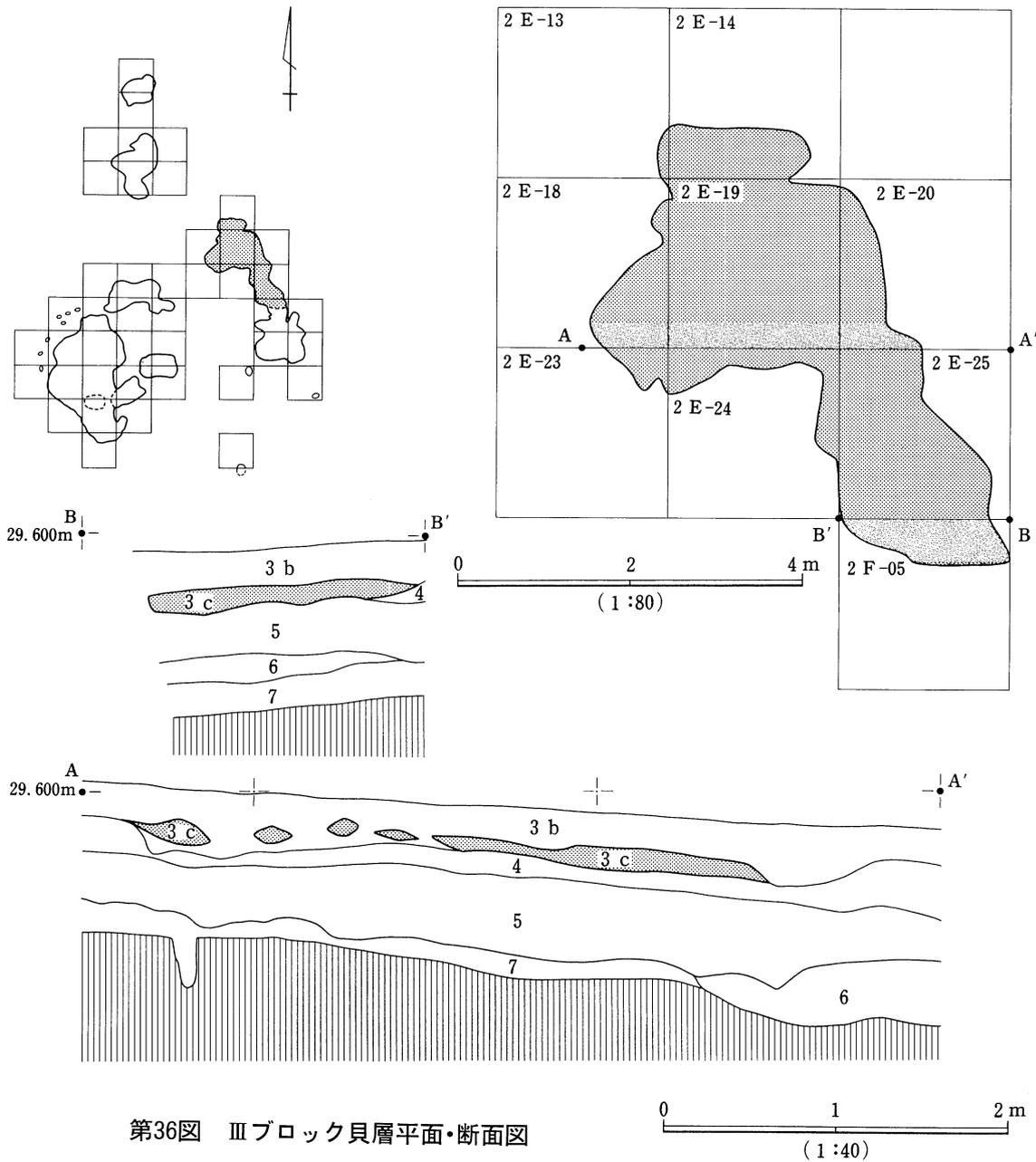




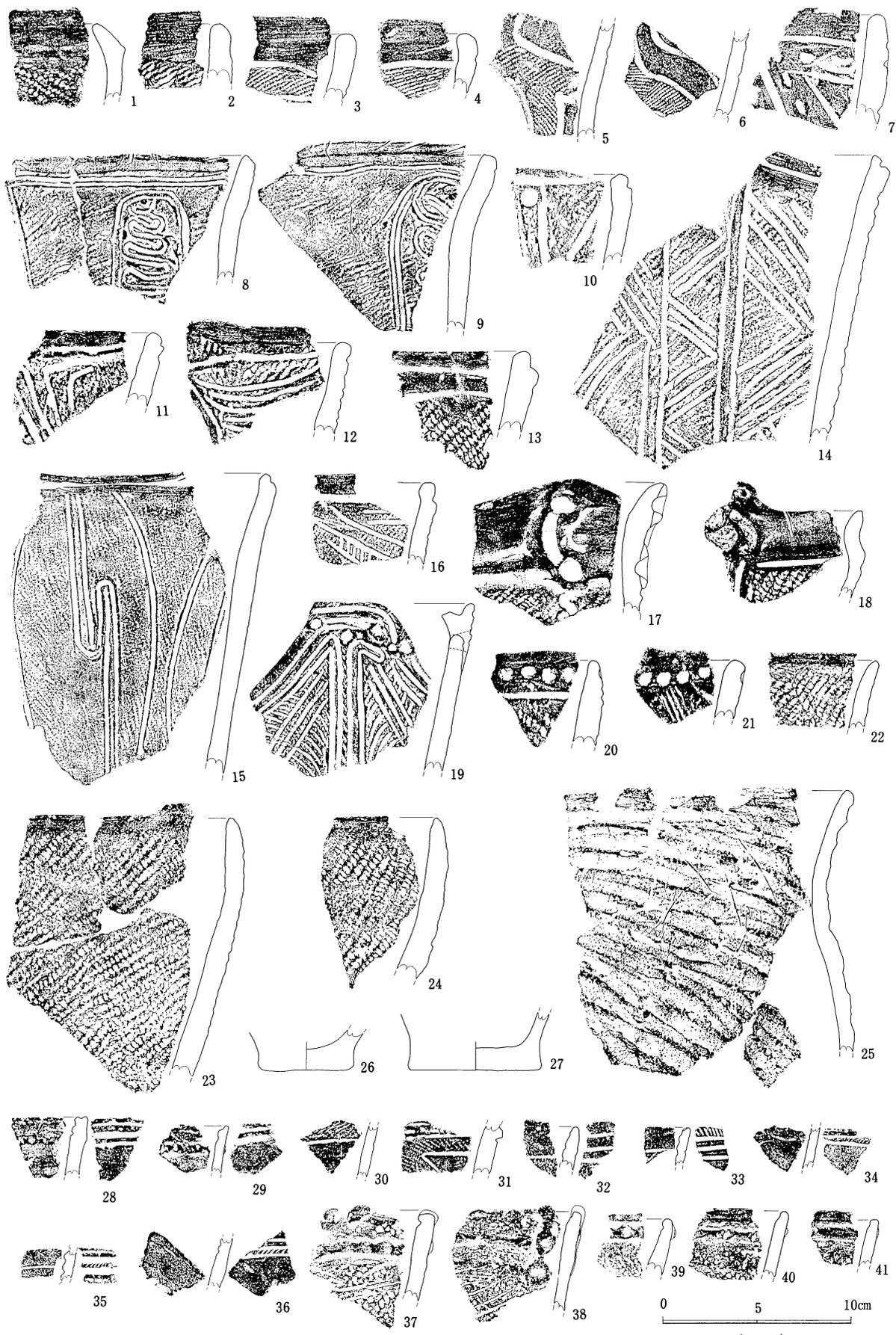
第35図 IIブロック貝層出土土器(2)

る。23は口縁部が平縁ではなくゆるい波状部がみられる。25は内面の整形は比較的入念であるが、外面は右下がり方向に指頭または工具による調整痕を器面全面に残す資料である。類例は東京都日暮里延命院貝塚の貝層外土層出土土器中にみられる(注1)。28~41は小破片であるが堀之内Ⅱ式・加曾利B式の資料である。28・29・31には口縁部直下に細い紐線文がみられる。31は沈線による区画内に充填縄文がみられる資料である。28・29・32~36には内面にも横位の沈線による文様がみられ、33~36には沈線間に刻み目がみられる。37~41は粗製土器である。口縁部直下に紐線文がみられ、38にはさらに縦方向にも紐線文が添付されている。紐線文以下は縄文となるが、37・38にはその上に半截竹管や櫛状工具による条線が加えられている。

(注1)菅谷通保「第5章 第2節 土器」『日暮里延命院貝塚』p208 第5-73図 (1990) 東京都荒川区教育委員会



第36図 IIIブロック貝層平面・断面図

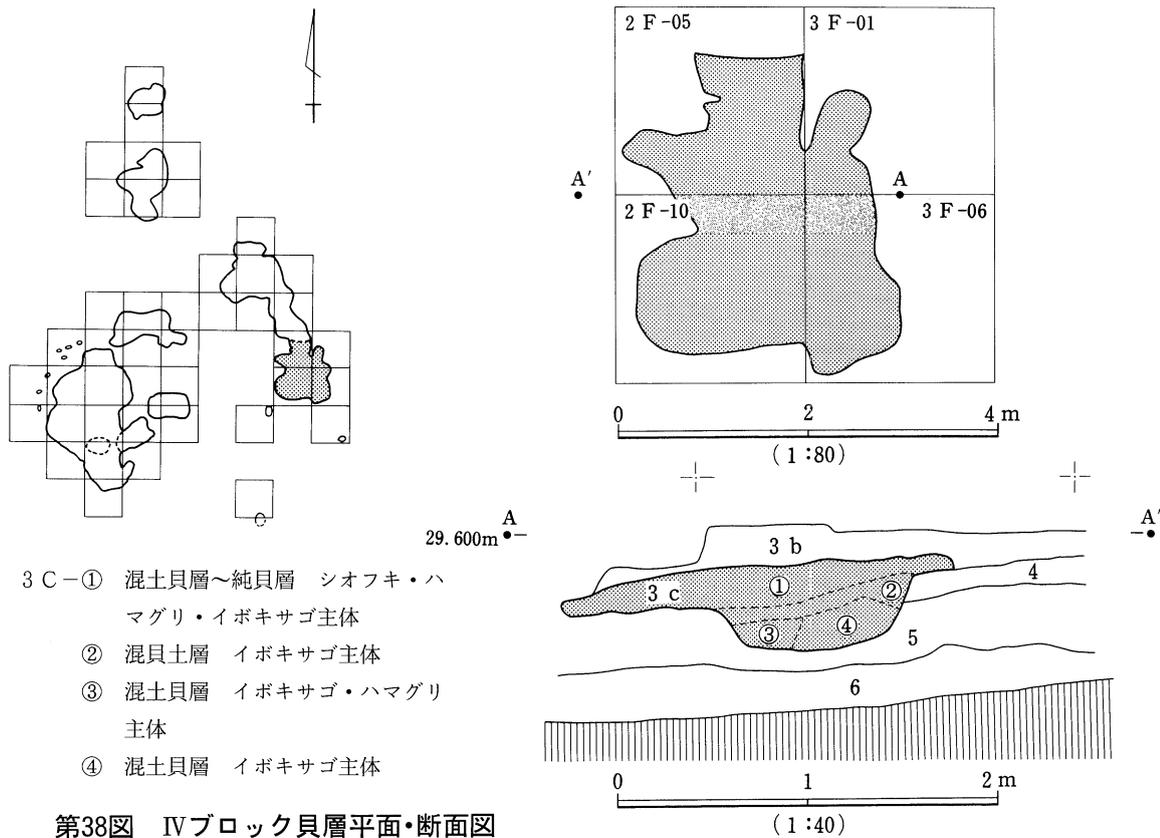


第37図 IIIブロック貝層出土土器

IVブロック（第38・39図）

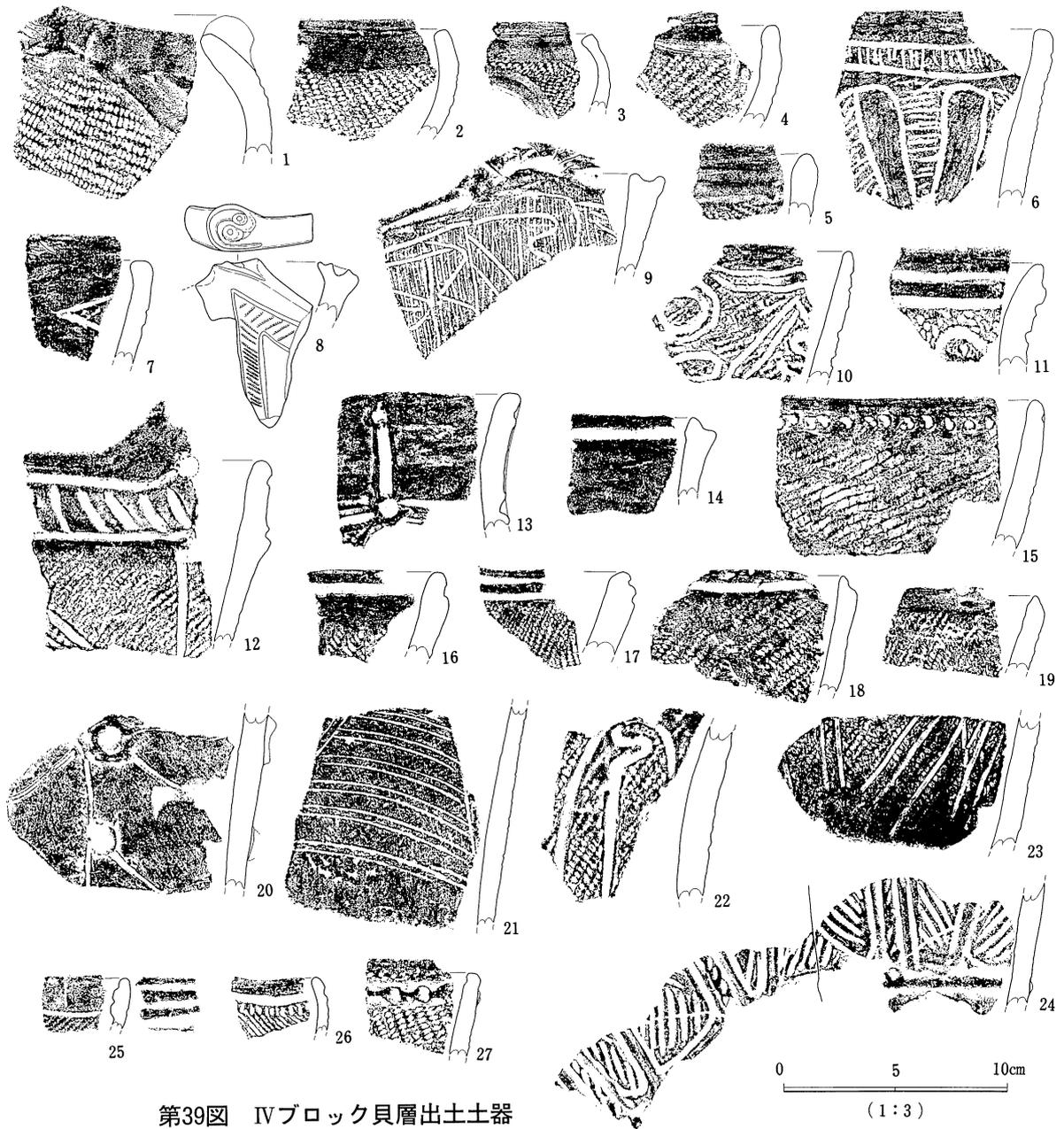
貝層：Ⅲブロックの南に接して存在する。南北3.1m・東西2.8mの不整形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で50cmほどである。貝種と混土率によって、4層に分層した。①層はシオフキ・ハマグリ・イボキサゴ主体の純貝層に近い混土貝層、②層はイボキサゴ主体の混貝土層、③層はイボキサゴ・ハマグリ主体の混土貝層、④層はイボキサゴ主体の混土貝層である。

土器：1～5は、加曾利E式の口縁部がやや内湾し、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される深鉢形土器の口縁部資料である。1と3には部分的に磨消がみられる。また1には口縁部につまみあげたような貼り付けがみられる。6は口縁部直下に2条の沈線が横位にひかれその中に縦位に沈線が充填される。その下には沈線による短冊形の区画が施され、区画外を横もしくは斜め方向に沈線で充填する。7・8は称名寺式の深鉢形土器の口縁部資料である。沈線による区画内に縄文が充填されている。8の口唇部は内側に屈曲し、頂部に円形の刺突文様をともなう逆「の」の字状の文様が付される。9～24は堀之内I式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。9は口縁部以下に縦方向に沈線による地文があり、その上に沈線による曲線文様を施している。10・11・12・22・23は地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。12は口縁部直下に太めの沈線が2条横位にめぐりその間に右斜め方向に同様の沈線が施されている。また口縁部は一部山形になり、その付け根あたりに小孔があく。16・17・18は口縁部直下に1ないし2条の横位の沈線がめぐり、その下に縄文が施されるものである。19は口縁部以下が縄文となるものである。20は胴部破片であるが、中央部がややくぼむボタン状の貼付文がありその間が沈線によって結ばれている。21には半截竹管などの工具を使った縦横方向の沈線文様が見られる。24は胴部の径をおよそ復元できる資料



- 3 C-① 混土貝層～純貝層 シオフキ・ハマグリ・イボキサゴ主体
 ② 混貝土層 イボキサゴ主体
 ③ 混土貝層 イボキサゴ・ハマグリ主体
 ④ 混土貝層 イボキサゴ主体

第38図 IVブロック貝層平面・断面図



第39図 IVブロック貝層出土土器

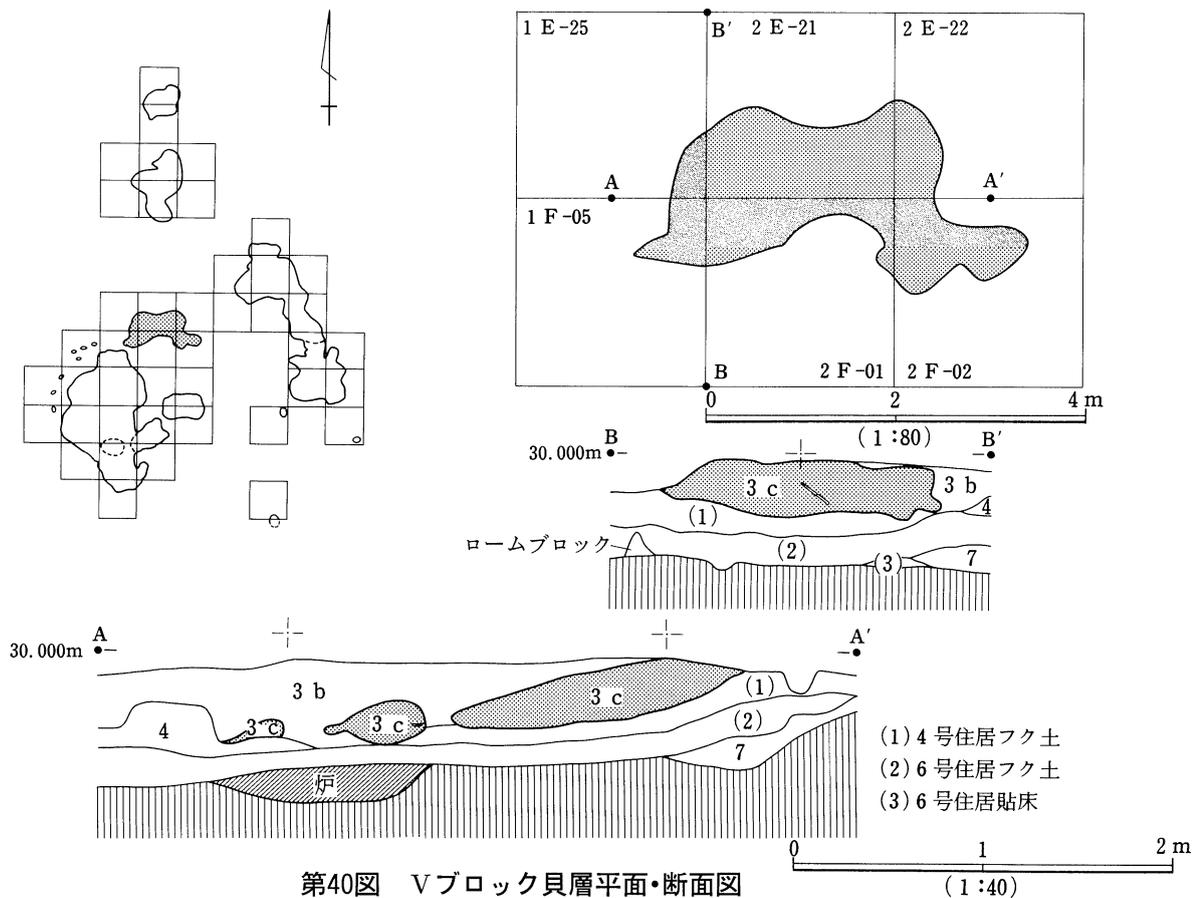
である。最大径は10.6cmある。縦方向に3本の鎖状の貼付文で区画し、その内部を斜め方向に太めの沈線で充填する。25は内面に横位の沈線文様がある。26は口縁部がやや内湾し、口縁部直下に1条の横位の沈線とその下に連続する円形の刺突文様がある。27は口縁部直下に紐線文をもちそれ以下が縄文となる加曾利B式の粗製土器である。

Vブロック (第40~42図)

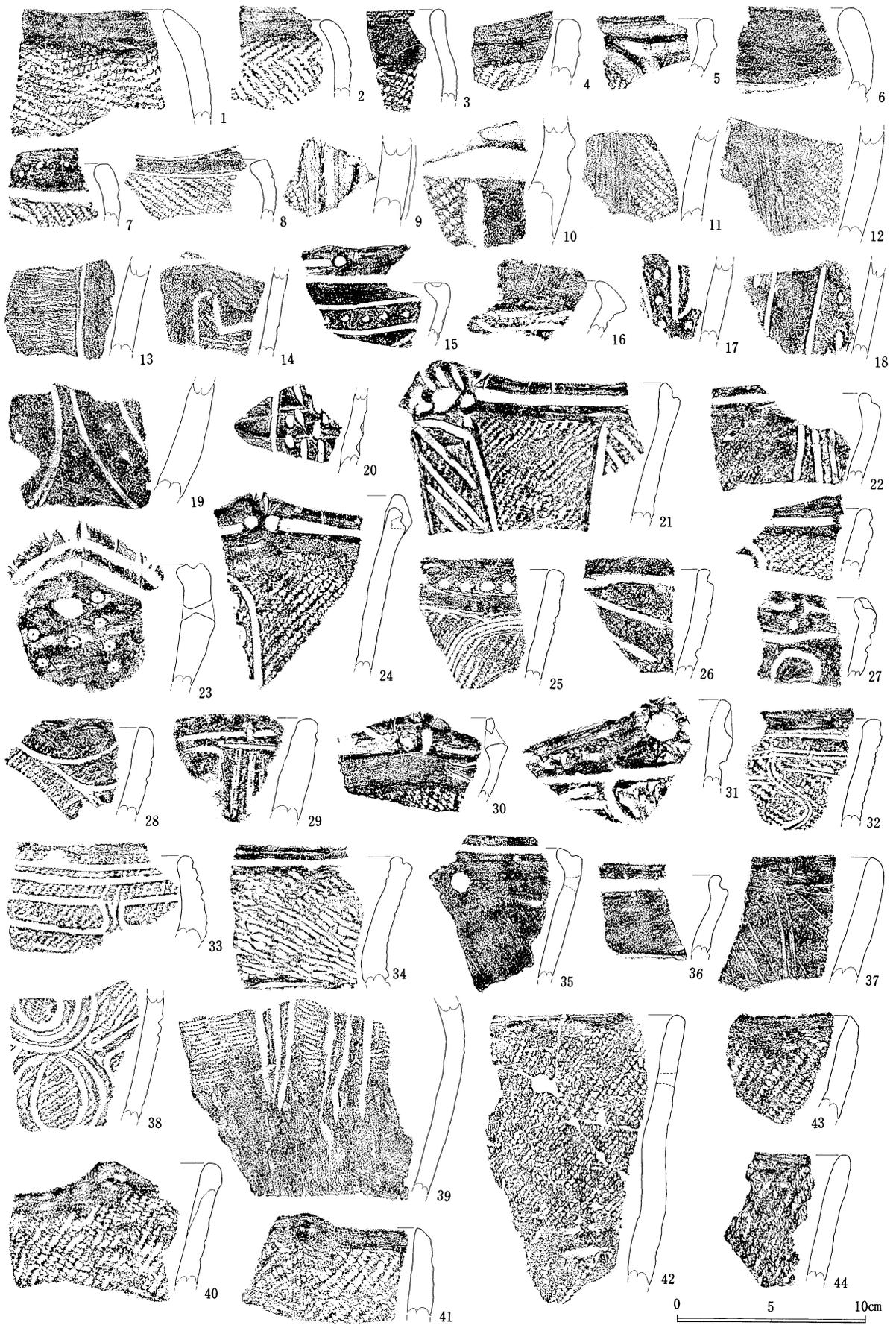
貝層：IIブロックの南に位置する。南北2.0m・東西4.2mの不整形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で30cmほどである。位置的には6号住居址の南半部、層位的には4号住居址の覆土上層にあたる。イボキサゴ・ハマグリを主体とする混土貝層。

土器：1~12は加曾利E式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。1~4・6は口縁部がやや

内湾し、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される土器の口縁部資料である。2には羽状縄文がみられる。7・8は口縁部直下の無文部と縄文部の境界を横位の沈線によって区画する。5・9には縄文間に微隆起がみられる。7・10・11・12には磨消縄文がある。13は縦位の沈線によって区画されるが、区画内は撚糸文である。14~20は称名寺式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。14は沈線による区画内を縄文で充填している。15・17~20は沈線による区画内を列点で充填する。15・16の口唇部は内側に屈曲し、15には頂部に沈線と円形刺突文様がある。21~46は堀之内I式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。21・22・24~34・38・39は地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。23は、ゆるやかな山形の口縁部をもち、一つの孔とその周囲に円形の刺突文を有する。25は口縁部直下に円形の刺突文がならぶ。33は口縁部直下に2条の横位の沈線がめぐり、その下に沈線による横位に連続する長方形区画がみられる。37は半截竹管などの工具で、縦や斜め方向に粗く線をひいた文様が口縁部直下からみられる土器である。40~46は口縁部直下から全面に縄文を施す土器の口縁部破片である。このうち40・41は小さな山形の突起をもつ。49は注口土器の注口部の破片である。50~55は堀之内II式、加曾利B式の破片である。50には口縁部下に横位の細い紐線文が2条みられる。51にも口縁部下に横位の細い紐線文が1条あるが、その下には沈線による菱形の区画がみられる。52は胴部下半の資料であるが、沈線による連続する菱形・三角形の区画がみられる。51と同一固体の可能性もある。53は無文の浅鉢形土器の口縁部である。口径推定22.3cm。54は内外面に縄文を充填した横帯文をもつ。55は口縁部直下に紐線文をもちそれ以下が縄文となる粗製土器である。

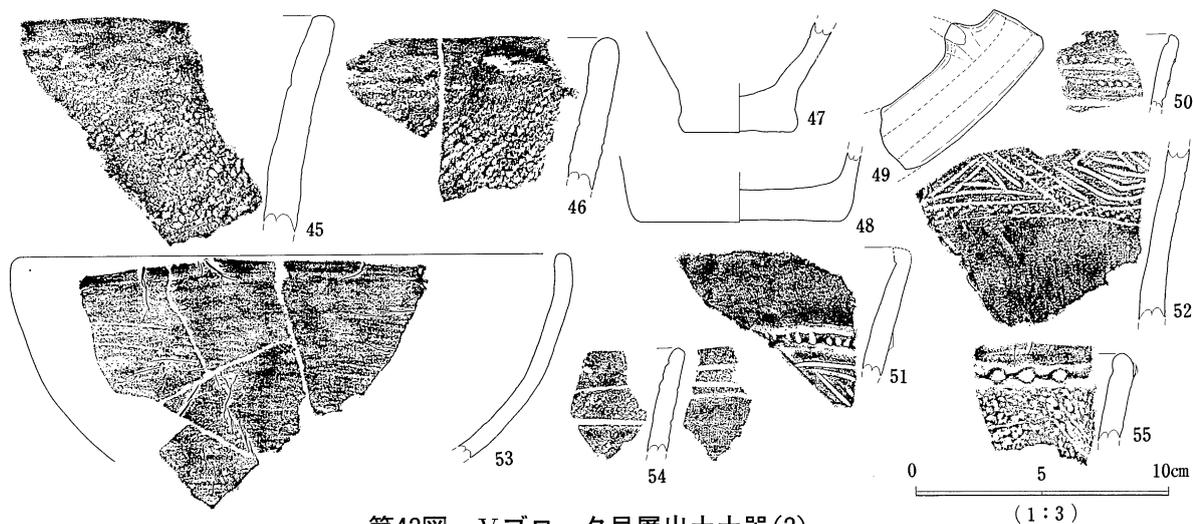


第40図 Vブロック貝層平面・断面図



第41図 Vブロック貝層出土土器(1)

(1:3)

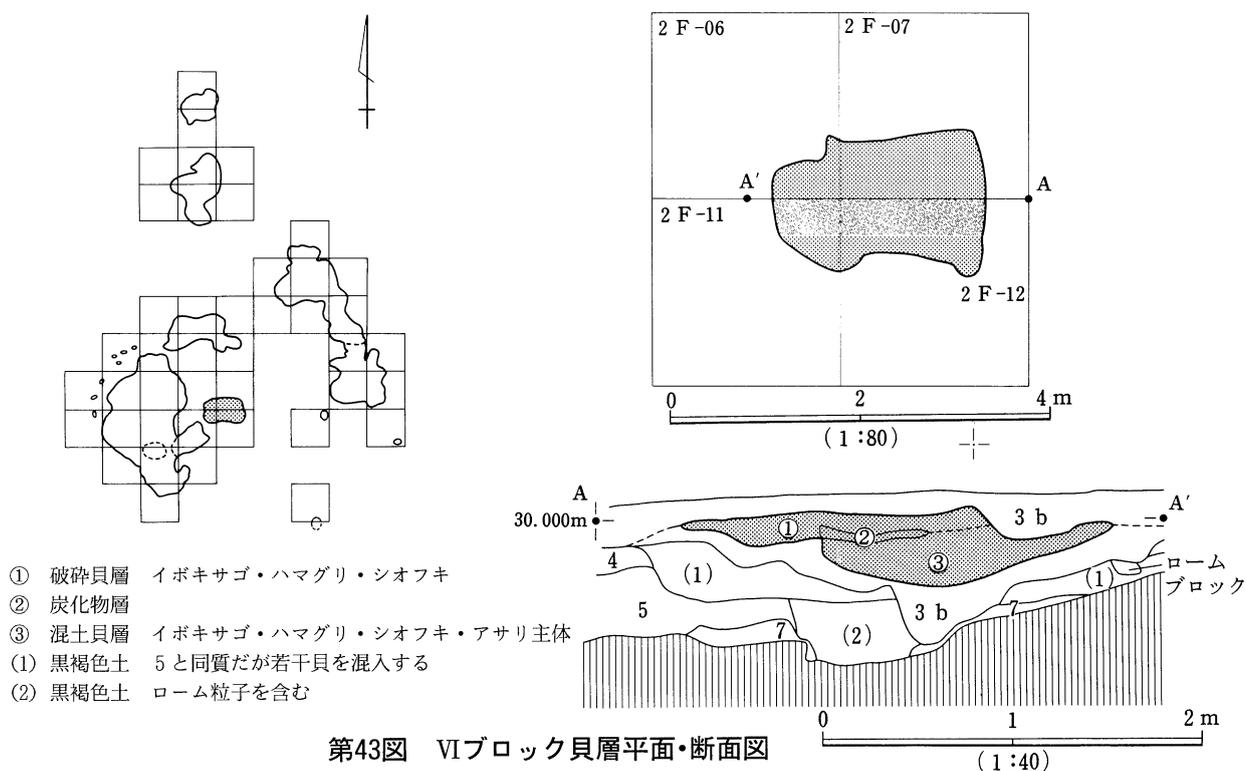


第42図 Vブロック貝層出土土器(2)

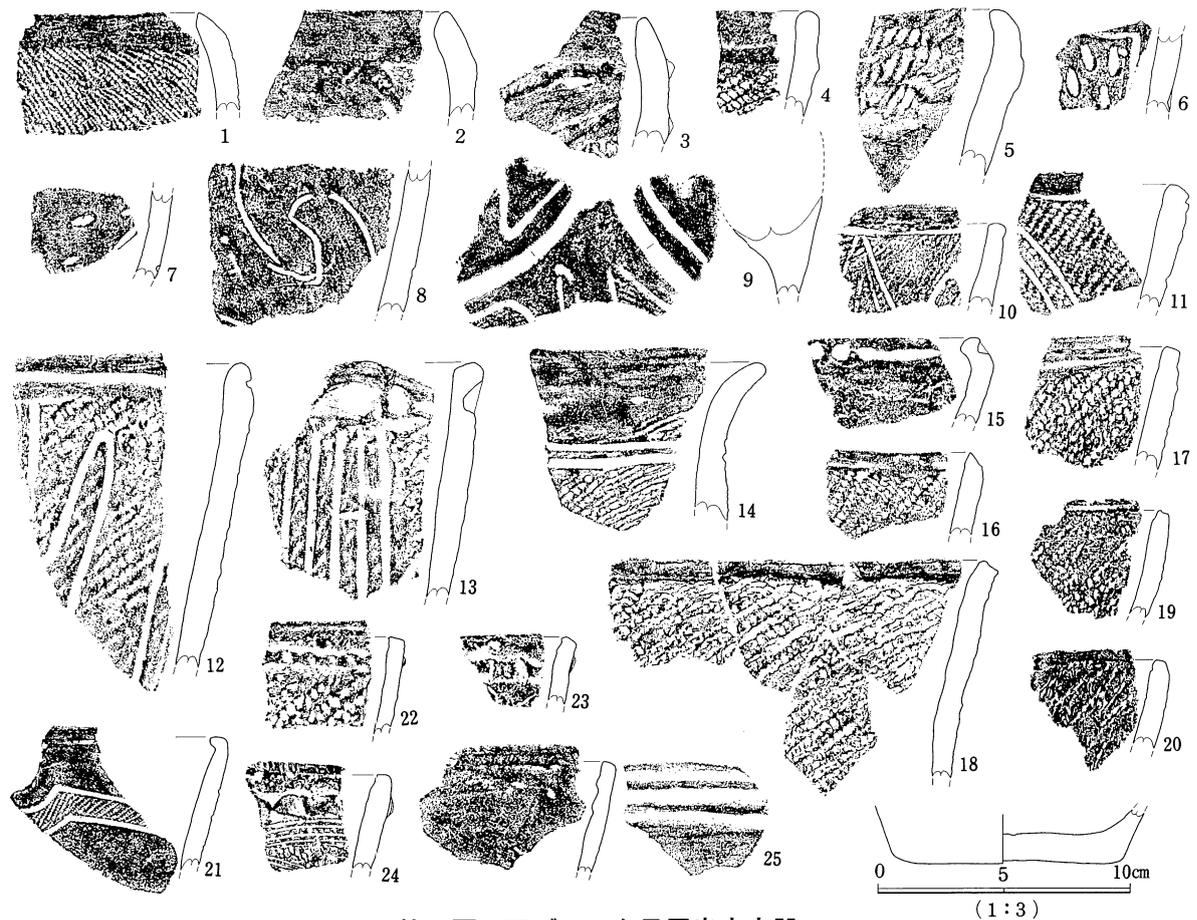
VIブロック (第43・44図)

貝層：Vブロックの南に位置する。南北1.6m・東西2.2mの不整形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で40cmほどである。貝殻の破碎状況、貝種により3層に分層できる。①層はイボキサゴ・ハマグリ・シオフキの破碎貝層、②層は①層に類似するが炭化物を多く含む層、③はイボキサゴ・ハマグリ・シオフキ・アサリ主体の混土貝層である。また断面観察によると、貝層の下部の土層に窪み状の落ち込みがみられ、人為的に掘り込まれたかあるいは自然に窪んでいた地形を利用して貝殻を廃棄したようである。

土器：1～4は加曾利E式の、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される深鉢形土器の口縁部の破片である。2・3には縄文間に微隆起がみられる。6～9は称名寺式の深鉢形土器の口縁



第43図 VIブロック貝層平面・断面図

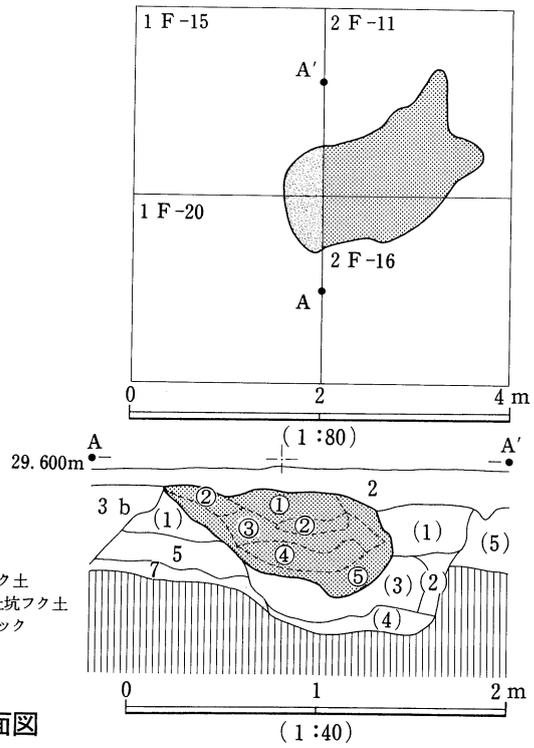
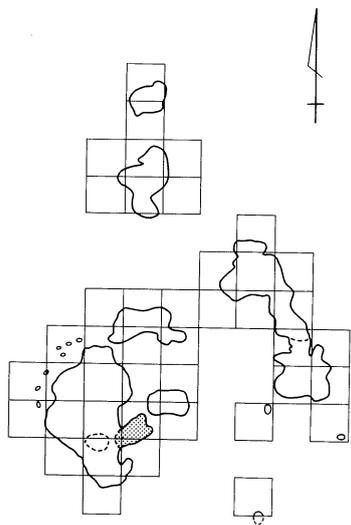


第44図 VIブロック貝層出土土器

部および胴部破片である。9は沈線による区画内を縄文で充填している。またこの資料の口唇部は内側に屈曲し、口唇頂部にも沈線による文様がある。6・7は沈線による区画内を列点で充填する。8は沈線による区画内が無文である。10～20は堀之内Ⅰ式の深鉢形土器の口縁部破片である。10～14は、地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。16～20は口縁部直下から全面に縄文を施す土器の口縁部破片である。21～25は堀之内Ⅱ式、加曾利B式の破片である。21は口唇部がやや内側に屈曲し、口縁部直下から横位に沈線による細い帯状の区画内に縄文を充填する文様が付される。22～24は口縁部直下に紐線文をもちそれ以下が縄文となる粗製土器である。23・24にはさらに半截竹管などの工具による沈線が付される。25は外面は無文であるが、内面に横位に2条の浅い沈線がめぐる。

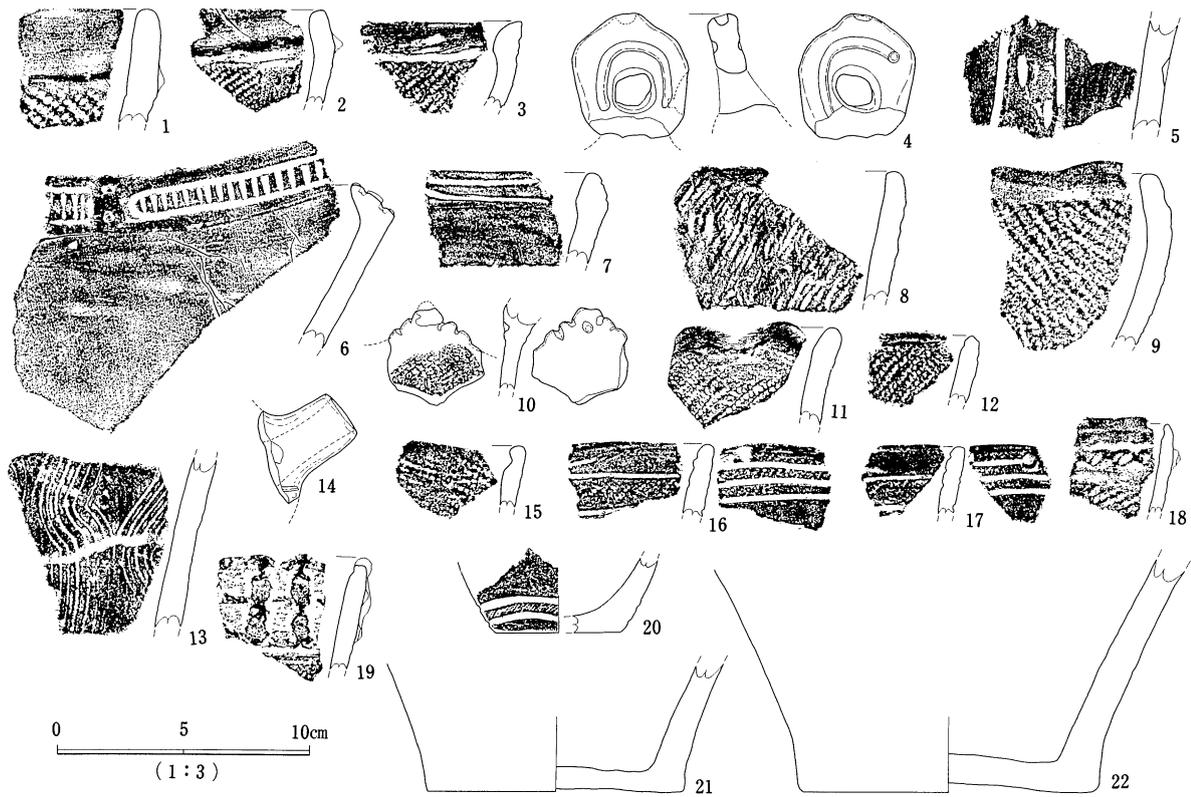
VIIブロック (第45・46図)

貝層：VIブロックの南西に位置し、西端はIXブロックと接する。南北1.4m・東西2.1mの不整楕円形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で55cmほどである。貝殻の破碎率および混土率によって、5層に分層した。①～③層はイボキサゴ主体の混土貝層で破碎率が高い。断面観察では、多少土壌混入の度合いに差がみえたため分層した。④層はイボキサゴ主体の混土貝層である。⑤層はイボキサゴ主体の混貝土層である。層位的には、4号住居址の覆土を切り込んだかたちで存在し、位置的には9号土坑の覆土の上部にある。



- ① 混土貝層 イボキサゴ主体 破碎すすむ (1) 4号住居フク土
- ② 混土貝層 イボキサゴ主体 破碎すすむ (2)~(4) 9号土坑フク土
- ③ 混土貝層 イボキサゴ主体 破碎すすむ (5) ロームブロック
- ④ 混土貝層 イボキサゴ主体
- ⑤ 混貝土層 イボキサゴ主体

第45図 VIIブロック貝層平面・断面図



第46図 VIIブロック貝層出土土器

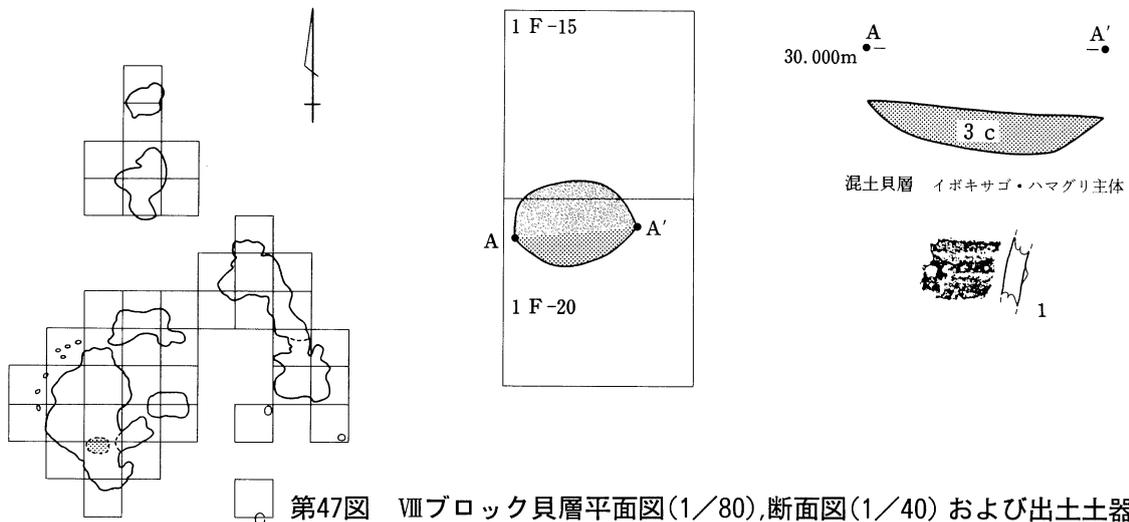
土器：1・2は加曾利E式の、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される深鉢形土器の口縁部の破片である。無文帯と縄文部との境界には微隆起が付される。4は把手部分の破片である。中央部が穿孔されその周囲に沈線文様が一条めぐる。5は称名寺式の深鉢形土器の胴部破片である。沈線による区画内を列点で充填している。6は堀之内I式の浅鉢形土器の口縁部破片である。口唇部は内側に屈曲し、この部分に沈線による横位の帯状の区画を描き、その内部を縦位の沈線で埋めている。この文様が本資料には2単位みられその間に8の字貼付文が付される。類例は市原市山見塚遺跡28トレンチ中の資料に見られる(注1)。3・8・9・11・12は口縁部直下から全面に縄文を施す土器の口縁部破片である。3には横位に1条の沈線がみられる。11の口縁部はゆるい山形となっている。10は小さな山形をした把手状の破片である。頂部に刻みが付される。13は櫛状の工具で曲線文を施している。14は注口土器の注口部の破片である。15～20は堀之内II式、加曾利B式の破片である。16・17は内外両面に縄文を充填した横帯文が施される。18・19は、口縁部直下に紐線文をもちそれ以下が縄文となる粗製土器である。19には縦方向の紐線文も付される。20は底部破片であるが、底面直前に横位に1条の縄文を充填した細い横帯文が施されている。

(注1)木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』(1987)市原市文化財センター P169

VIIIブロック (第47図)

貝層：VIIブロックの西側、IXブロックの下に位置する。南北0.9m・東西1.3mの楕円形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で20cmほどである。10号土坑内に存在する。イボキサゴ・ハマグリ主体の混土貝層である。

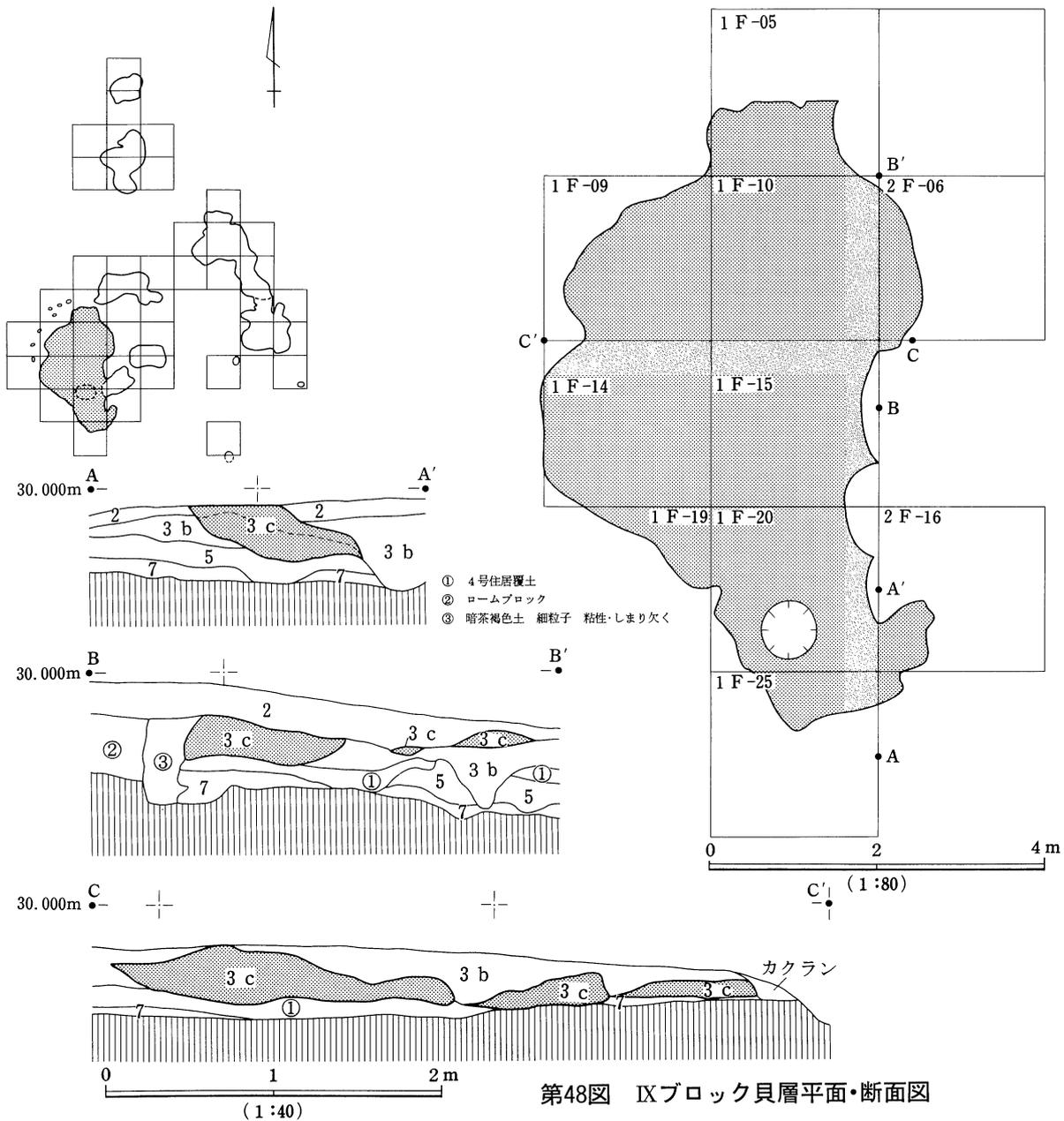
土器：堀之内II式の深鉢形土器の口縁部直下の小破片が出土したのみである。横位の細い紐線文がみられる。



第47図 VIIIブロック貝層平面図(1/80),断面図(1/40) および出土土器(1/2)

IXブロック (第48～50図)

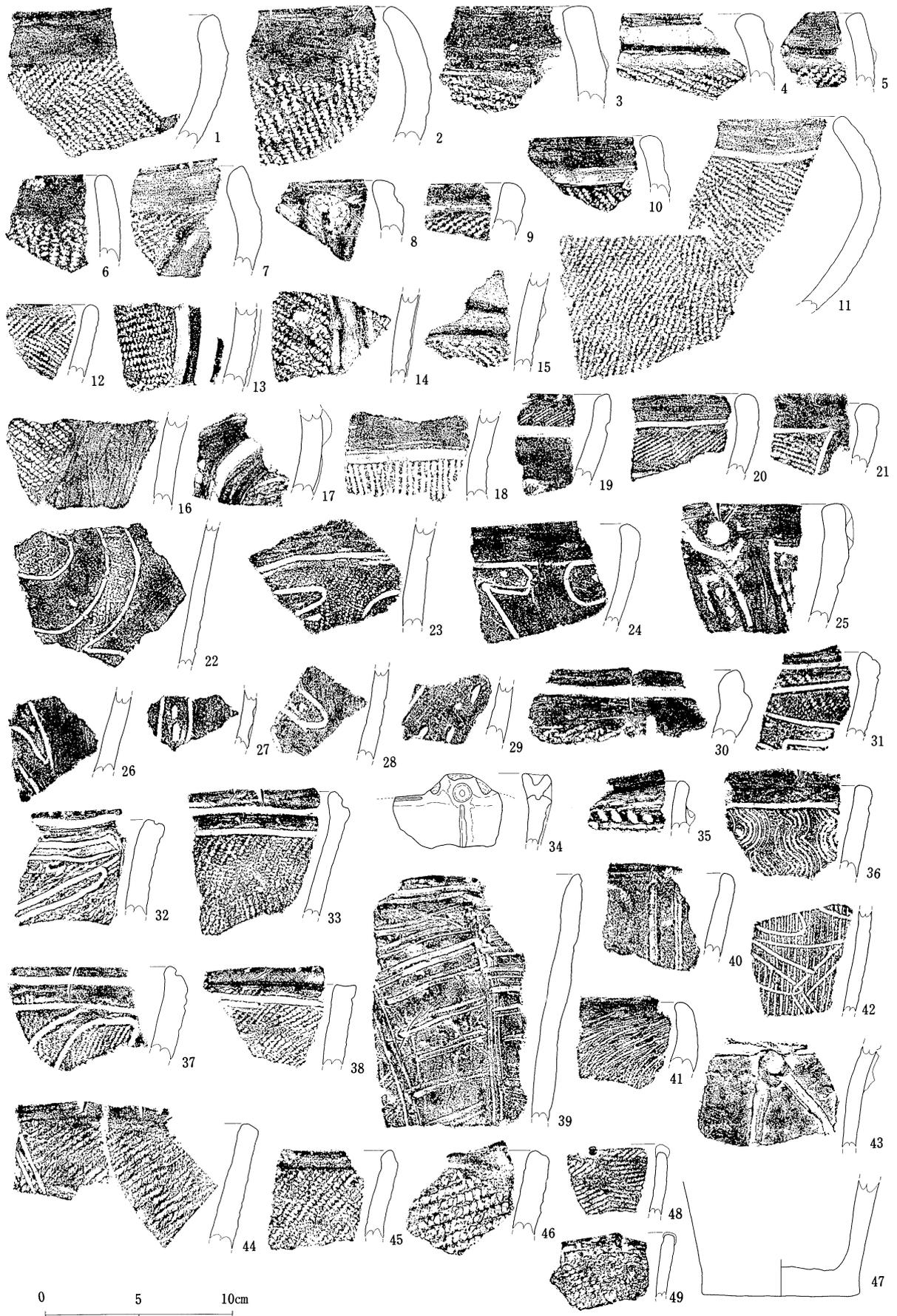
貝層：本貝塚の南西隅に位置する。南北7.8m・東西4.3mの不整形の範囲に広がりを持ち、厚さは最大で35cmほどである。今回調査の貝ブロック中最大の規模を有する。4号住居址の覆土上層に形成さ



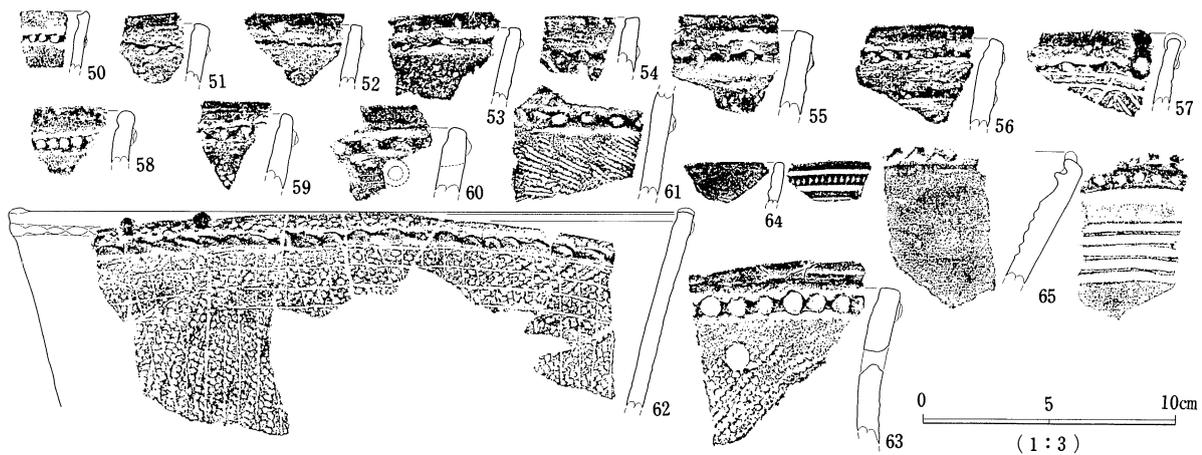
第48図 IXブロック貝層平面・断面図

れている。4号住居廃絶後、ある程度土壌が堆積し窪地となった段階で貝殻が廃棄されたものとみられる。貝層上面に一部貝殻の破碎率のやや高い部分も見受けられたが、分層できる程ではなかった。イボキサゴ・ハマグリを主体とする混土貝層。貝層の内容は、前述したⅧブロックとほぼ一致することから、本来両者は分離できない可能性もある。

土器：1～18は加曾利E式の深鉢形土器の口縁部および胴部の破片である。1～6・9～11は口縁部がやや内湾し、口縁部以下に無文帯をもちそれより下に縄文が施される土器の口縁部資料である。4・5には、無文帯と縄文部の境界に微隆起が、11には沈線がみられる。7・8・13～17は磨消縄文がみられる。18には撚糸文が施されている。12は羽状縄文がみられる。19～29は称名寺式の深鉢形土器の口縁部および胴部の破片である。19～23は沈線による区画内に縄文が充填され、24～29は列点を付している。30～49は堀之内I式の深鉢形土器の口縁部および胴部の破片である。30～33・37・38・44は、



第49図 IXブロック貝層出土土器(1)

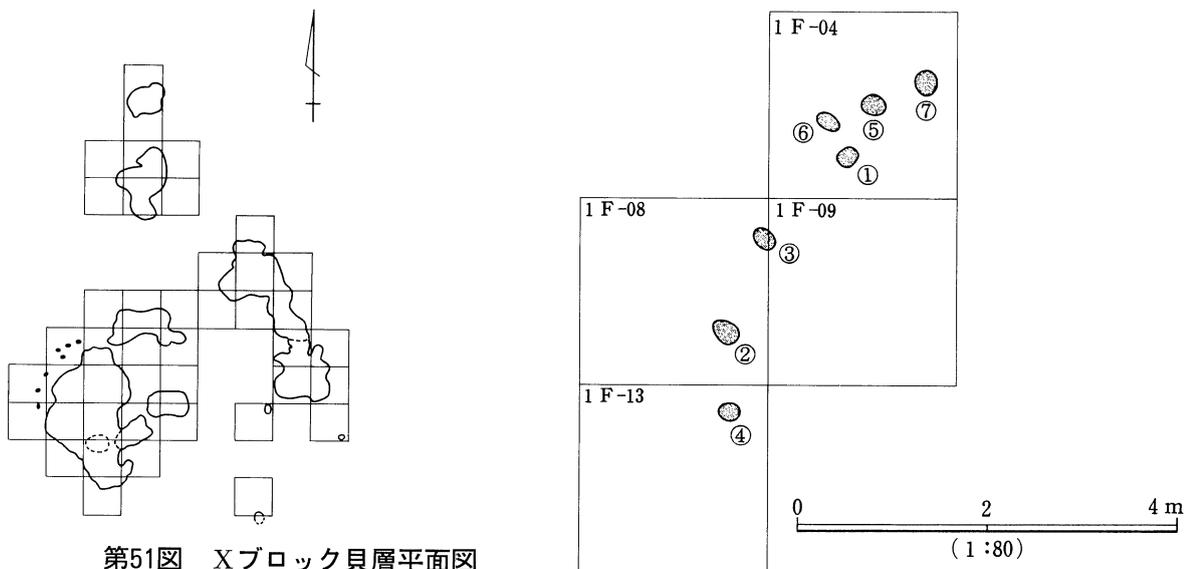


第50図 IXブロック貝層出土土器(2)

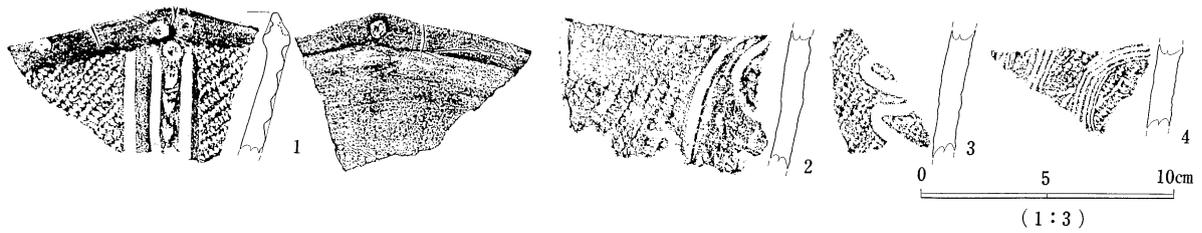
地文に縄文をもちその上に沈線による直線または曲線文様を有するものである。36・39～41は地文に縄文をもたず、半截竹管や櫛状の工具によって曲線文様や直線文様を描いたものである。42は地文の縦位の沈線上に曲線文を重ねるもので、IVブロック貝層中に口縁部の資料がある。43は中央がやや窪むボタン状の貼付文をもち、その間を沈線で連結するもので、同様の破片はIVブロック貝層中や4号住居址覆土中資料にもみられる。45～49は、口縁部直下から全面に縄文を施す土器の口縁部破片である。46には口縁の一部がゆるい山形となり、48・49には小さな貼付文がみられる。50～63は堀之内Ⅱ式、加曾利B式の破片である。50～63は口縁部直下に横位の紐線文を有する。62は口径の復元推定27.3cmをはかる土器で、縄文の上に半截竹管などの工具による格子状の文様をもつ。64・65は浅鉢形土器の口縁部破片で、外面は無文となるが内面に文様がみられる。65には口唇部に連続する円形刺突文が施される。

Xブロック (第51・52図)

貝層：IXブロックの西側に位置する7カ所の小地点貝層である。直径20～30cm、深さ40cmほどのピット内に堆積したものである。ピットは4号住居址の壁柱穴にあたると思われる。IXブロックの貝層の



第51図 Xブロック貝層平面図



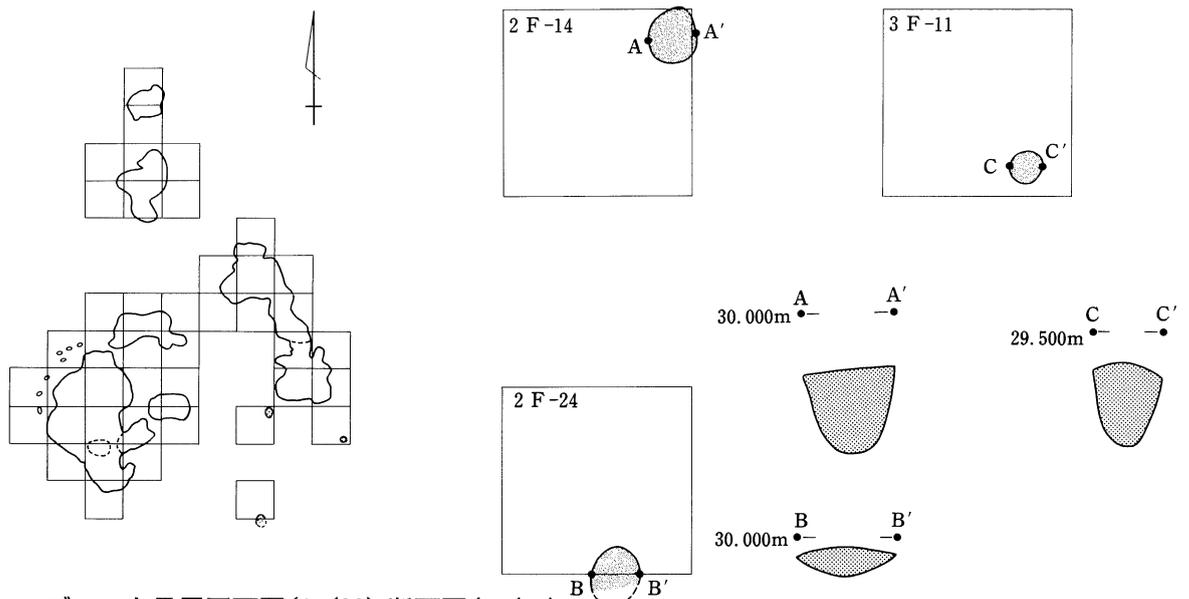
第52図 Xブロック貝層出土土器

西側では、ほぼ4号住居址の床面直上に貝層の堆積がみられることから、本来はXブロックの上面にもIXブロックの貝層が存在していたと考えられる。南側および東側の柱穴内に貝層がみられないのは、貝層形成以前に土壌が堆積したためだろう。これらの状況からすると4号住居は廃絶される際に柱穴が除去され、住居西側では柱穴内が埋まる前に貝殻が廃棄されたことになる。貝層は、イボキサゴ・ハマグリを主体とする混土貝層でIXブロックの内容とほぼ一致する。

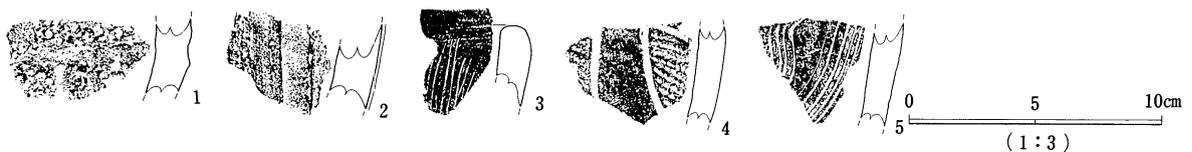
土器：貝層の規模が小さいため、出土した土器はわずかである。いずれも、堀之内I式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。縄文地文に沈線による直線・曲線文様をもつものである。

XIブロック (第53・54図)

貝層：IVブロックの南に位置する3地点の小地点貝層である。直径30~50cmの円形の範囲内に堆積し、厚さは15~45cmほどありあるいはピット状の掘り込み内に廃棄されたものかもしれない。イボキサゴ・ハマグリを主体とする混土貝層であるが、北側と南側のブロックにはシオフキが多く含まれている。土器：貝層の規模が小さいため、出土した土器はわずかである。1・2は加曽利E式、4は称名寺式3・5は堀之内I式であろう。



第53図 XIブロック貝層平面図(1/80),断面図(1/40)



第54図 XIブロック貝層出土土器

b 3b層（混貝土層）出土土器（第55～61図）

第8表に、3b層から出土した土器のうちわけをグリッド別に示した。3a層の場合と同じように、加曾利E式・称名寺式・堀之内II式・加曾利B式もみられるが、どのグリッドでもほぼ主体を占めるのは堀之内I式である。

1～20・22～57までは加曾利E式とみられる土器である。

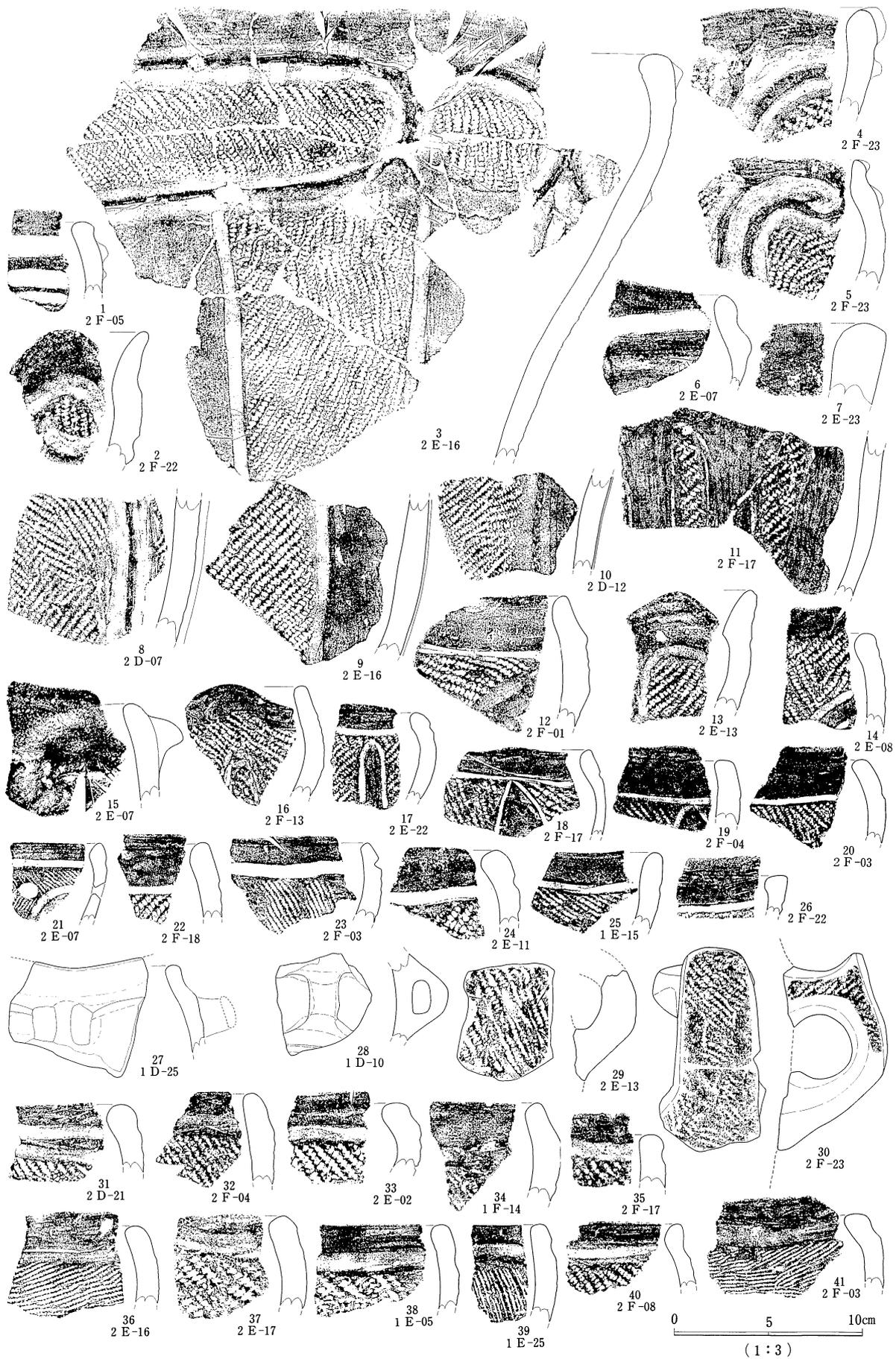
1～11・13・14・16は微隆起や幅ひろの浅い沈線によって口縁部直下に文様帯をつくる土器である。3はかなり大型の口縁部破片であるが、口径の復元はできなかった。相当大型のキャリパー形の土器となろう。口縁部直下に微隆起で楕円文をつくり、内部に縄文を施す。これ以下は、幅ひろの浅い沈線によって縦位に区画され、縄文部・無文部が交互にくり返される。9・10は同様の土器の胴部破片である。2・13・16の口縁部はゆるい山形である。12・17～19は、口縁部直下に無文部をもちその下に縄文部をもつが、その境界に沈線が施され、縄文部内に磨消のみられる資料である。20・22～26も同様の資料であるが、縄文部内に磨消がみられるかどうかは定かでない。15には口縁部直下に突起状の貼付がある。27は橋状の把手を有するもの、28～30は耳状の把手のつくものである。また29・30には把手の側面にも縄文が付されている。31～57は、口縁部直下に無文部を有し、それ以下全面に縄文が施される口縁部がやや内湾する深鉢形土器の口縁部破片である。無文部と縄文部の境界に、微隆起や幅ひろの浅い沈線の付されるものもある。45・46には羽状縄文がみられる。39は無文部以下が縄文ではなく斜め方向の沈線である。21・58～93は、称名寺式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。21・58～72は沈線による区画内に縄文が充填されるもの、76～90・92・93は列点文をもつもの、73～75は区画内が無文もしくは不明なものである。また89・90は区画外に細い沈線文様が施されている。91は2つの穿孔の付された橋状の把手を有する資料である。後述する包含層（5層・貝層下）出土土器中にも同様の資料がある。94～186・188～235までは堀之内I式とおもわれる資料をまとめてある。94～168・193・195・196・203・204・209は縄文を地文にもち、その上に沈線による直線もしくは曲線文様を描いた土器である。128は頸部のくびれる深鉢形土器で口径推定16.8cm、現存器高17.6cmを測る。口縁部下、胴のくびれ部までは無文となり、その

第8表 3b層グリッド別土器組成

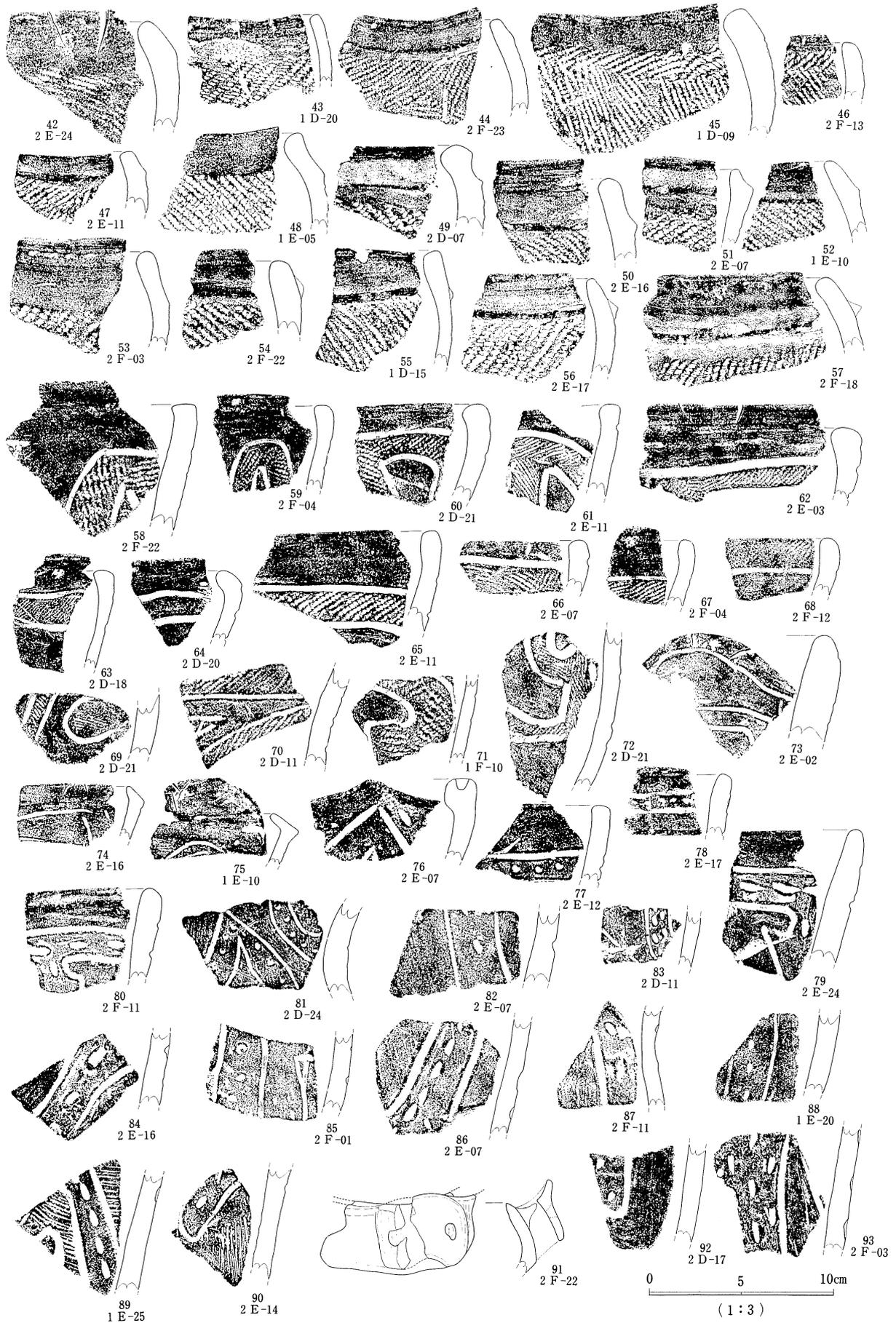
(重量比:単位g)

グリッド	型式	加曾利E	称名寺	堀之内I	堀之内II	加曾利B	不明	その他	計	
1D-09		159	20	1029		58	197	27	1490	
1D-10		145		2000	16	3	679	82	2925	
1D-14				368			270	2	640	
1D-15		259		2043	67		496	5	2870	
1D-19		23		587			200		810	
1D-20		32		978			220		1230	
1D-24				8				28	36	
1D-25		101		737			241	31	1110	
2D-06		46		6549		10		61	6666	
2D-07		345		2336			1480	39	4200	
2D-08		35	15	1490	8		785	7	2340	
2D-09				445			150	5	600	
2D-11		325	64	4679	280		3000	52	8400	
2D-12		320		5400		20	3400	110	9250	
2D-13		140	23	3821		24	3100	42	7150	
2D-14		195		3002			31	2250	72	5550
2D-15		13		1351		12	935	39	2350	
2D-17		74	102	9194	32			72	9474	
2D-18		58	23	1822	2	12	1800	33	3750	
2D-18(確認)		101	18	811			1910	80	2920	
2D-19		75	38	4149			3526	62	7850	
2D-20			20	1113	12		1225	30	2400	
2D-21		161	180	3317			1480	12	5150	
2D-22		47	68	4504	75	3	2080	33	6810	
2D-23		89	55	5220		13	3885	48	9310	
2D-24		131	77	3830			3220	51	7309	
2D-25		95	19	1529		10	1238	69	2960	
1E-05ベルト		150	130	570					850	
1E-10		215	38	2154	2		148	3	2560	
1E-15		150		966				34	1150	
1E-20ベルト		46	30	102				2	180	
1E-25		114		509		32	25		680	
2E-01ベルト		85	19	212			9		325	
2E-02		365	110	10007	24	10	2275	69	12860	
2E-03		201	100	4016	3	25	3200	105	7650	
2E-04			16	3624		2	3750	108	7500	
2E-05		77		1727	25	11	1800	60	3700	
2E-06ベルト		56		1010		13	6		1085	
2E-07		301	250	8960			2840	49	12400	
2E-08		151	46	5345	17	119	3265	172	9115	
2E-09		27		3518	22	28	3075	150	6820	
2E-10		72		3535	84	53	3223	128	7095	
2E-11		260	180	5418		9	2300	33	8200	
2E-12		385	95	7069	33	9	3416	93	11100	
2E-13		390		6322	15		4302	71	11100	
2E-14		33	131	4106		30	2850	100	7250	
2E-15		250	11	4878	2	19	6150	240	11550	
2E-16		1921	210	3058			1985	126	7300	
2E-17		674	17	5454	8	63	3350	34	9600	
2E-18ベルト		28		315					343	
2E-19ベルト		56	19	329		6	40		450	
2E-20ベルト				253	7		102	33	395	
2E-23		281		2798	4	26	2800	41	5950	
2E-24		118	117	3677		26	2820	142	6900	
1F-10ベルト		69	37	524					630	
1F-14ベルト		196		694					890	
1F-15ベルト		9	21	164			11	5	210	
1F-20ベルト				53				7	60	
2F-01ベルト		198	89	1065			48		1400	
2F-02ベルト		205	19	904	10			4	1142	
2F-03		280	71	2013		29	1315	122	3830	
2F-04		382	18	2128	23	44	2140	268	5003	
2F-05ベルト		59		466			214	41	780	
2F-08		220	64	2030	27		1020	89	3450	
2F-09		83	4	1608	17	17	815	206	2750	
2F-10		47	17	2182	26	21	815	242	3350	
2F-11ベルト		150	122	439			39	5	755	
2F-12ベルト			25	856	13	8	248		1150	
2F-13		215	127	2391	18		1230	69	4050	
2F-14		49		1240	6		1110	225	2630	
2F-17		411		1186	6	10	390	97	2100	
2F-18		267	50	1827	46	25	970	315	3500	
2F-19		14		1208		10	580	28	1840	
2F-21		60		300			163	2	525	
2F-22		540	167	1006			605	82	2400	
2F-23		1090		1902	113		841	104	4050	
2F-24		199		1604	11		183	23	2020	
3b層総計		14118	3072	190034	1054	841	104225	4819	318173	

※ 弥生・土師・須恵・瓦など



第55図 3b層出土土器(1) 遺物番号の下の数字は出土グリッドを示す



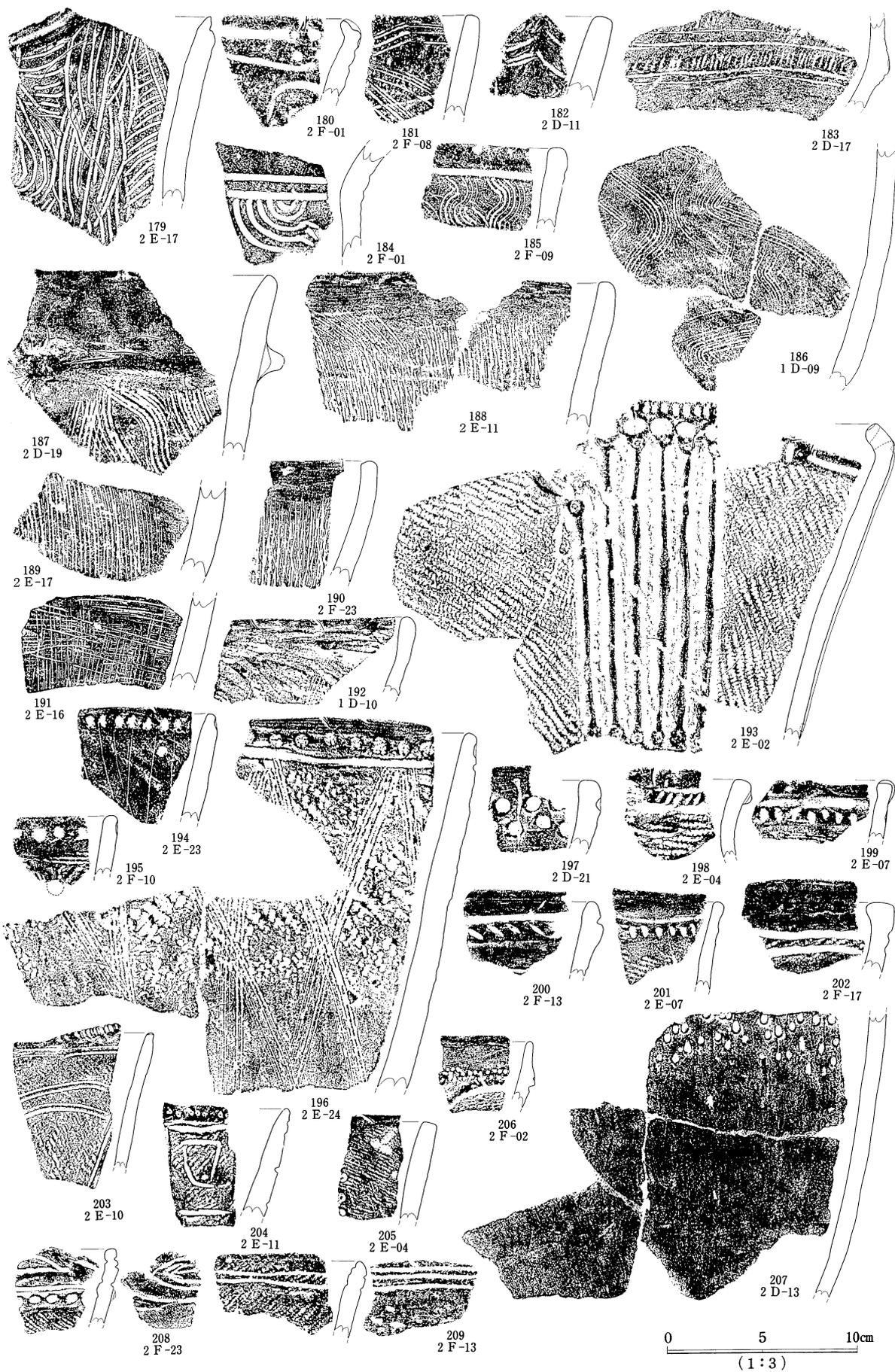
第56图 3b層出土土器(2)



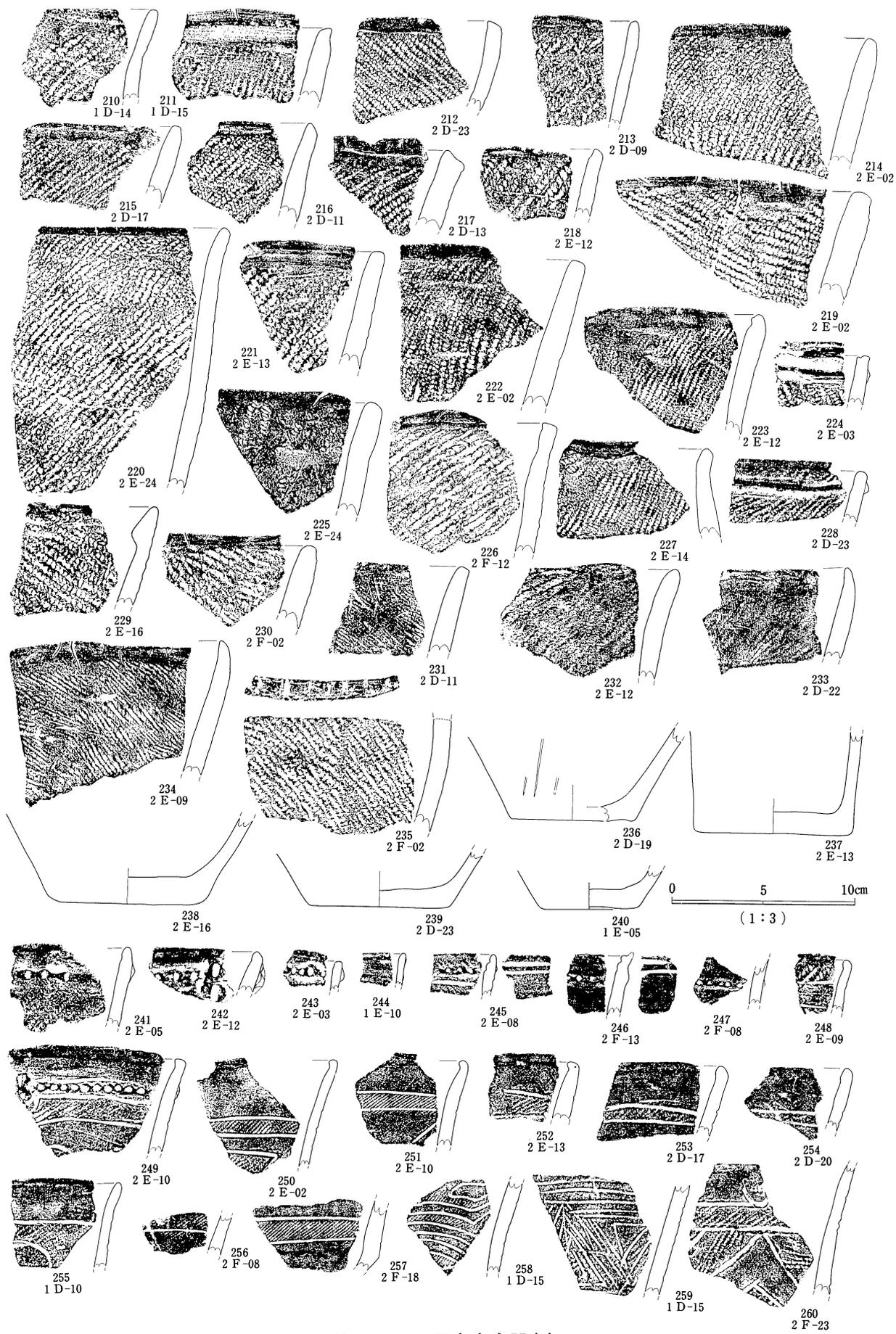
第57图 3b層出土土器(3)



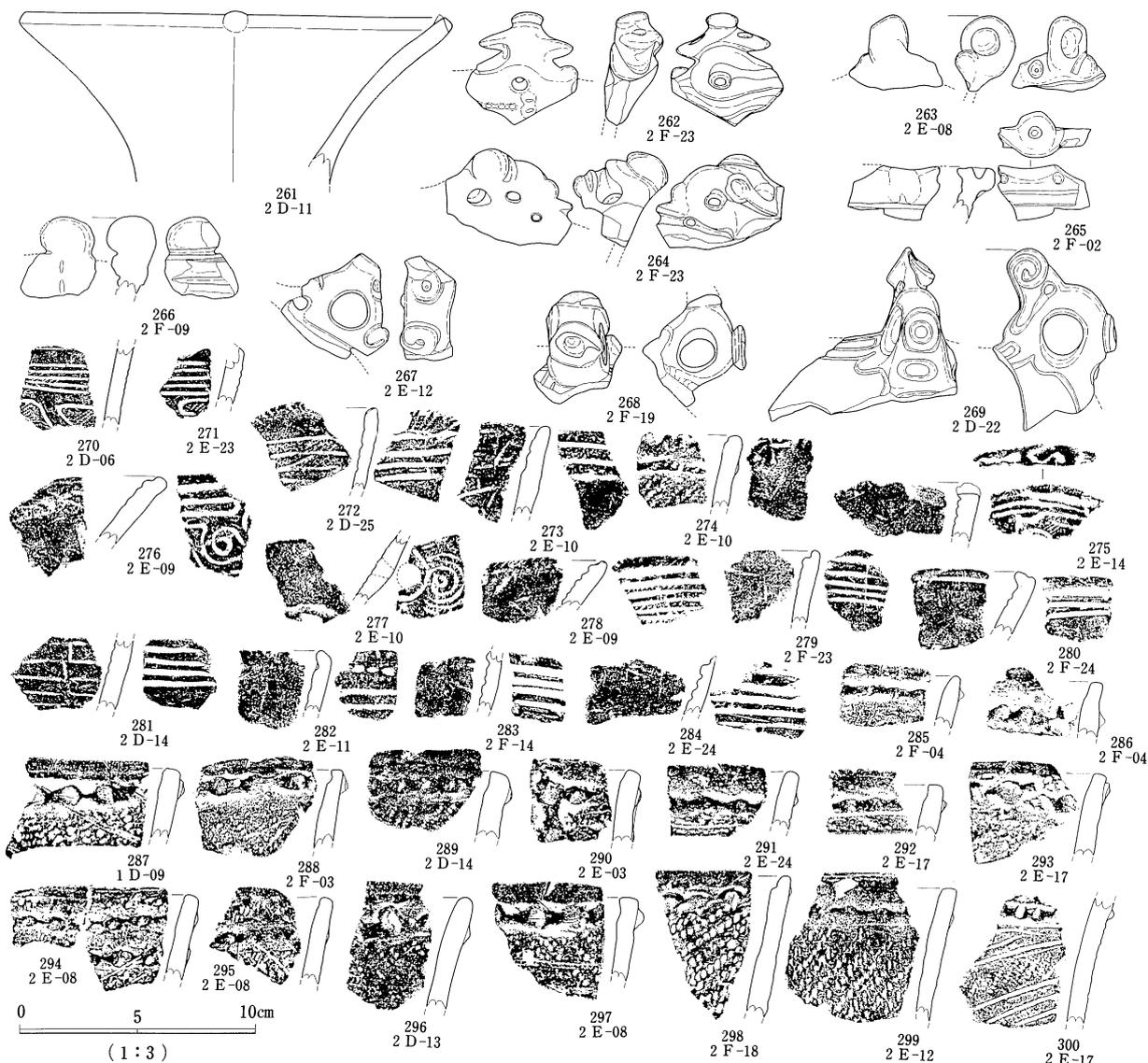
第58図 3b層出土土器(4)



第59图 3b層出土土器(5)



第60图 3b層出土土器(6)



第61図 3b層出土土器(7)

下はLR単節縄文を地文に沈線による縦位の直線文や曲線文を施す。129は、3カ所のゆるい山形の突起を有する屈曲の少ない深鉢形土器で、口径推定18.2cm、現存器高20.8cmを測る。口縁部直下からLR単節縄文を地文に、沈線による縦位の菱形文や曲線文を施す。文様構成は3単位で、3カ所の突起の下に2条の曲線文が垂下する。193は口縁部が内側にやや屈曲する土器で、口縁部直下に6つの円形の孔をもち（本資料では5孔を確認）その下に末端に円形の文様を有した6本の隆線をもつ。隆線間では地文のRL単節縄文を磨り消す。196は口縁部直下に連続する円形の刺突文を配し、その下に横位の1条の沈線をめぐらせ縄文部と区画する。地文上には櫛状の工具で斜行する直線文を連続して交差させている。209には内面にも横位の沈線文が3条施される。197は口縁部直下に円形の刺突文を2列配する。198～201、208は紐線状の文様を有する。208には内面にも沈線による文様が付く。207は深鉢形土器の胴部下半部の資料とみられる。列点が配されている。168～192・194は地文に縄文をもたないもので、半截竹管や櫛状の工具で直線文や曲線文を描く。187は口縁部下が無文となり、沈線によるゆるやかな曲線文との境界に舌状の突起が付される。綱取式と考えられる。210～234は、

口縁部直下から全面に縄文を施す深鉢形土器の口縁部破片である。235は割れ口に縦位にほぼ等間隔に刻み目の入れられた資料である。241～300は堀之内Ⅱ式、加曾利B式の破片をまとめた。241～247・249には細い紐線文がみられ、242・249には8の字貼付文が付されている。250～260は沈線区画内に縄文を充填するものである。261は胴部にかけてかなり屈曲する土器の口縁部付近の資料である。口径18.4cmを測る。口唇部2カ所に指頭圧痕を有する。262～269までは把手部分の資料を集めた。267～269は注口土器のものと思われる。272～284は内外両面もしくは内面に文様を有する、浅鉢形および深鉢形土器である。285～300は紐線文を有する粗製土器である。紐線文以下は縄文となるが、半截竹管などの工具で沈線文を加えるものもある(287・291・294・295・297・300)。

c 石器・石製品 (第9表、第62・63図)

貝層中からは3c層12点、3b層28点、計40点の石器が検出された。そのうちわけは、石鏃13点、石匙1点、石錘1点、軽石製浮子1点、凹石2点、磨石17点、石皿2点、垂飾3点である。次に各器種について特徴などを述べる。

石 鏃 (第62図-1～13)

まず形態的には、13点のうち10点は凹基無茎鏃に分類されるものである。これ以外の3点については、破片資料のため形態が明らかにできないが、ほとんどのものがこの形態をもっていたと考えてよいと思われる。大きさは2cm前後、重さは1.0～1.5g程度のもが多いようである。石材は、黒曜石7点、チャート5点、頁岩1点である。

石 匙 (第62図-14)

1点のみ検出された。形態的には一端に抉り込みを有した縦長のタイプにみえるが、非常に小型であり、同器種名で分類してよいものかどうか疑問が残る資料である。最大長2.3cm・最大幅0.9cm・最大厚0.3cm・重さ0.6g、表裏両面とも入念に加工された剥離痕を残す。石材は黒曜石である。

石 錘 (第62図-15)

1点のみ検出された。最大長2.7cm・最大幅1.9cm・最大厚0.9cm・重さ6.3g。形態的には、溝が全周しないが有溝石錘の部類にはいるものと思われる。裏面が一部破損しているが、4方向から十の字状に溝を施している。ただし溝は連結せず中央部付近で止まっている。石材は頁岩を使用している。有溝石錘は東北地方を中心に分布するが、関東地方特に千葉県ではあまり類例を知らない。また、通常有溝石錘の用途が漁網のおもりと考えられているが、本資料は非常に小型品であり用途的にも問題がありそうである。4方向の溝に紐状のものをかけて使用されたことだけは明らかである。

軽石製浮子 (第62図-16)

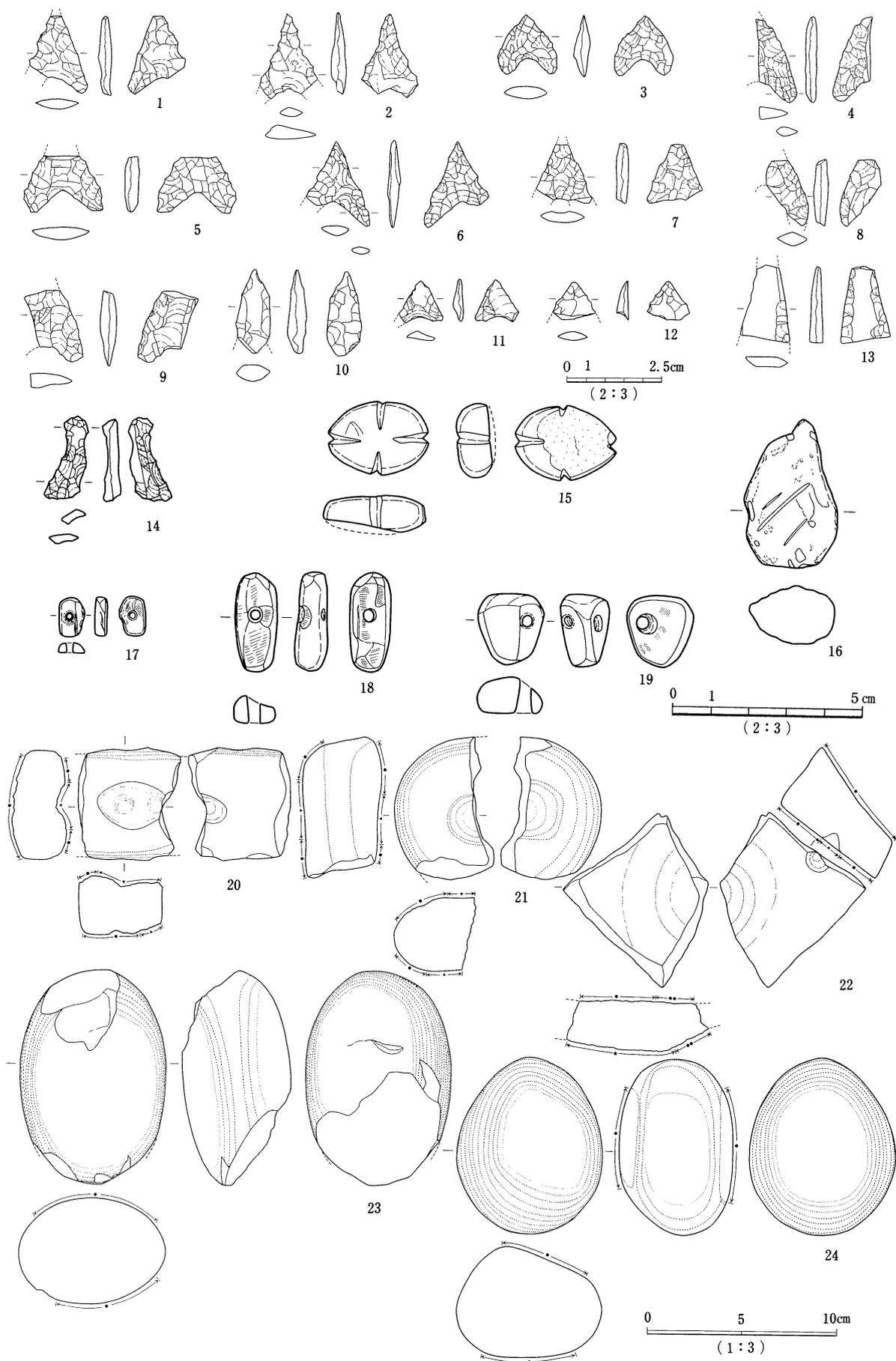
1点のみ検出された。最大長3.9cm・最大幅2.4cm、重さ1.9g。穿孔はないが中央部付近に3条の浅い溝状の切れ込みがある。この部分に紐状のものをかけた痕跡と考え、浮子と認定した。軽石は、縄文時代の遺跡内において比較的好く目にするが、周囲の一部を研磨するなどの痕跡はあってもしっかりと穿孔を施した製品となるとあまり多くない。何等かの目的に使用するために集落内に持ち込んだものであることは確かなだけに、軽石には注意が必要と考える。なお、軽石は多硬質で表面はザラついているので、特に加工しなくても紐などを掛ける要は足り得るとも思われる。貝層中からは小片も含め11点の軽石が検出できた。

凹石 (第62図-20・21)

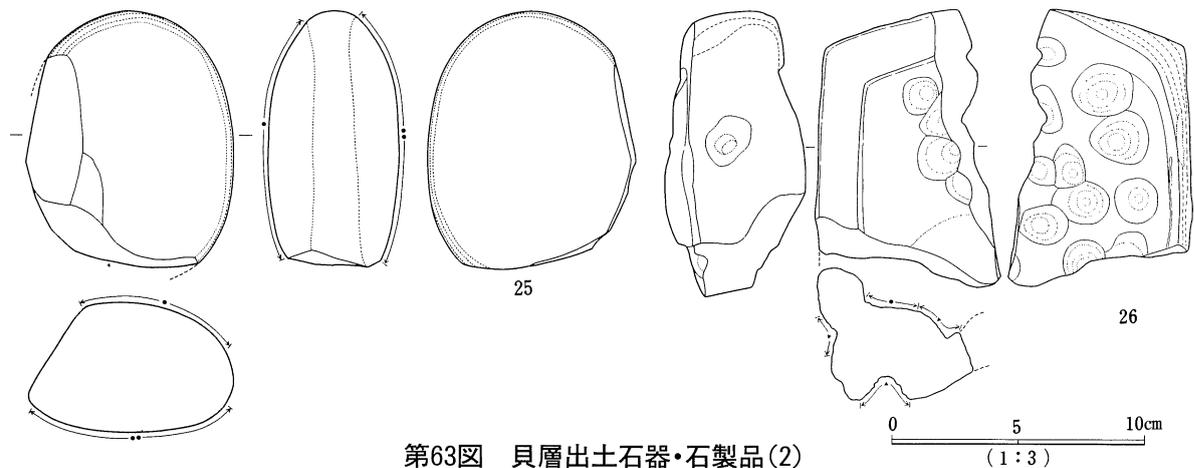
表裏両面の中央部が摩耗によって円形に窪むものである。表裏の凹みの位置はほぼ同じである。2点出土した。20は中央部付近の破片である。楕円形の浅い凹みの中に2カ所の円形の少し深い凹みが見られる。表裏両面の凹みの周囲の平坦面にも摩耗の痕跡がみられ、磨石としても使用されていたことを示す。21は凹みの部分を半分残す破片資料である。表裏の凹みは比較的浅い。この資料でも凹みの周辺、側面までが摩耗している。

第9表 貝層出土石器・石製品 計測表

番号	器種	出土区	出土層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	残存状態	図番号
1	石鏃	2E-19	3c III	(2.1)	(1.6)	0.3	0.7	頁岩	一部欠	62-1
2	石鏃	1F-10	3c IX	(2.1)	(1.5)	0.3	0.7	黒曜石	一部欠	62-2
3	石鏃	1F-25	3c IX	1.6	1.6	0.4	0.7	黒曜石	完形	62-3
4	石鏃	2D-06	3b	(2.3)	(1.0)	0.3	0.6	黒曜石	半欠	62-4
5	石鏃	2D-21	3b	(1.5)	2.1	0.3	1.1	チャート	半欠	62-5
6	石鏃	2D-24	3b	2.1	(1.7)	0.3	0.7	チャート	一部欠	62-6
7	石鏃	2E-09	3b	(1.7)	(1.5)	0.3	0.6	黒曜石	一部欠	62-7
8	石鏃	2E-12	3b	(1.9)	(0.9)	0.3	0.6	黒曜石	破片	62-8
9	石鏃	2E-13	3b	(2.1)	(1.1)	0.4	0.9	黒曜石	破片	62-9
10	石鏃	2E-15	3b	(2.3)	(0.9)	0.5	1.2	チャート	破片	62-10
11	石鏃	2E-17	3b	(1.1)	(1.1)	0.2	0.2	黒曜石	一部欠	62-11
12	石鏃	2F-17	3b	(0.9)	(1.1)	0.3	0.3	チャート	破片	62-12
13	石鏃	2F-18	3b	(2.0)	(1.3)	0.3	0.9	チャート	破片	62-13
14	石匙	1F-05	ベルト3cV	2.3	0.9	0.3	0.6	黒曜石	完形	62-14
15	石錘	2D-19	3b	1.9	2.7	0.9	6.3	頁岩	一部欠	62-15
16	浮子	2F-03	3b	3.9	2.4	1.6	1.9	軽石	完形	62-16
17	軽石	2E-06	3c II	5.3	4.6	2.5	12.1	軽石	完形	
18	軽石	2E-19	3c III	4.0	3.8	1.8	6.6	軽石	完形	
19	軽石	2F-05	3c IV	2.5	1.8	1.2	0.5	軽石	完形	
20	軽石	2F-01	3c V	(2.0)	(1.3)	(0.7)	0.2	軽石	破片	
21	軽石	2F-12	3c VI	2.2	1.7	1.4	1.4	軽石	完形	
22	軽石	1F-10	3c IX	2.3	2.0	1.0	0.9	軽石	完形	
23	軽石	1D-10	3b	2.0	1.7	1.6	1.3	軽石	完形	
24	軽石	1D-15	ベルト3b	7.2	4.9	3.3	14.9	軽石	一部欠	
25	軽石	2D-19	3b	3.2	2.6	1.4	1.5	軽石	完形	
26	軽石	2D-19	3b	2.5	1.6	0.9	1.0	軽石	完形	
27	軽石	2E-17	3b	1.8	1.4	1.0	1.0	軽石	完形	
28	凹石	2E-02	3b	5.9	(5.2)	2.9	120.0	安山岩	半欠	62-20
29	凹石	2F-18	3b	(7.3)	(4.5)	4.1	235.0	安山岩	半欠	62-21
30	磨石	2F-01	3c V	(11.5)	7.7	5.7	780.0	砂岩	一部欠	62-23
31	磨石	2F-02	3c V	(4.7)	(4.4)	(1.5)	34.0	安山岩	破片	
32	磨石	2F-11	ベルト3cVI	(3.9)	(3.0)	2.3	22.0	砂岩	破片	
33	磨石	2F-07	3c VI	(5.9)	(3.0)	(2.5)	66.0	砂岩	破片	
34	磨石	1F-05	3c IX	(7.4)	(2.7)	4.4	78.0	砂岩	破片	
35	磨石	2F-14	プロ3cIX	(6.0)	(4.1)	(1.7)	40.0	安山岩	破片	
36	磨石	1D-20	3b	(6.1)	(2.1)	(3.1)	40.9	安山岩	破片	
37	磨石	2D-12	3b	(3.2)	(3.2)	(2.9)	23.0	安山岩	破片	
38	磨石	2D-19	3b	(3.9)	(2.7)	(1.8)	28.0	安山岩	破片	
39	磨石	2D-19	3b	(3.9)	(1.9)	(1.7)	13.0	安山岩	破片	
40	磨石	2D-11	3b	9.3	7.7	5.9	620.0	砂岩	完形	62-24
41	磨石	1E-10	ベルト3b	(6.8)	(5.3)	(0.6)	24.6	安山岩	破片	
42	磨石	2E-11	3b	(3.6)	(3.0)	(2.7)	25.0	安山岩	破片	
43	磨石	2E-02	3b	(5.4)	(4.1)	(2.7)	52.0	安山岩	破片	
44	磨石	2E-02	3b	(10.2)	(8.2)	5.0	610.0	砂岩	一部欠	63-25
45	磨石	2E-08	3b	(4.3)	(3.1)	(1.1)	7.6	安山岩	破片	
46	磨石	2F-10	3b	(7.7)	(4.9)	3.2	100.0	砂岩	破片	
47	石皿	2D-06	3b	(9.2)	(7.6)	4.1	220.0	安山岩	破片	62-22
48	石皿	2D-17	3b	(11.0)	(7.3)	5.9	340.0	安山岩	破片	63-26
49	コア	1E-05	ベルト3b	6.1	5.0	1.8	57.4	チャート		
50	コア	1E-10	ベルト3b	6.2	4.1	3.5	79.1	チャート		
51	コア	2F-03	ベルト3b	4.2	3.3	3.3	34.7	チャート		
52	垂飾	2F-12	3c VI	1.1	0.7	0.3	0.4	ヒスイ?	完形	62-17
53	垂飾	1F-25	ベルト3cIX	2.6	1.1	0.8	3.7	ヒスイ?	完形	62-18
54	垂飾	2E-02	3b	1.9	1.8	1.0	6.3	ヒスイ	完形	62-19



第62図 貝層出土石器・石製品(1)



第63図 貝層出土石器・石製品(2)

磨石 (第62図-23・24、第63図-25)

17点と貝層出土石器中最も多く出土している。自然石の表裏の比較的平な面に摩耗の痕跡が見られるものが多いが、摩耗の痕跡が側面にまでおよび石材のあらゆる箇所を使用しているものもある。

石皿 (第62図-22、第63図-26)

破片が2点出土した。22は皿状部中央の摩耗がはげしく、また裏面に円形の凹みの痕跡がある。26はおもて面にしっかりとした縁を有する資料で、表に4カ所、裏に12カ所、側面に1カ所円形の凹みの痕跡がある。これらの資料が、もともと石皿・凹石兼用のものであったのか、破損した石皿を凹石に転用したものかは明らかでない。

垂飾 (第62図-17~19)

完形品3点を検出した。円形を基調とした本体中央部付近に穿孔を施した玉状垂飾である。大きさは17が最大長1.1cm、18が2.6cm、19が1.9cmである。石材はヒスイを使用している。17は非常に小型で、このような製品を検出できたのも貝層の水洗選別の効用とみている。

コア

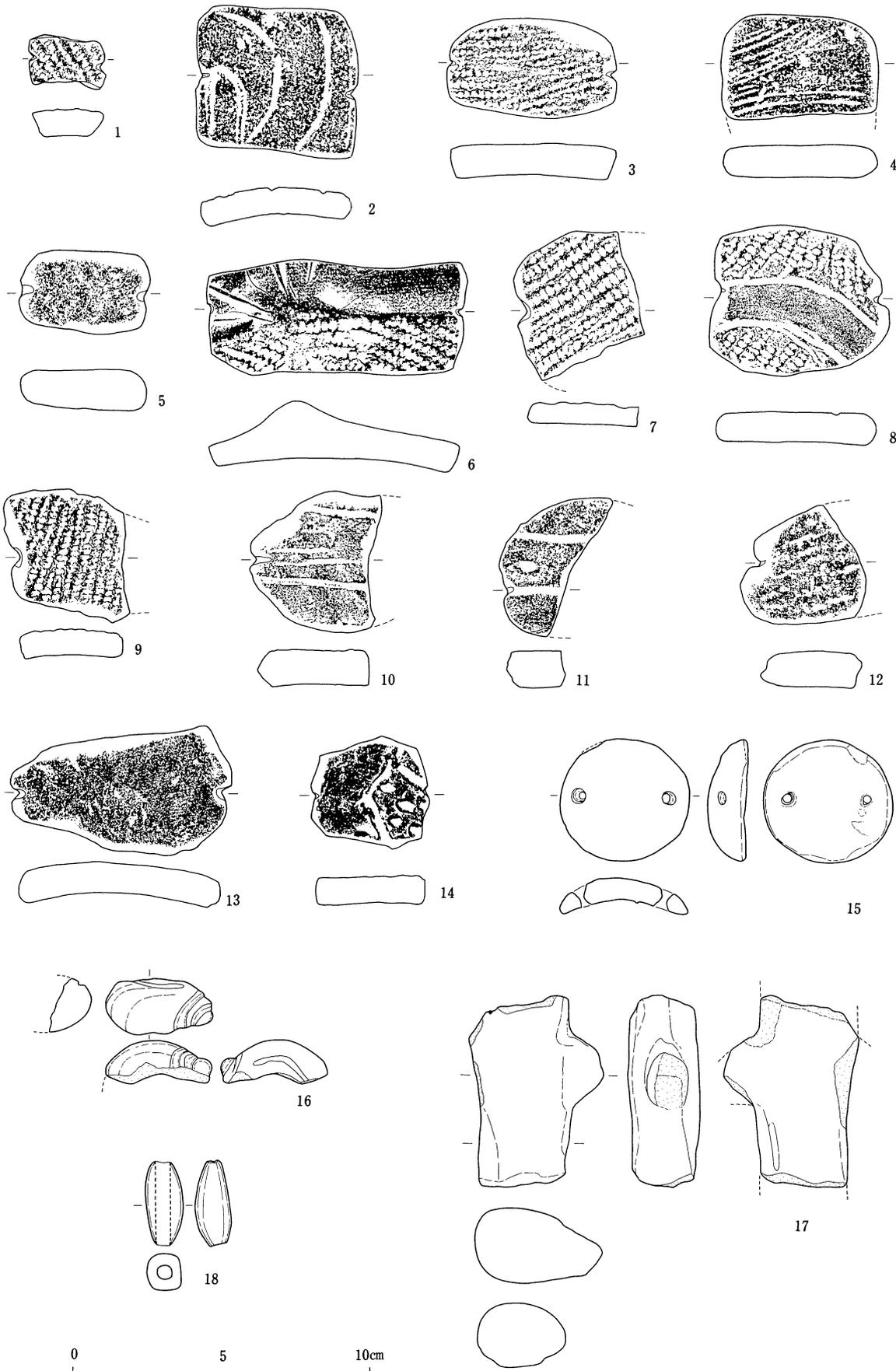
チャート製のコア（もしくは大型のフレーク）が3点検出されている。また、小型のフレークや微細なチップはほとんどの貝層サンプル中からかなりの数が検出されている（第5・6表）。

d 土製品 (第10表、第64図)

貝層中からは3c層7点、3b層11点、計18点の土製品が検出された。そのうちわけは、土器片錘14点、蓋形土製品1点、土偶2点、管状製品1点である。

土器片錘 (第64図-1~14)

3c層から4点、3b層から10点検出されている。形態としては、縦・横の長さあまり差のない、楕円形・隅丸方形となるもの（2・8・14など）や、横長の楕円形・隅丸方形となるもの（3・6・13など）がある。また、材料となる土器片の側面は概ね研磨されてかたちが整えられているが、側面整形のあまりされていないものもある（1・5・9・13・14）。6のように口縁部破片を利用するものもみられた。大きさとしては大小さまざま、重量でみると最小4.4gのもの（1）から最大64.3



0 5 10cm
 (1:2)

第64図 貝層出土土製品

g (6) までである。

蓋形土製品 (第64図-15)

3c層より1点検出された。直径4cmほどの円形に近い形態で、浅い腕状を呈する。また円の中心を通る線上の側縁部付近に直径2.5mmほどの穿孔がみられる。蓋形土製品としては、小型の部類にはいるものとみられる。

土 偶 (第64図-16・17)

2点検出されているがいずれも破片であり、形態など不明な点が多い。16には沈線による文様の痕跡が認められる。

管状製品 (第64図-18)

3b層から1点検出されている。最大長2.8cmの長楕円の本体に直径5mmほどの貫通孔を有した、いわゆる管状土錘に類似する形態をとる。ただし周囲はかなり丸みが強く、大きさも小振りで、管状の垂飾として用いられた可能性もあるため管状製品として扱っておくことにした。

第10表 貝層出土土製品 計測表

番号	器 種	出 土 区	出土層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	残存状態	図番号	備 考
1	土器片錘	2E-21 V	3c	1.7	2.6	0.8	4.4	完形	64-1	
2	土器片錘	1F-09 IX	3c	5.3	5.6	1.0	40.4	完形	64-2	全周研磨
3	土器片錘	1F-10 IX	3c	3.4	5.7	1.0	27.4	完形	64-3	
4	土器片錘	1F-15 IX	3c	(3.6)	5.3	1.1	27.9	半欠	64-4	
5	土器片錘	2D-24	3b	2.9	4.4	1.3	20.9	完形	64-5	
6	土器片錘	1E-15	3b	4.2	8.8	2.4	64.3	完形	64-6	口縁部
7	土器片錘	1E-15	3b	(4.7)	(4.2)	0.7	17.4	半欠	64-7	
8	土器片錘	1E-25	3b	5.1	6.1	1.0	44.1	一部欠	64-8	全周研磨
9	土器片錘	2E-10	3b	4.1	(4.1)	0.9	19.1	半欠	64-9	
10	土器片錘	2E-13	3b	4.6	(4.3)	1.2	29.3	半欠	64-10	全周研磨
11	土器片錘	2E-13	3b	4.5	(4.1)	1.1	15.7	半欠	64-11	
12	土器片錘	2E-24	3b	4.0	(4.2)	1.2	20.7	半欠	64-12	
13	土器片錘	2E-24	3b	4.2	7.5	1.1	41.8	完形	64-13	
14	土器片錘	2F-04	3b	3.6	4.0	0.8	17.5	完形	64-14	
15	蓋	2E-22 V	3c	4.1	4.4	0.6	16.0	完形	64-15	
16	土偶?	2E-22 V	3c	(2.1)	(3.7)	(1.3)	8.4	破片	64-16	
17	土偶?	2F-11 VII	3c	(6.7)	(4.6)	2.3	63.4	破片	64-17	
18	管状製品	2E-23	3b	2.8	1.3	0.4	4.0	完形	64-18	

e 骨角貝製品 (第11表、第65図)

貝層中からは3c層28点、3b層3点、計31点の骨角貝製品が検出された。そのうちわけは、鏃2点、腕飾(半環状)2点、腕飾(環状)3点、骨製垂飾2点、歯牙製垂飾1点、鹿角製垂飾1点、管状垂飾14点、環状垂飾1点、タカラガイ加工品2点、赤彩貝1点、素材2点である。

鏃 (第65図1・2)

いわゆる角鏃の先端部・基部の破片がそれぞれ1点ずつ検出されている。いずれも小破片であるため、全体の形態はあきらかでない。基部の破片には全体に斜め方向の擦痕が認められ、ヤス状刺突具などにみられるような、着柄時のすべり止め用の加工と判断した。

腕 飾 (半環状) (第65図5・6)

雄イノシシ下顎犬歯と鹿角を素材としたものがそれぞれ1点ずつ検出された。素材をプレート状に加工し、その両端に穿孔を施したものである。6はおもて面に入念な研磨の跡を示す擦痕が認められ、

また孔付近に抉り込みの加工や2孔の間に2本の線刻がみられる。火を受けたらしく、黒色化している。裏面には鹿角表面の顆粒痕跡がわずかに残されている。この器種の素材の主体は、雄イノシシ下顎犬歯と貝殻であり、鹿角を利用する例はあまり多くない。

腕飾（環状）（第65図12～14）

いわゆる貝輪が3点検出された。ベンケイ貝製2点（12・13）とサルボウガイ製1点（14）である。同じ貝種を利用しているが、12と13は環の幅と内径にかなり差があり注意される。また13には表面に面取りした跡が確認できる。

骨製垂飾（第65図4・7）

サメの椎骨の中央に穿孔したものが2点検出された。7は最大長0.4cmとかなり小型である。

歯牙製垂飾（第65図3）

サメの歯の歯根部に穿孔したものが1点検出された。孔の直上には小さな抉り込みも認められる。最大長1.0cmとかなり小型である。

鹿角製垂飾（第65図11）

鹿角の枝の部分を利用した垂飾である。先端部が破損しているが、現存長で6.6cmを測る。基部に横位から頂部に抜ける穿孔を施している。このような加工法をとる類例は比較的多く知られる。VIブロック貝層直下の土層中から出土した。

管状垂飾（第65図15～28）

ツノガイの一端もしくは両端を適当な長さに切断した加工品が14点検出された。最も長いもので1.6cm、短いもので0.5cmである。最近の貝塚調査における貝層の水洗選別作業の徹底により、これらの製品が多数検出されるようになってきている(注1)。

第11表 貝層出土骨角貝製品 計測表

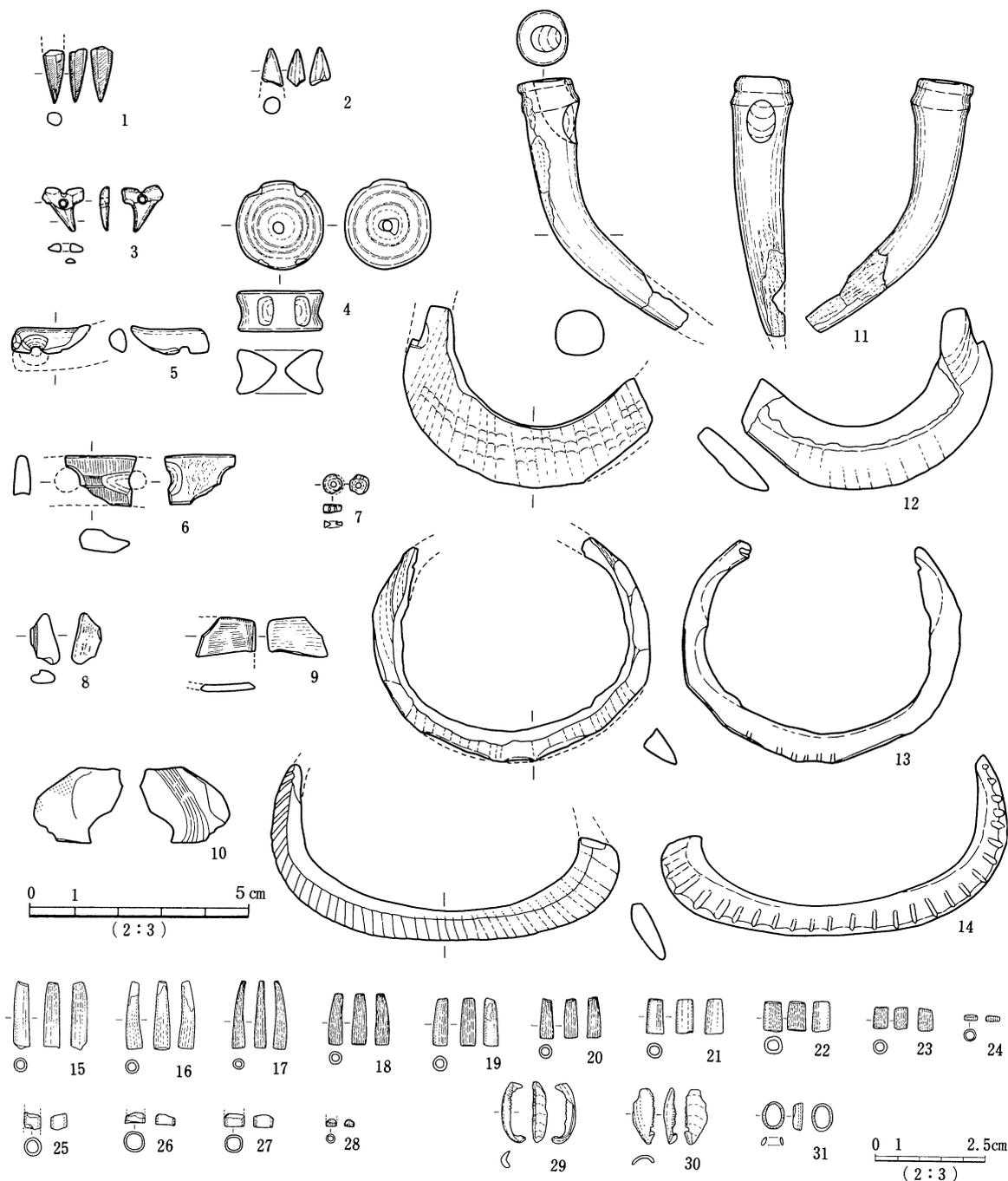
番号	器種	出土区	出土層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	最大重 (g)	材質	残存状態	図番号
1	鏃	2F-11 VII	3c	(1.2)	0.5	0.4	0.2	鹿角	破片	65-1
2	鏃	1F-09 IX	3c	(0.9)	0.4	0.4	0.1	鹿角	破片	65-2
3	垂飾	2E-01 II	3c	1.0	0.9	0.2	0.1	サメ歯	完形	65-3
4	垂飾	2E-18 III	3c	2.0	1.7	1.0	1.4	サメ椎骨	完形	65-4
5	腕飾(半環状)	2E-19 III	3c	(0.6)	(1.8)	0.3	0.3	イノシシ犬歯	半欠	65-5
6	腕飾(半環状)	1F-05 IX	3c	1.2	(1.6)	0.4	0.7	鹿角	半欠	65-6
7	垂飾	1D-19	3b	0.4	0.4	0.2	+	サメ椎骨	完形	65-7
8	垂飾	2F-12	ベルト貝層下	(6.6)	1.4	1.4	3.9	鹿角	一部欠	65-11
9	素材	2E-21 V	3c	(1.1)	(0.6)	0.3	0.1	鹿角	破片	65-8
10	素材	1F-14 IX	3c	(1.4)	(0.8)	0.1	0.3	イノシシ犬歯	破片	65-9
11	腕飾(環状)	2E-06 II	3c	8.0	1.3	0.5	12.2	サルボウガイ	半欠	65-14
12	腕飾(環状)	2E-22 V	3c	(5.9)	1.7	0.5	9.6	ベンケイガイ	半欠	65-12
13	腕飾(環状)	1F-14 IX	3c	6.4	0.9	0.4	6.7	ベンケイガイ	半欠	65-13
14	管状垂飾	2E-06 II	3c	(0.4)	0.4	0.1	+	ツノガイ	半欠	65-25
15	管状垂飾	2E-06 II	3c	(0.2)	0.3	0.1	+	ツノガイ	半欠	65-28
16	管状垂飾	2F-05 III	ベルト3c	1.5	0.4	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-15
17	管状垂飾	2E-21 V	3c	1.6	0.4	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-16
18	管状垂飾	1F-05 V	ベルト3c	(0.2)	0.5	0.1	+	ツノガイ	半欠	65-26
19	管状垂飾	2F-02 V	3c	1.2	0.3	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-18
20	管状垂飾	2F-07 VI	3c	0.8	0.4	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-21
21	管状垂飾	2F-07 VI	3c	1.6	0.3	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-17
22	管状垂飾	2F-07 VI	3c	0.5	0.3	0.1	+	ツノガイ	完形	65-23
23	管状垂飾	2F-11 VII	3c	(0.3)	0.4	0.1	+	ツノガイ	半欠	65-27
24	管状垂飾	1F-10 IX	ベルト3c	(0.2)	0.3	0.1	+	ツノガイ	完形	65-24
25	管状垂飾	1F-25 IX	ベルト3c	0.9	0.3	0.1	+	ツノガイ	完形	65-20
26	管状垂飾	2D-11	3b	0.7	0.4	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-22
27	管状垂飾	2E-24	3b	1.1	0.3	0.1	0.1	ツノガイ	完形	65-19
28	タカラガイ加工品	2E-21 V	3c	1.4	0.2	0.1	0.1	タカラガイ	完形	65-29
29	タカラガイ加工品	1F-15(東西)IX	ベルト3c	1.3	0.5	0.1	+	タカラガイ	完形	65-30
30	環状垂飾	1F-21 IX	3c	0.6	0.5	0.1	+	ヨメガカサ貝	完形	65-31
31	赤彩貝	1E-25 V	ベルト3c	(2.2)	(1.8)	0.1	0.4	シオフキ	破片	65-10

環状垂飾 (第65図31)

ヨメガカサの幼貝の殻頂部を切断した製品である。最大長0.6cm。

タカラガイ加工品 (第65図29・30)

タカラガイの体層背面を切断除去し外唇部側だけにし、それをさらに殻軸方向に縦に切断したもの。2点検出されている。最大長1.3cm、1.4cmといずれもかなり小さな個体である。まだ用途の明らかにされていない貝製品である。1遺跡から多量に検出されることはないが、貝塚調査における貝層の水洗選別作業の徹底によって、類例を増やすことは可能と思われる(注2)。



第65図 貝層出土骨角貝製品

赤彩貝（第65図10）

シオフキの殻の内側にわずかに赤彩の痕跡の認められる資料1点が検出された。

素 材（第65図8・9）

切断加工痕跡のある鹿角と雄イノシシ下顎犬歯が1点ずつ検出されている。9は雄イノシシ下顎犬歯をプレート状に加工したもので、象牙質側に横位方向の擦痕が認められる。

（注1）忍澤成視「骨角器」『日暮里延命院貝塚』（1990）東京都荒川区教育委員会

後期（堀之内Ⅱ式）のツノガイ製管状垂飾10点、環状垂飾5点検出されている。

○忍澤成視「大針貝塚 第1号住居址内貝層出土貝製品」『大針貝塚・浮谷貝塚発掘調査報告』（1990）

前期（関山式）のツノガイ製の管状垂飾が1点、ヤカドツノガイ製環状垂飾が1点検出された。

○古賀仁「貝製品」『居木橋遺跡4（B地区）品川区埋蔵文化財調査報告書第11集』（1992）品川区遺跡調査会

前期（関山式）のツノガイ製の管状垂飾が12点、ヤカドツノガイ製管状垂飾が5点、ツノガイ製の環状垂飾が1点検出されている。

（注2）忍澤成視「骨角器」『日暮里延命院貝塚』（1990）東京都荒川区教育委員会

後期（堀之内Ⅱ式）のタカラガイ加工品4点が検出された。1.9cm前後の小型の個体3点と、5cmほどの大型の個体1点である。

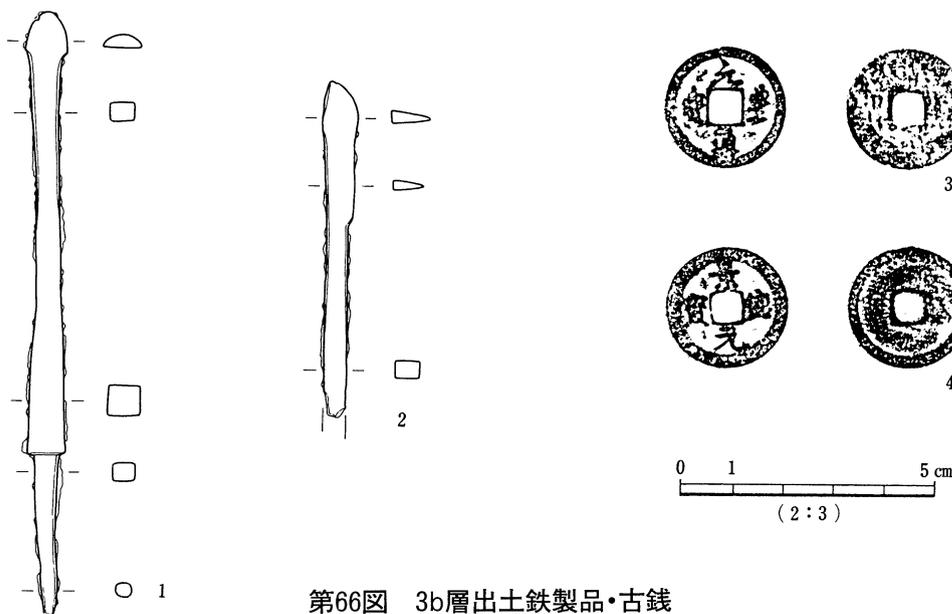
f その他の遺物（第66図1～4）

3b層中から、いずれも混入品と考えられる鉄製品、古銭が出土した。

1は片丸造鑿箭（のみや）式長頸鏃である。鏃身は片丸造であり、鏃身関部が退化した鑿箭式の長頸鏃である。筥被関部は棘関とならない。全長12.10cm、鏃身幅0.83cm、鏃身厚0.25cm、重さ13.6g。

2は片刃箭式長頸鏃である。鏃身関部は退化している。全長6.75cm、鏃身最大幅0.73cm、重さ4.2g。

3は「元豊通宝」、4は「景德元宝」である。



第66図 3b層出土鉄製品・古銭

3 貝層出土の自然遺物

a 軟体動物門（腹足綱・斧足綱・微小貝種）

混土貝層（3c層）は11のブロックに別れて存在していた。そこで各ブロックにおいて、最も良好に当時の堆積状況を残している可能性のある部分についてサンプリング（詳細処理サンプル）し、ブロック別、あるいはブロック内で分層できる場合は層別にその内容を調べた。貝層サンプルの水洗に使用したフルイ目は、4・2・1mmの3種類で、最小1mmメッシュのフルイ上に残留したものまでを分析の対象とした。

腹足綱・斧足綱

同定：斧足綱（二枚貝）では殻頂部、腹足綱（巻貝）では殻軸の残存するものについておこなった。個体数の算定方法については、斧足綱では左右の殻頂数のうち個数の多い方、腹足綱では殻軸数をもって個体数とした。

計測：斧足綱の主体種であるハマグリについて、各サンプルで計測可能なもの全てについて直接計測した。

同定記載：同定作業の結果確認された軟体動物の種名一覧を第12表に、出現数を第13表に示した。

第12表 出土軟体動物種名一覧

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class GASTROPODA

ヨメガカサ *Cellana toreuma*
イボキサゴ *Umbonium(Suchium) moniliferum*
スガイ *Lunella coronata coreensis*
カワザンショウガイ *Assiminea lutea japonica*
カワニナ *Semisulcospira bensoni*
ヘナタリ属 *Certhideopsilla sp.*
ウミニナ *Batillaria multiformis*
ツメタガイ *Glossaulax didyma*
アカニシ *Rapana thomasiana*
イボニシ *Thais clavigera*
アラムシロガイ *Hinia festiva*
バイ *Babyronia japonica*
ナガニシ *Fusinus perplexus*
シマハマツボ *Diffalaba picta*

斧足綱 Class PELECYPODA

ハイガイ *Tegillarca granosa*
サルボウガイ *Scapharca subcrenata*
マガキ *Crassostrea gigas*
ヤマトシジミガイ *Corbicula japonica*
ウネナシトマヤガイ *Trapezium(Neotrapezium) japonicum*
アサリ *Raditapes Philippinarum*
オキシジミガイ *Cyclina sinensis*
カガミガイ *Phacosoma japonicum*
ハマグリ *Meretrix lusoria*
シオフキガイ *Mactra veneriformis*
バカガイ *Mactra chinensis*
ムラサキガイ *Soletellina diphos*
マテガイ *Solen strictus*
オオノガイ *Mya arenaria oonogai*

第13表 3c層出土軟体動物出現数一覧

グリッド	種類 層	腹 足 綱										斧 足 綱										その他																									
		ヨメガカサ(幼貝)	イボキサゴ	スガイ	カワザンショウガイ	カワニナ	ウミニナ	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロ	バイ	シマハマツボ	その他	ハイガイ		サルボウガイ		マガキ		シジミガイ		ヤマト		トマヤガイ		ウネナシ		アサリ		オキンジミ		カガミガイ		ハマグリ		シオフキ		バカガイ		ムラサキ		マテガイ		オオノガイ		
															L	R	L	R	L	R	L		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
2D-21	ベルト3c	946				6	46	61	2	3					1	1	8											103	82	9	14			597	599	74	61					4	2	18	16		
I		946				6	46	61	2	3							1	8									103	14					599	74					4	18							
2E-01	ベルト3c	1043				7	21	22	4					1		15	3										53	50	20	21			297	340	84	67					1	1	11	8			
2E-02	ベルト3c	3439				12	57	44	2	3						1	33	8									117	109	20	31			612	660	71	101					3	1	6	4			
1E-05・10	ベルト3c	938			1	2	6	5	2								3										5	7	1	2			71	65	8	3							1				
2E-06	ベルト3c	4673				18	73	46	2	15				1	1	6	7										63	68	60	64			683	710	112	100			1		1	5	8	15	1		
II		10083			1	39	157	117	8	20				2		58											245	118					1781	305	1				9	33	1						
2E-18	ベルト3c	806				4	10	2	2								1										11	9					1	63	51	2	1					2					
2E-19	ベルト3c	4371	2	2		50	59	37	7					2	2	58	29										729	725	19	9	2	2	1589	1559	621	526					20	28	67	58			
2E-20	ベルト3c	4770	1			108	19	29	1	8				3	2	146	58										663	602	28	27			3	1044	1072	1215	819	1				25	33	82	90		
2F-05	ベルト3c	14726	1			139	40	29	17	4				8	11	1	6	13									187	176	18	17			3	664	544	673	497	2				26	32	27	28		
III		14673	3	2	1	201	128	97	18	21				16	3	218											1590	65	9				3388	2511	3				93	187							
3F-06	ベルト3c-①	1458				24	12	47	54	2						5	2										61	45			1	1	1242	1233	479	416	3	1			1	3	2				
2F-10	ベルト3c-①	8472	2	1		161	63	75	46	40				4	7	1	1	35	23			1					474	480	26	18	5	3	3353	3273	2827	2187	6	5			21	42	38	34			
"	ベルト3c-②	3011				8	2			4						1	1										5	4					27	28	22	5					1	3	2				
"	ベルト3c-③	9625				48	6	6	3	64						3	2										15	16	7	7			429	411	137	77					2	3	6	4			
"	ベルト3c-④	31630	1		1	153	2	14	441		1					47	36										11	11			2	1	142	142	43	31					2	3	8	9			
IV		53196	2	2		394	85	142	103	551	1			7	1	91	1										573	33	8				5194	3508	9				52	58							
1E-25	ベルト3c	1038				23	3	7	18							2	8										22	19	4	9	1	2	386	389	53	55	1				59	75	5	10			
2F-01	ベルト3c	15801	2	1		10	27	35	2	75						1	61	29									309	295	245	273	1	3	2624	2728	714	687	1		1	328	402	254	253				
2F-02	ベルト3c	4814	1	4		58	21	21	8	62			ナガニシ			21	16										1	49	47	13	10	1		882	839	204	188	2				14	15	14	13		
1F-05	ベルト3c	1545				25	5	14	1	15	1					31	7										57	72	43	51			637	680	154	128					51	44	64	46			
1F-05,1E-25	ベルト3c	12669	1	2	2	42	9	14	1	26						12	10										151	154	27	32	1		1497	1397	232	191					125	127	22	22			
V		15867	2	8	3	249	65	91	12	196	1		1	2		133										1	606	378	7			6176	1359	4			1	670	364								
2F-11	ベルト3c	26531				62	18	26	4	21				1	1	36	51										542	535	27	24	1	2	1346	1330	970	800					24	38	25	20			
2F-12	ベルト3c-①	15726				157	31	68	2	58						136	67										564	520	31	29	2	1	1527	1588	992	764	3	2			1	6	6	17	21		
"	ベルト3c-②	11641				46	36	19	5	16						1	1	32	15								160	151	10	6			1	558	527	314	204					3	1	8	8		
"	ベルト3c-③	54605	1			177	67	42	24							128	157										1	1344	1313	6	6	5	4	2732	2779	1866	1619	2	1			25	30	53	44		
VI		91853	1			442	152	155	11	119				1	1	376											1	2610	74	10			6271	4142	5		1	77	107								
1F-15(南北)	ベルト3c-①	2929				5	4	2	2							1	1										10	7	3	1	1		175	158	58	30							2				
"	ベルト3c-②	4008				3	8	7	6					1		17	8										43	39	6	2			291	306	126	92							4	3			
"	ベルト3c-③	3387				6	5	9	11							1	5										34	29	3	1			274	241	92	61					1	2	1				
"	ベルト3c-④	210733				75	16	11	28					1	2	108	67										44	57	6	8	1		705	638	175	125	1				2	5	5	8			
"	ベルト3c-⑤	8015				22	2	2	15							29	19										15	10	2				6	267	254	50	32					2	1	4			
VII	(9号土坑)	22972				111	35	31	62					3		160											159	22	9				1727	501	1				8	20							
1F-20	ブロック3c	5763				70	43	39	6	39				1	1	1	26	17									162	170	57	40	2	1	1368	1369	484	401					72	70	92	69			
VIII	(10号土坑)	5763				70	43	39	6	39				1	1	26											170	57	2				1369	484							72	92					
1F-10	ベルト3c	14327	1			157	101	76	5	63	1			9	6	1	52	23	1								618	614	182	203	8	9	3135	3029	1626	1234	3	4	1		67	82	98	100			
1F-																																															

貝種組成：貝種組成の相違をブロック別・層位別・サンプル地点別に検討する。なお、貝種組成は貝種ごとの個体数をもとに作成した。

① ブロック別相違（第67図）

まず貝層を主体的に構成しているのはイボキサゴと言える。どのブロックでもイボキサゴの比率が他より高くなっており、この傾向は変わらない。ただし、Ⅶブロックでイボキサゴの比率が90%以上を占めているのを最高とし、Ⅰブロックでイボキサゴとその他の貝の比率がほぼ1：1の状況になっているところまで、それらの比率はブロックごとに異なっている。

貝種組成を出す方法には、個体数と殻の重量を用いるものがある。個体数を用いる場合、イボキサゴのように1個体の大きさが小さな貝と、ハマグリやアカニシのような1個体の大きさが大きな貝を同等に評価することになる。また、殻の重量を用いる場合は、1個体の殻重量の重いアカニシなどの貝と、1個体の殻重量の軽いマガキやマテガイなどの貝を同等に評価することになる。どちらの方法にも一長一短あり、必ずしも適性な貝種組成を表しているとは言えないと思われる。亥の海道貝塚の場合、あまりにもイボキサゴの数が多く、全ての貝を一括に表示しようとするるとイボキサゴ以外の貝の組成がよく表れてこない。したがって、イボキサゴ以外の貝種については改めて別に表示することとした。図の右側に表示したのがこれである。イボキサゴ以外ではハマグリ・シオフキガイ・アサリが全体の80～90%を占め、この比率はどのブロックでもほとんど変わらない。ただしこの3種間の比率がブロックによって異なり、ハマグリの場合は43～67%、シオフキの場合は8～29%、アサリの場合は3～17%の間で変動している。その他の貝種としては、ウミニナ・ツメタガイ・アカニシ・イボニシ・アラムシロ・マガキ・オキシジミガイ・マテガイ・オオノガイがありそれぞれ5%未満程度の比率で存在している。また稀少種として、ヨメガカサ（幼貝）・スガイ（ふたの部分）・カワザンショウガイ・カワニナ・シマハマツボ・イボニシ・バイ・ナガニシ・カガミガイ・ハイガイ・サルボウガイ・ヤマトシジミガイ・ウネナシトマヤガイ・バカガイ・ムラサキガイがある。

② 層位別相違（第68図）

ブロック内で貝層の断面観察から、層位の区分が可能だったのはⅣブロック・Ⅵブロック・Ⅶブロックである。

Ⅳブロックでは、まず①層と②・③・④層の間でイボキサゴの比率が大きく異なっている。①層はイボキサゴの比率が19～54%程度であるのに対して、②・③・④層では93～98%にまで増加している。また同じ層として認定していながら、①層の3F-06と2F-10ではサンプル地点の相違（ただし2つのサンプル地点は隣り合っている）がイボキサゴの比率の差として表れている。次にイボキサゴ以外の貝種をみると、①層ではハマグリ・シオフキガイ・アサリの比率が高く、90%以上を占めている。なおサンプル地点の異なる3F-06と2F-10ではハマグリ・シオフキガイ間の比率が異なっており、ここでもサンプル地点の相違が貝種組成の相違として表れている。②層以下をみると②・③層ではハマグリ・シオフキガイ・アサリの比率が①層ほどではないものの80%以上を占めているが、ウミニナ・ツメタガイ・アカニシ・アラムシロなどの巻貝類の増加が目立ち、①層で6%程度であったものが18%にも及んでいる。さらに④層になると、ウミニナ・アカニシ・アラムシロの比率は実に70%にも達している。

Ⅵブロックでは、①・②層と③層とでイボキサゴの比率に変化がみられる。①・②層で約60%を占

めていたものが、③層では40%に減少し、イボキサゴとそれ以外の貝種の比率がちょうど逆転している。イボキサゴ以外の貝種の組成は、アサリ・ハマグリ・シオフキガイがほぼ90%を占める在り方で層位による違いはほとんど認められない。ただし、他のブロックの貝層と異なりアサリとシオフキガイの比率が高くなっている点は注意される。

VIIブロックでは、①～⑤層までイボキサゴの比率が90～95%と非常に高く変化はほとんどない。その他の貝種でも、ハマグリが60%前後を占め、マガキ・アサリ・シオフキガイがこれにつき全体で90%前後を占める傾向は各層間に共通する。ただし、ハマグリの上に多いシオフキガイは下層にいく程減少する傾向にある。

③ サンプル地点別相違（第69図）

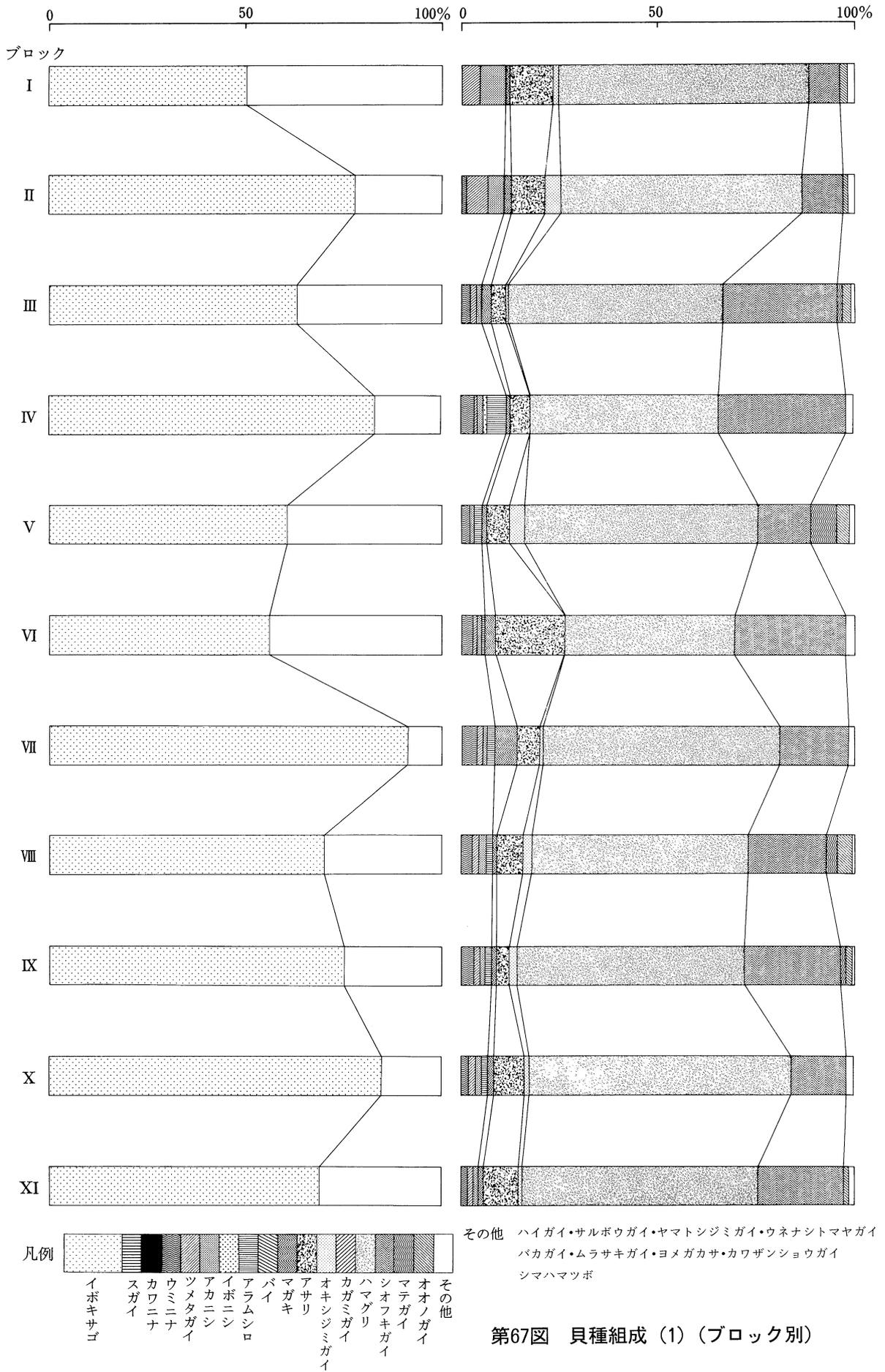
前述のIVブロックの貝層の記載の中で、同一層に認定したものでも、サンプル地点が異なったことによって貝種組成に相違のみられる点が認められることを示した。亥の海道貝塚では、IVブロック・VIブロック・VIIブロック以外の箇所では、断面観察の結果ブロック内を細分することができず、単一層として扱ったが、サンプルはグリッド別に採取した。グリッド別に採取したサンプル間に貝種組成の相違が認められるかを見当するのがここでの狙いである。

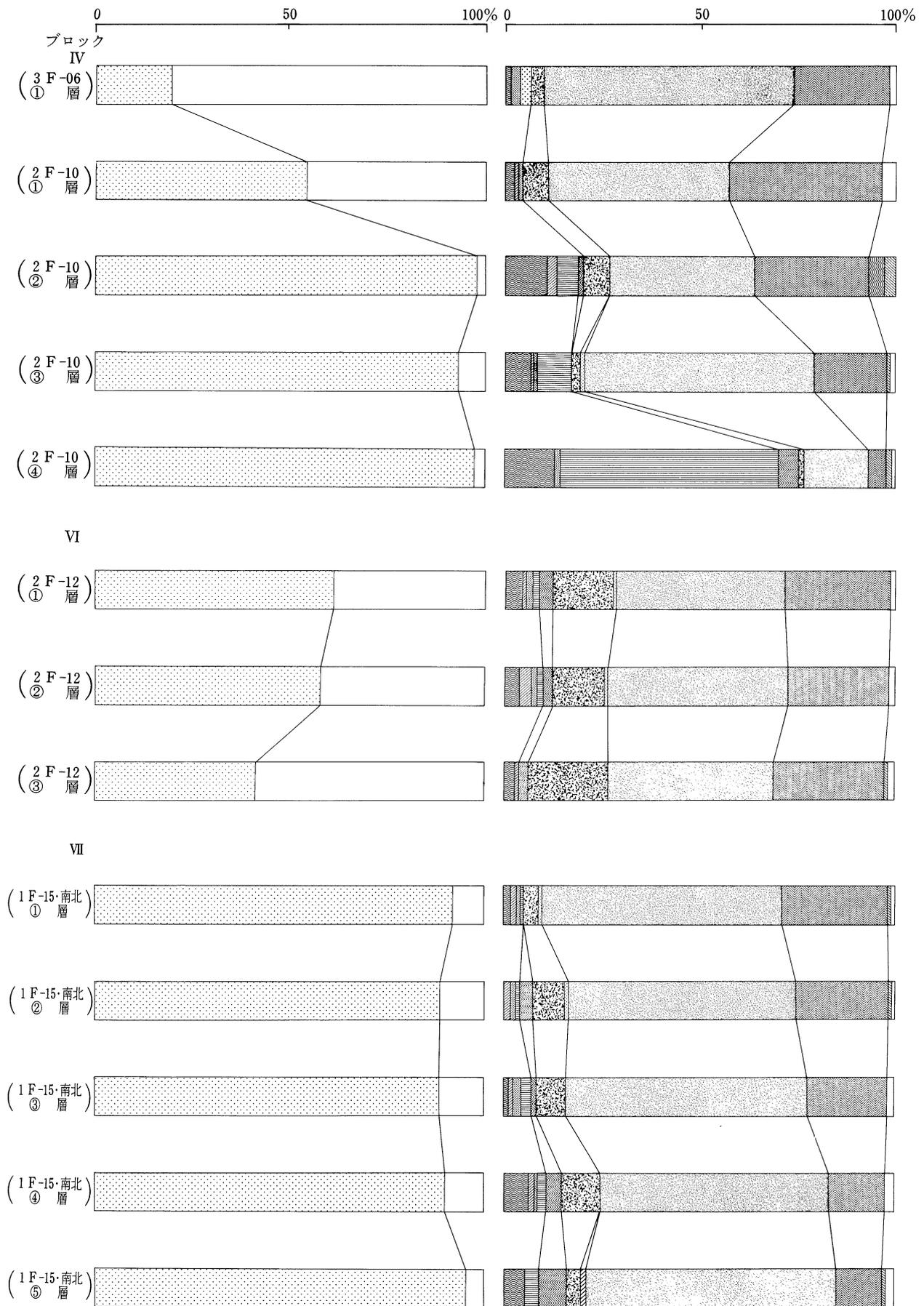
IIブロックでは、サンプル地点の相違によって4地点のサンプル間のイボキサゴの比率に64～90%までのバラツキが認められる。しかしその他の貝種については、アサリ・オキシジミガイ・ハマグリ・シオフキガイがそれぞれの比率をほとんど変えずに84%程度で存在しており、ほぼ共通した様相をみせる。IIIブロックでは、サンプル地点の相違によって4地点のサンプル間のイボキサゴの比率に57～89%までのバラツキが認められる。またその他の貝種の組成でも、アサリ・ハマグリ・シオフキガイの比率にサンプル地点間に相違が認められる。

Vブロックでは、1地点を除き4地点間のイボキサゴの比率が57～63%とほぼ共通する傾向を示す。またその他の貝種でも、ハマグリが60～70%を占め、アサリ・オキシジミガイ・シオフキガイ・マテガイ・オオノガイがこれに次ぐ傾向は、各貝種間に多少の比率の差はあるものの5地点のサンプルにほぼ共通性が認められる。

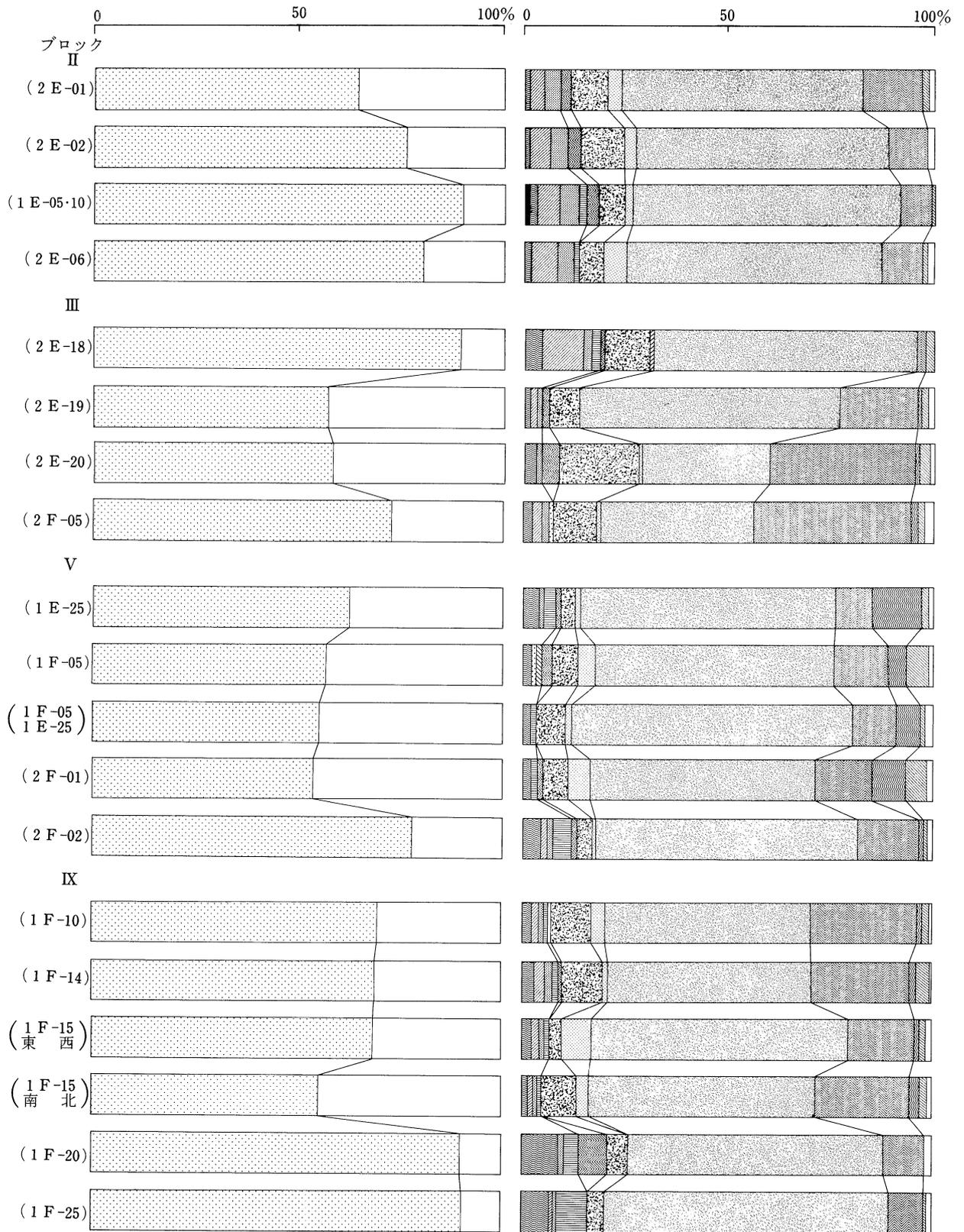
IXブロックでは6地点のサンプル中4地点には共通性が認められるが、2地点に若干の様相の違いが見受けられる。4地点ではイボキサゴの比率が55～70%を占めているが、1F-20と1F-25の2地点では90%を占めている。またその他の貝種の組成でも、4地点ではハマグリを主体にアサリ・オキシジミガイ・シオフキガイ・マテガイ・オオノガイなどで構成されているが、2地点ではハマグリ比率が若干高くなり、シオフキガイが減少しマテガイ・オオノガイもほとんど見られない。またウミニナ・アラムシロなどの巻貝の比率が4地点よりも高くなっている点も指摘できる。

X・XIブロックは、本来地点の離れていた小ブロックを一括して扱ったため、各地点ごとに貝種組成はかなり異なった様相を呈していることが予想された。ただし、Xブロックの場合は、同一住居址内の隣り合う柱穴内に形成された貝層であり、ある程度の共通性があることも予想されたのである。結果は、イボキサゴの比率、その他の貝種の組成からみて7地点のブロックを2種類のグループに分類可能とみなした。ひとつは①・②・③・⑥のグループで、イボキサゴの比率が59～79%で、その他の貝種ではハマグリを主体にシオフキガイ・アサリがこれについている。これに対し④・⑤・⑦のグループは、イボキサゴの比率が87～98%と極めて高く、その他の貝種ではハマグリ比率は高いもの

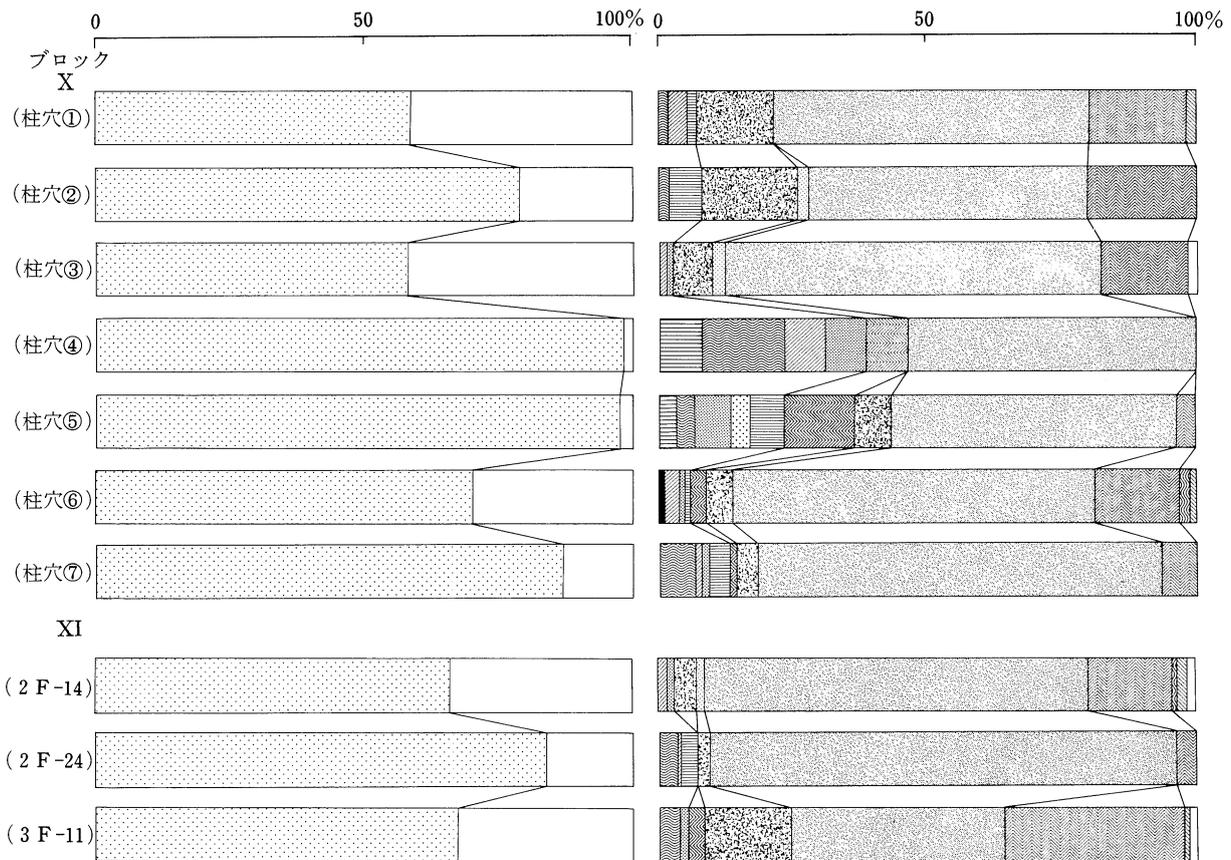




第68図 貝種組成 (2) (層位別)



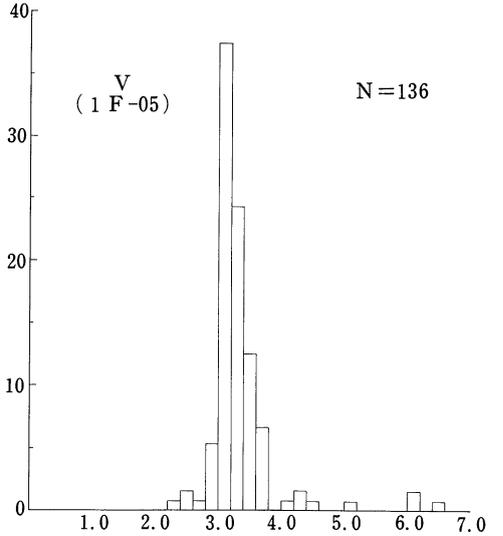
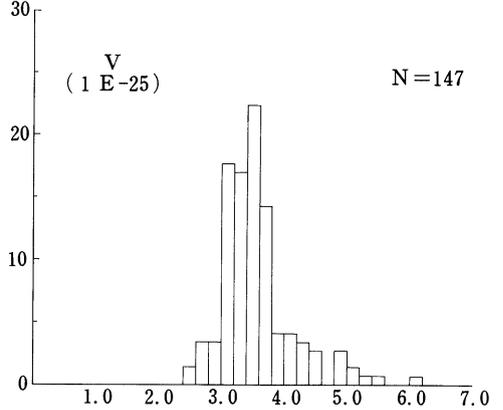
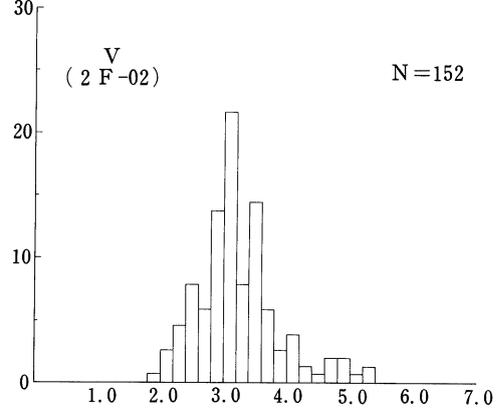
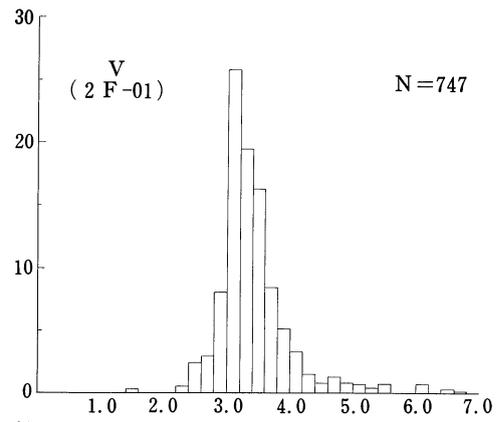
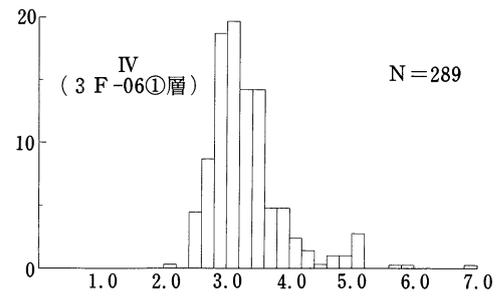
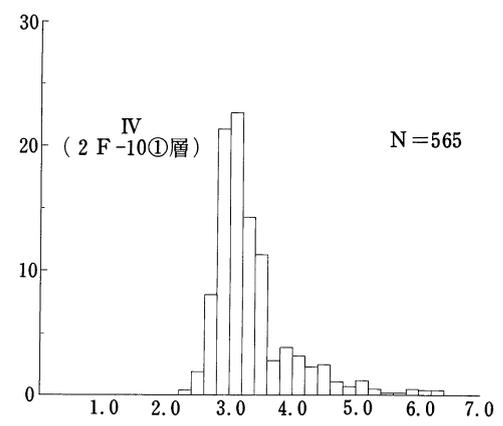
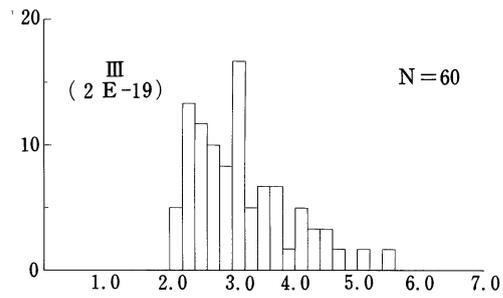
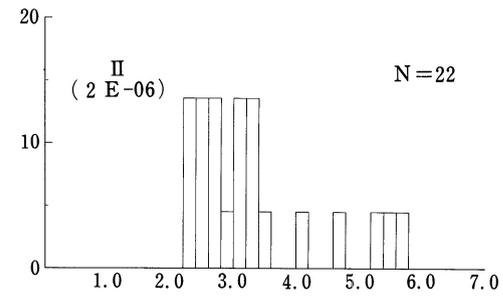
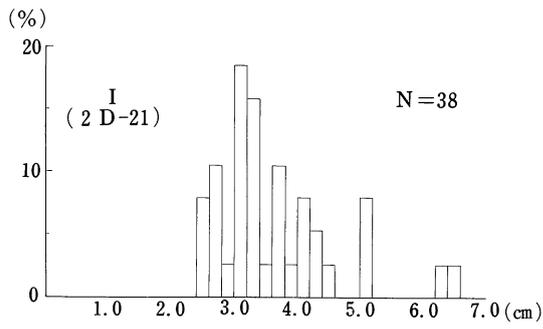
第69図 貝種組成 (3) (サンプル地点別)



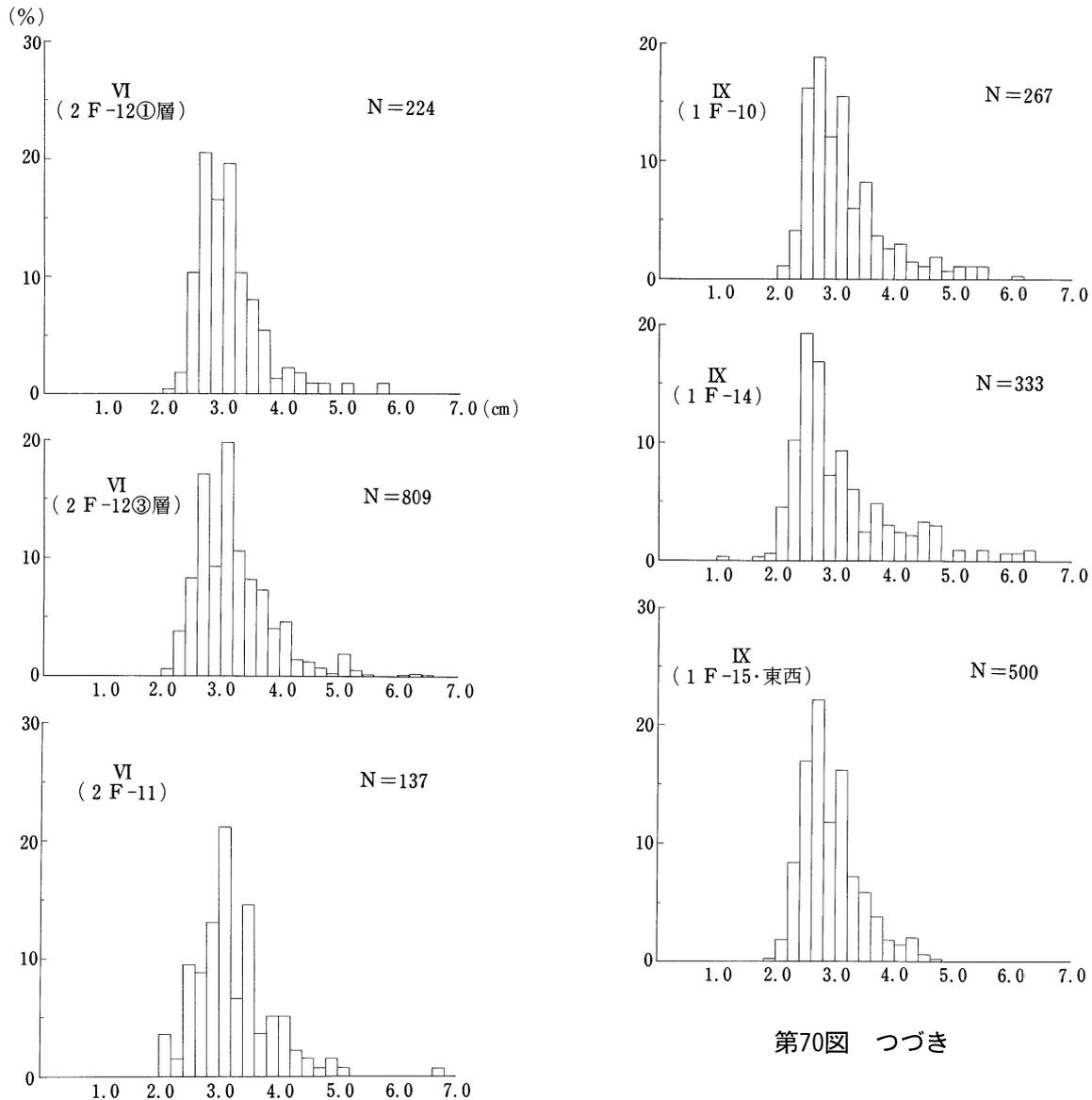
第69図 つづき

の、シオフキガイ・アサリの比率が低く、そのかわりにマガキやアラムシロ・アカニシ・ウミニナといった巻貝の比率が高くなっている。

貝層の分層は、分層する各層の間に、ある程度の時間的断絶を想定し、さらにその背景にある採貝活動や採貝後の貝の処理、廃棄行為の相違を導くための手段としておこなわれている。亥の海道具塚での貝層サンプルの貝類の分析結果のうち、前述した貝種組成のブロック別・層位別の相違は、背景にあると推定される人間の行為の検証のために有意義なデータとなると考えられる。ただし、発掘現場で一つの層と認定した（分層できなかった）貝層の中に、サンプル地点によってその内容に顕著な差を認めることができるものがある事実は、貝層の分層方法・貝層サンプリングの仕方に対しての問題提起となるものと思われる。貝塚調査に際して、ある限られた部分の貝層サンプルを詳細に分析して全体の貝塚の傾向を復元しようという方法をわれわれは少なからずおこなっている。貝塚の情報量には計り知れないものがあるということは、現在では誰しもが認識していることではあるが、調査に対する時間と労力には限度があり、貝層の全てを詳細に分析することが最良の方法とは理解していてもこれをおこなうことは余程恵まれた環境がない限りは不可能である。そこで、必要最少限のデータからより多くの有効な事実を導き出す努力をしているわけであるが、貝層全体の情報の復元に必要な適性なサンプル量についてはいまだに検証されてはいない。このような状況下で、コラムサンプルというかたちで、ある地点の貝層を定量的に幾つか採取して分析することで貝層全体の復元を試みるが、この際、比較的小規模なブロック状の地点貝層であっても亥の海道具塚の事例のように、同一ブロック内の近接した箇所でもその内容は異なっている可能性があるということを確認し、できる限りサンプル箇所を増やす必要があると思われる。



第70図 ブロック別ハマグリノ殻高分布



第70図 つづき

主要二枚貝（ハマグリ）の殻高変化：貝層を構成している二枚貝の主体種であるハマグリの殻高の分布を、ブロック別にグラフに示したのが第70図である。計測可能な貝は全て計測し、同じブロックでも可能なものは、層位別・サンプル地点別に同一ブロック内のデータを示した。

まず、全体の傾向からすると殻高3.0cm前後にピークをもち2.0から4.0cmくらいの間に山をつくる分布状況を示すが、ブロック別にみると、I・III・IV・V・VIではピークが3.0～3.2cmにあるが、IXブロックでは2.4～2.8cmのところピークをもち、やや小振りの貝の多いことを示している。またIXブロックでのこの傾向は3つのサンプル地点それぞれに見られる傾向でもある。サンプル地点別のデータとしては、この他にIV・Vブロックの資料を示したが、IVブロックでは極めて類似した分布状況がみられるが、Vブロックでは2F-01・2F-02に3.0～3.2cmにピークをもち共通する分布状況を見るが、1E-25では3.0～3.8cmまでが突出する状況、1F-05では3.0～3.4cmまでが極めて突出する状況が確認でき、ここではサンプル地点によってハマグリの大きさが異なっていることが指摘できる。また層位別のデータとしては、VIブロックの2つの異なる層の間に極めて類似する分布状況がみられる。

微小貝種

第14表に3c層から検出された微小貝の種名を、第15表に出現数を記した。またブロック・層位・サンプル地点別の検出量の変化が把握しやすいように、第29・30図にグラフで示した。微小貝の大きさはおおむね4 mm以下なので、詳細サンプル中からは検出できるが、簡易サンプルではほとんど検出できなかった。微小貝は全てのブロックで検出されているが、Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸブロックから多く出土し、特にⅨブロックでは多量に検出されている。また同じブロックでも、同一層として採取したうちの特定のサンプル地点から集中して検出される状況が認められるところがある（Ⅲブロック：2F-19・2F-20、Ⅴブロック：2F-01、Ⅸブロック：1F-15(東西)・1F-15(南北)）。Ⅵブロックでは、3層に分層されたうち、②層を挟んだ上下の①・③層に集中して検出される状況がみられる。

第14表 出土微小貝種名一覧

ミジンヤマタニシ <i>Nakadaella micron</i>	ハリマキビガイ属の一種 <i>Parakaliella</i> sp.
ヒダリマキゴマガイ <i>Palaina</i> (<i>Cylindropalina</i>) <i>pusilla</i>	ヒメベッコウマイマイの一種 <i>Discoconulus</i> sp.
ゴマガイ <i>Diplommatina cassa</i>	オオウケマイマイ <i>Aegista</i> (<i>Plectotropis</i>) <i>omiensis</i>
クビキレガイ <i>Truncatella guerinii</i>	ミスジマイマイ <i>Euhadra peliomphala</i>
スジケシガイ <i>Carychium noduliferum</i>	ヒダリマキマイマイ <i>Euhadra quaesita</i>
ヒカリギセルガイ <i>Zaptychopsis buschi</i>	マイマイ属 Genus <i>Euhadra</i>
ヒメギセル? <i>Vitriphaedusa micropeas?</i>	クチキレガイモドキ <i>Odostomia desimana</i>
オカチョウジガイ <i>Allopeas clavulinum kyotoense</i>	カゴメイトカケギリ <i>Dunkerta shigeyasui</i>
ホソオカチョウジガイ <i>Allopeas pyrgula</i>	コメツブガイ <i>Decorifor insignis</i>
ヒメコハクガイ <i>Hawaiiia minuscula</i>	

本貝塚の貝層中には鹹水産貝類に混じって多くの陸産貝類を主とする微小貝が埋存していた。その種類も多く、この地域のこの種の貝種としては最も多くの種類が検出されたことになる。貝塚中の微小貝類は、貝塚によって一様ではなく、量・種類の多寡はいろいろあるようである。これらは貝塚形成期の自然的な条件、特に貝塚周辺の地形・植物の生育の条件と関係が深いからである。筆者は最近調査を進めている下総台地周辺域の後期貝塚、あるいは武蔵野台地東部の同時期の貝塚では、いずれもかなりの量のこの種の貝が検出されるのが普通である。いずれこうした貝塚の資料が明らかにされ、遺跡間の比較が行われるようになれば、さらに地域性や時期差が考えられてくるものと思われる。

本貝塚の調査で検出された微小貝種でもっとも多かつたのはホソオカチョウジガイで（本種と近似種のオカチョウジガイは極めて少なかった）、幼貝・成貝ともにみられた。これとほぼ同じ位の量が検出されていたのはヒメベッコウマイマイの一種であって、ブロックによってはヒメベッコウマイマイの方が多量であったようである。ホソオカチョウジガイは平地性で、原野・庭園にすむ。つまり貝塚の周辺がかなり開けた植生状況になっていたことが推測される。これに次ぐのがヒメコハクガイであるが、これもブロックによってはホソオカチョウジガイを量的に凌ぐような状況のみられることもあり、ヒメコハクガイの生息する条件も普通にみられたように思われる。ヒメコハクガイは平地性で、灌木の根元・枯れ葉の下に生息する。したがって、こうした樹木も貝塚の周囲にはあったのである。やや大型の貝になるキセルガイ類も多い。これについては、なお精査する必要があるが、1F-15ベルト3cのキセルガイ19点はすべてヒカリギセルであった。おそらく本種が多いのではないと思われる。本種も落ち葉などの堆積地にすむ。同じ条件下に生息する貝にゴマガイ・ヒダリマキゴマガイがあるが、この種は山地性である。貝塚周辺の微地形が反映しているのであろう。

他にミジンヤマタニシ・キビガイ類も落ち葉間に、クビキレガイは海岸砂浜、クチキレガイモドキ・カゴメイトカゲギリ・コメツブガイは内湾の砂泥底にすみ、大型の貝を採る際に一緒にあがったのであろう。

b 節足動物門 Phylum ARTHROPODA

甲殻綱 Class CRUSTACEA

甲殻綱として、フジツボ (Balanus)・カニ・カシパンウニが検出されている。

フジツボはその名のとおり、富士山のような形態を呈する付着性の生物であり、外側は割合滑らかであるが内面にヒダ状のしわを有する。検出資料はいずれも壊れたかたちの破片として存在するので、個体数の算定はできない。したがって、第5表には3c層から検出された破片数と重量を記した。またブロック・層位・サンプル地点別の検出量の変化が把握しやすいように、第29・30図にグラフで示した。フジツボの大きさは、おおむね4 mm以下であるので、詳細サンプル中からは検出できるが、簡易サンプルではほとんど検出できなかった。ブロックではIブロックを除く全ての箇所で見出されているが、IV・VI・IXブロックから多く出土し、特にVIブロックでは多量に見出されている。また同じブロックでもVIブロックでは①層と③層に集中がみられ、またIXブロックでは同一層として採取したうちの1F-15(東西)のサンプル地点に集中がみられるという興味深い状況がみられる。VIブロックの特に③層では重量にして145.4 g、破片数にすると実に8,226点が検出されており、この集中のしかたは尋常ではない(図版14)。フジツボは貝などに付着していたものがたまたま集落内に持ち込まれ、それらと共に廃棄されたと通常は考えられているが、この状況を見るかぎりには偶然持ち込まれたというよりも、意識的に集められまとめて廃棄されたとみるほうが妥当であるように思われる。

カニのはさみの部分の破片がIVブロック2F-10・3F-06 3c層から検出されている。残存長8 mmの小片で被熱している。またカシパンウニの破片が、VIブロック 2F-12ベルト3c-①層より1点検出された。

c 脊椎動物門

市原市山田橋亥の海道具塚出土の動物遺体

第16表 検出された脊椎動物遺体の種名表

脊椎動物門 Phylum VERTERRATA

1. 軟骨魚綱	Class CHONDRICHTHYES
メジロザメ科の一種	Charcharhinidae gen. et sp. ind.
カスザメ科の一種	Squtinidae gen. et sp. ind.
エイ目の一種	Rajiformis fam. ind.
2. 硬骨魚綱	Class OSTEICHTHYES
マイワシ	Sadinops melanosticta
カタクチ	Engraulis japonica
サケ属の一種	Oncorhinchus sp.
コイ科の一種	Cyprinidae gen. et sp. ind.
ウグイ	Triborodon hakonensis
ギギ科の一種	Bagridae gen. et sp. ind.
ウナギ	Anguilla japonica
ボラ	Mugil cephalus
ダツ科の一種	Belonidae gen. et sp. ind.
サヨリ属の一種	Hemiramphus sp.
カマス類	Sphyraena sp.
スズキ	Lateolabrax japonicus
キス	Sillago sihama
イシモチ	Argyrosomus argentatus
マダイ	Pagrus major
クロダイ	Acanntopagrus schlegeli
ヘダイ	Sparus sarba
マアジ	Trachurus japonicus
ブリ	Seriola quinqueradiata
サバ類	Somber sp.
ハゼ類	Gobbiidae gen. et sp. indet.
フグ目の一種	Tetraodontiformes fam. ind.
カサゴ属	Sebastes sp.
コチ科の一種	Platycephalidae gen. et sp. ind.
コチ	Platycephalus indicus
ヒラメ	Paralichthys olivaceus
カレイ科の一種	Pleuronectidae gen. et sp. ind.
ウシノシタ科の一種	Cynoglossidae gen. et sp. ind.

3. 両生綱	Class Amphibia
ヒキガエル	<i>Bufo bufo formosus</i>
4. 爬虫綱	Class Reptilia
有鱗目の一種	<i>Ophidia gen. et sp. ind.</i>
5. 鳥綱	Class Aves
ガンカモ科の一種	<i>Anatidae gen. et sp. ind.</i>
キジ	<i>Phasianus colchicus</i>
6. 哺乳綱	Class MAMMALIA
モグラ	<i>Mogera wogura</i>
ノウサギ	<i>Lepus brachurus</i>
ネズミ科	Muridae
クジラ目, 科不明	Cetacea Fam. indet.
イルカ科の一種	<i>Delphinidae gen. et sp. indet.</i>
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
イタチ	<i>Mustela sibirica</i>
テン	<i>Martes melampus</i>
アナグマ	<i>Meles meles</i>
ウマ	<i>Equus caballus</i>
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

脊椎動物遺体についての概要 (第17・18・21・22表)

1. 軟骨魚綱 Class CHONDRICHTHYES

サメ目 Order Lamniformis

歯と椎骨が検出されている。歯はメジロザメ科もしくはこれに近縁の科のものと思われるが、出土している標本はいずれも小さいものであった。椎骨もこの科の特徴をもつ形態のもののみであった。

カスザメ科 Famiry Squatinidae

ごく僅かの椎体を検出しているのみである。

エイ目 Order Rajiformis

分離した歯板と椎骨である。歯板は細長い六角形を呈するものでトビエイ科に属する魚種のものであるが、おそらく普通のトビエイとされている種類ではないかと思われる。従って一緒に出土している椎体も同じ種類ものとみてよいであろう。

エイ類の遺体としてはこの他に尾刺の破片が何点か出土している。エイ類の尾刺は刺突具として利用されるが、今回の発掘資料中にはこうした製品はなかったようである。

2. 硬骨魚綱 Class OSTEICHTHYES

ニシン目 Order Clupeiformes

多数の骨が検出されているが、それらはすべて椎骨であって、第1・2腹椎骨を別にする種類や個体数を確認するために有効な顎骨あるいは頭骨の一部の骨はほとんど検出することができなかった。マイワシが主たる種類で、カタクチが少数それに加わるものと思われる。

サケ目 Order Salmoniformes

サケ属の一種 *Oncorhynchus* sp.

サケ類と判定した標本はただ1個の歯があったのみである。大型の円錐形を呈した歯であるが、形状が必ずしもサケ科のものに一致するわけではないが、他の魚種の歯とする積極的な理由もないので、とりあえずサケ科のものとしておく。この種の遺骸が東京湾沿岸貝塚で検出されたことは、今回が初めてではないが、もちろん稀である。そして若し今回の標本がサケ類として問題ないとなれば、サケの出土例としてもっとも確かなものになるだろう。

コイ目 Order Cypriniformes

コイ科 Family Cyprinidae

少数の咽頭骨と背鰭第一棘がある。咽頭骨は完存せず、分離した歯があったのみである。背鰭の棘は鋸歯をもつものでコイ科のものにみられるが、咽頭骨の出土から考えておそらくコイのものであろう。

ギギ科 Family Bagridae

少数の胸鰭の第一棘がある。関東地方の貝塚での出土例としては珍しい種類であり、標本である。これはギギのような淡水産の魚の捕獲に適した場所に立地した貝塚の調査例が少ないために、遺骸をみるのが稀なのであろう。

ウナギ目 Order Anguilliformes

不確かなアナゴ類を除くと他はウナギ *Anguilla japonica* である。一個体の椎骨数が多い魚であるので、その数も多いが、標本として普通検出され易い歯骨なども本遺跡では少なかった。もちろん、その他の部位の骨もごく稀に検出されているだけである。

ダツ目 Order Beloniformes

ダツ科 Family Belonidae

ごく稀に遺骸の一部をみたのみである。

サヨリ属の一種 *Hemiramphus* sp.

椎体の検出が目立った魚種である。本種の遺骸確認はこの地方の貝塚ではこれまでになかったが、調査整理が充分でなかったことによるのであろう。東京湾沿岸の他の遺跡でも最近確認されており、石器時代の重要魚になるのではないかと考えている。静かな内湾の表層を群れ泳ぐサヨリは縄文人にも恰好の漁撈の資源になったのだろう。

ボラ目 Order Mugiliformes

ボラ *Mugil cephalus*

全体的な出土量は多いものではないが、僅かずつの個体は捕らえられていた魚種である。椎骨を主として出土し、主鰓蓋骨、眼下骨などを1~2点程度各ブロック中に含むようである。

